

一 ふぢなみの下第六一和本、国本なし。目録に拠り補ふ。

一 ふぢなみの下第六

ゑあはせのうた

二 の一 国本なし。

三 こそ一和本、国本「この」。蓬本に拠り改む。

鷹司殿、御腹の君達の御流れは、みな申侍ぬ。高松の御腹、堀川の右大臣をと
 頼宗のおとこ三、関白にはなり給はざりしかども、女御奉りなどし給ひ、未
 の君達も、近くまで位高くをはする、あまた聞え給しか。このおとこ、御堂の第
 二の御子におはす。御母、西の宮左大臣高明のをとゞの御女也。永承二年八月一
 日、内大臣に也給ふ。御年五十四。大将もとのまゝに兼け給ひき。康平三年に、
 右大臣に也給き。御年七十三と聞えき。

四 一 遇一 国本「二 遇」

和哥の道、昔にも恥ぢずをはしき。哥詠みは、貫之、兼盛、堀川の大殿、千載
 の一遇とかや、ある人侍ける。申出したる人は、へ聞侍らず。御集にもすぐれ
 たる哥多く聞え、撰集にもあまた入り給へり。いたく人の口ならし侍御哥は、花、
 紅葉、七夕、千鳥など、数知らず聞え侍めり。中にも恋の歌は、いたく人の口ず

一 こそざく院—国本「故こそざく院」

さみにもし侍、多く見え給へり。「恋はうらなき」など詠み給えるぞかし。此御哥のさまは、めづらしき心を先にし給えるなるべし。

帥（伊周）の内（まろ）の大臣、御女の御腹に君達あまたおはしき。後朱雀院の御時、女御奉りに参り給へりし、麗景殿（れいけいでん）の女御と申なるべし。帝かくれさせ給ひて後、里にまかり出で給へりけるに、植ゑ置き給へりける萩を、又の年の秋、人の折りて侍りけるを見給て、詠み給ける。

去年（こぞ）よりも色こそ濃けれ萩の花涙の雨のかゝる秋には

二 中納言—和本、国本「中納」。蓬本に抛り補ふ。
三 をはせ—和本、国本「をせ」。蓬本に抛り補ふ。

その女御の生みたてまつり給へりける姫宮（ひめのみや）、賀茂のいつきと聞え給き。この宮絵合し給しに、「卯の花咲ける玉川の里」相模が詠めるは、名高き哥に侍るめり。三君は、後三条院の春宮と申し時、御息所に参り給へりき。このをとゞの太郎にては、兼頼の中納言おはしき。御母女御のひとつ御はらから、いと末のはかしくしきも、三をはせぬなるべし。次には右大臣俊家のをとゞ、大宮の右の大臣と聞へ給き。この御末多く栄え給めり。

その御子は宗俊の大納言、御母宇治の大納言隆国の女なり。管絃の道すぐれてをはしけり。時光といふ生の笛吹に習ひ給けるに、大食調の入調を、いま〜とて、年へて教へ申さゞりける程に、雨かぎりなく降りて、暗闇しげかりける夜出て来て、「今宵かのもの教へたてまつらむ」と申ければ、いぶかりて、とく〜

ふに、けしきかはりて、太郎にて侍ける公里が前なりけるを、「この童に教へ侍りて後にこそ、こと人には授けたてまつらめ。是はたちまちに思し寄るまじきこと」といひければ、「この君伝へられむこと、たちまちの事にあらじ」とて、名簿取り返して、帰り出で、年へける後、心深くうかゞひて、聞かむとする也けり。昔のものゝ師は、かくなむ心深くて、たはやすくも授けざりける。その大納言は、さやうに道をたしなみて、やむごとなくなむをはしける。

から人のあそび

按察の御子には、備中守実綱といひし博士の女の腹に、右大臣宗忠のをとゞ、又堀河の左の大臣の御女の腹に、太上の大臣宗輔など、近くまでをはしき。右の大臣は中の御門のをとゞとて、催馬楽の上手にはして、御遊には常に拍子とり給けり。

御才もをはして、尚齒会とて、年老たる時の詩つくりの七人あつまりて、文作る事行ひ給ひき。唐国、白楽天ぞ序書き給て、行ひ給へりける。此国には、是

加へて、三度になりけり、唐国には二度とて、まさりたる事にて聞へ侍しに、近

一 をとゞ一和本、国本、をと。蓬本に拠り補ふ。

二 上ず一国本「上首」

三 なゝたり一和本、国本、蓬本「なゝた」。板本に拠り補ふ。

一 の一和太、国本なし。蓬本に扱ひ補ふ。

く渡りたる唐人の、又後に行ひたる、もて渡りたりけるとぞ聞ふ侍し。年の老たるを上臈にて、庭にゐならびて、詩作りなど、遊ぶことにぞはべなる。この度は、諸陵頭為康といふ翁、一座にて、その次に、このをとゞ大納言とてをはしけむ。いとやさしく侍にし。蔵人の頭よりはじめて、殿上人垣下して、唐人の遊のごとく、この世の事も見えざりけり。

弟の宗輔の太政大臣は、笛をぞきはめ給へりける。あまり心ばへ古めて、この世の人にたがひ給へりけり。菊や、牡丹など、めでたくおほきに作り立て、好み持ち、院にも奉りなどして、ことぐの世の用事など、いと申給ふとなりけり、あまり足ぞはやくおはすとて、御供人も追ひつき申さざりける。思ひかけぬ事は、蜂といひて、人刺す虫をなむ好みて飼ひ給ける。唐なる紙などに蜜塗りて、10 擗けてありき給へば、いくらともなく飛び来て、遊びけれど、つゆ刺したてまつる事せざりけり。足高に、角短、羽斑などいふ名つけて、呼ばれければ、召にしたがひて、聞ふ知りてなむ来つゝ群れあける。

五 も一國本「もち」

上などいふ人も、いとも定め給はざりけるにや、幼き女のわらははをぞ、あまた御ふところには伏せてをはしける。知り給所より、なにもて来らむとも知り給はで、預かりたるものなど、取り出づる事あれば、「こはいづこなりつるぞ」などいひて、世によるこび給けりとぞ。親は大臣にもなり給はざりしかども、この

一 みの、守―国本「美の、守」

二人は、高たかくいたり給へりき。

中御門(宗忠)のをとゞの御子は、宗能の内大臣と聞え給ふ。美濃守行房の女にやは

すらむ。大臣も辞じへ給て、御髪をろして、まだをはずとぞうけ給はる。少しを

なしき人だにこの世にはをはず、いかなるにか、若き人のみ上達部かみだらめどもにもを

二 あまり―和本、国本「あままり」。蓬本に
抛り改む。

はする世に、八年にやあまり給ぬらむ、ひとり残り給へるにこそ。宰相の中将な

三 一―国本「と」

ど申し程に、内に直衣許なをしゆるさりてををしけるとかや。讃岐の御時、御身親み

四 したしき―和本、国本「したしたき」。蓬
本に抛り改む。

き上達部かみだらめにもをはずぬに、思ひかけずなど聞えき。わきの閑白かな、ぞあざける

人などをはしけるとかや。おほかたは事にあきらかに、はかしくをはして、

御さかしらなども、し給へばなるべし。

五 こゝろみ―国本「こゝろみ」

やすき事ことなれども、幼くをはします帝、常には五節の帳台の試みに、出でさせ

六 おとな―和本、国本「な」。蓬本に抛り補
ふ。

給事きじまれなるに、讃岐の帝おとなにならせ給て、はじめて出でさせ給しに、御指

貫ぬき、なにの紋といふ事も、納殿おまのどの、藏人おぼつかなく思へるに、「叢地に窠の紋ぞ

かし」などぞ、藏人の頭かぶにををしける時、の給などして、さやうの事あきらかに

ををしき。帝の御指貫奉ることは、一年にたゞ一度ぞおはしませば、おぼつか

七 ことはり―和本、国本「ことはり」。蓬
本に抛り改む。

く思へる。ことことはりなるべし。このおとゞも、催馬楽の上手にをはして、御声め

でたくをはずと。その御子は、贈左大臣長実の女の御腹はらに、中納言(宗家)とておはずと
ぞ。

右(宗忠)の大(宗忠)臣(宗忠)の御(宗忠)子(宗忠)には、又左大弁宰相宗成とてをはしき。又刑部の少輔宗重とて、琵琶弾き給人をはしける。なにごとの侍りけるにか、夜河原にて、はかなくなり給にけり。いかなる敵を持ち給へりけるにか。また山階寺に、覚暗僧都と申しも、皆同じ御腹なるべし。その僧都こそ、すぐれたる智者にをはずとうけ給はりしか。法もよく説き給とて、鳥羽院などにも、御講つとめ給ひき。宗輔の太政大臣の御子は、前の中納言兵部卿と申とかや。笛も、親の殿ばかりはをはずやあらむ、吹き給ふとぞ。

大宮(俊家)の右の大(俊家)臣(俊家)の君達あまたをはしき。宰相の中將師兼と申も、その御子(家朝)に少將をはしき。宰相の弟に、基俊の前の左衛門の佐と申しは、下野の守順業と聞えし女の腹にやをはしけむ。その左衛門の佐は、哥詠み詩作りにておはずと聞え侍しが、さばかりの人の、五位にてやみ給ひしこそくちをしく。あまりすぐれて、人似ぬ事などのけにやありけむ。「岩漏る清水いくむすびしつ」など詠み給へるぞかし。九十許までをはしき。七の翁にも入り給へりけるとぞ聞へ侍し。山の座主寛慶と聞へしも、大宮のおとゞの御事を聞えし。大乗房とや申けむ。

たびねのとき

末の子にやははしけむ、大納言宗通の民部卿と申しこそ、大宮殿御子には、
 むねとよきめき給しか。末もひろく栄へ給へり。白川院をぼえにをはしき。阿古
 丸大納言とぞ聞え給ひし。歌などもをかしく詠み給ひけるにこそ。行尊僧正の夜
 居して、独鈷忘れ侍りける、つかはすとて詠み給へるこそ、いと昔の心ちして、

草枕さこそかりねの床ならめ今朝しも起きて返べしやは

返しは劣りけるにや、え聞侍らざりき。

その君達、顯季の三位の女の腹に多くをはしき。信通の宰相の中將と申し、笛
 よく吹き給けり。是も世をぼえをはずと聞え給ひき。白川の院の、殿上人に武者
 の装束せさせて、御覽じけるに、滋目結の水干着て、胡篋負ひ給へりけるこそ、
 品のすぐれてをはしにや、ことひとは供人のやうにて、この君こそ主などいは
 むやうにおはしける、と人の申し、ひがごとくや。わらはやみして失せ給にける
 とぞ聞侍りし。いと人の死なぬ病とこそ常は聞侍に。

おほかたはこの御末、御物けのこはくをはするにや。民部卿の失せ給ける程

一 のたまはせー和本、国本「のたませ」。蓬本に拠り補ふ。

二 まさしくも一 国本「まさしく」

にも、「家正まさがありつるは、まだあるか」などのたまはせければ、「さも侍らず。はかなくなりて、年としへ侍にしものは、いかでか侍らむ」など、人申ければ、「うやかきて、まさしくもありつるものを」とのたまひけるは、その家正いふまさといふが、親おやの譲ゆづりりたる所ところを取り給けるを、からく思ひける程ほどに、「寄文よせぶみを奉れ、預あづけむ」と侍れば、よろこびて奉りけれど、預あづからざりけるとぞ聞え侍し。

家正まさとは、さねしげとて、式部の大輔しきぶとか問ゆるが、をぢになむ聞えし。故宰こさい相あひまの失うせ給けるにも、「卿おのの殿とのをはしまさねば、侍まじはむとて」などいひて、出いで来きたりけるとかや。さてその所ところは、女むすめ尋たづね出して、返かへさるなど聞え侍し。後のちはいかゞ侍りけむ。

これならず、大宮おほのみやの大臣おほの殿との物ものけなどいふものも侍なり。年老たりける僧そうの知しる所ところ侍けるを、それも妨さまたげ給ければ、参まゐりて、中門ちゅうもんの郎らうに、つとめてより日暮ひぐるゝまであたりけれど、家人い家人も御ごけしきにやよりけむ、申も繼つがざりけるを、民たみ部べ卿おのの幼こくて、うつくしき若君わがみの、遊あそびありき給に、この僧そうのいとをしく、つくぐと居おりければ、とぶらひて、「われ申さむ」とて、殿とのに申給ければ、人出いして問とはせ給けるに、「しかぐの所ところの事こと、訴うへ申侍」と申ければ、そのよしある事ことなど、こまかにいひ出し給けるを、「事はりの侍らむは、とかく申べくも侍らず。年来も知るべくてこそは、久ひさしく知り侍らめ。なにかは申べからず。命いのちの絶た

一 伊よ一國本「伊与」

え侍なむずる事のかなしく」と申けれど、いはれのあればとて、かなひ侍ざりければ、「いかにも命絶え侍なむとす。たゞし若君をば、情をはしませば、まもりたてまつらむ」と申けれど、それも物ゝけに出でけるを、「まもらむといひしは」などありければ、「さ申契り思ふ給れば、まもりたてまつるに、そのゆかりと思によりて、をのづから参り寄るなり」とぞいひける。

宰相(前通)の中將の君達は、基隆の三位の女の腹(はら)に、行通(前通)の中將と聞え給し、つかさも辞(じ)ゝ給へりし、法師(ほうし)になりてをはずとぞ。事腹(前通)のいまひとりをはすとかや。二人ながら伊予(いよ)の入道(にゅうだう)を聞え給こそ、思ひかけぬやうなる御名(ごな)ゝるべし。

ゆみのね

その宗通(むねとほ)の大納言(おほののりご)の次郎(つぐむらじ)にをせし、太上天皇(すくも)伊通(いとほ)のをとどをほしき。詩など10作り給かた、いとよくおほしけり。手(て)もよく書き給けり。よき上達部(かみたらぬ)にてをほしけるに、あまりいちはやくて、世(よ)のものいひにてをほしける。籠(こも)り給へりし折(せ)も、御幸(ごきやう)など見給て、「百大夫(ひやくだふ)変じて、百殿上人(ひやくでんじやうにん)になりけり」などのたまひ、又「籠(こも)りたるは苦しからねど、世(よ)にまじろはまほしき事(こと)は、人のいたく烏帽子(えぼし)

一 も一 国本なし。

の尻しりの高たかくあげたるに、うなじのくぼに結ゆひてむとも思おもふなり」など、世よに似にぬやうにのたまひけり。又信頼のぶよりの衛門ゑもんの督かみ、武者むさしをこして後のち、除目ぞくめ行こなへりし、見給みたまては、「など井いはつかさもならぬにかあらむ。井こそ人は多く殺ころしたれ」など、かやうのことをのみ、のたまふ人になむおはしける。

二 をも一 和本もとも。国本、蓬本よもぎもとに拠より補おぎなふ。

籠こもり給たまし事は、宰相さいしやうにをはせしに、「われより上臈かみ四人中納言ちゆうなごんごんになれるに、われひとり残のこり、たとひ上臈かみなりとも、後に宰相さいしやうになりたる人もあり。われこそなるべきに、ひとりならず」とて、宰相さいしやうをも、兵衛へいゑの督かみをも、中宮ちゆうぐうの権大夫ごんたふをも、みな奉たてまつりて、久ひさしく籠こもり給たまへりき。人に越こえられたる事もなし。ことひとならば、さてもをはすべけれど、腹立はらたちて籠こもり給たまへりしに、為通ためみちの宰相さいしやう、太郎子たうろうこにをはせし、讃岐さぬきの御門ごもんに御ごをぼえにほはせし程ほどに、太上たうじやうの大臣だいじん、前の宰相さいしやうにて、成もかへらで、中納言ちゆうなごんごんになり給たまにき。

陣じんの座ざの除目ぞくめに、上達部かみたちうべになる例れい、これやはじめて侍わらわりけむとぞ聞きはべりし。(恭徳)内うちより院いんに申まをさせ給たまへ、(忠通)「はからはせ給たまへと、関白せきはくに仰おほせられよ」など申まをさせ給たまへるにや。さまで御気色ごきしきあしくもなかりければ、さなどせさせ給たまを、法性寺ほふしやうじのをとゞ関白せきはくにて、あるまじき事こと、度たびく申まをさせ給たまければ、いつとなくしぶらせ給たまれど、度たびく御使ごつかひありて、陣じんの座ざにて、中納言ちゆうなごんごんに成給なにけり。御前ごまへにて行こなはるゝ除目ぞくめにこそ、上達部かみたちうべはなさるなるに、是こゝよりはじまりて、このころは、さてなき

一 はさがりがたく「和本」さはりがたく。国本、運本に拠り改む。

るゝとぞ聞え侍る。上の御せうとなれば、殿にはさがりがたくをはずすべけれど、例なき事ゝ申させ給けるにこそ。

司ども返したてまつりて、入り籠り給ける時、檳榔毛の車破りて、家の前の大宮をもての大路に取り出して、焼き失ひ給ければ、節会の日にて侍けるとかや。

二 からにこむ一 国本「からかこんか」

さて裾に紺の水干とかに、くれなるの衣とか着て、馬にて川尻へ、かねとかいふあそびのがり、をはしける道に、鳥羽の楼なむ過ぎ給ける。「かくて年月をわたりて、ありかむとなむ思」と、院の御おぼえなりし中納言に消息し給ければ、さもとと思しめしけれど、うち任せてもえなくて、帝のせさせ給ありさまなりけるなるべし。

前の宰相にて、中納言になる例無ことなれど、隆国の宇治に籠りて、前の中納言より、大納言に成たる事の、なぞらへつべきよりてぞ、なり給ける。宰相、まづかへしなさむと、御けしきありけるをば、さてはありかむともなかりければ、かたき事なれど侍けるなるべし。さて入籠給し時、中の院の(雅定)大将、まだ中納言など申し折にや、その弓を借り給へりけるが、つかさ奉りて、返し申給とて、十年あまり手慣したりし梓弓かへすにつけて音ぞなかれける

と侍ける返しに、中の院、

さりとても思ひな捨てそ梓弓ひきかへす世もありもこそすれ

一 かたき一和本、国本「かたきき」。蓬本に
拠り改む。

二 の一國本なし。

三 め一和本、国本なし。蓬本、新古今和歌
集に拠り補ふ。

四 太上のをとゞ一國本「太政のをとゞ」

五 御こ一國本「御こは」

と侍りけるかひありて、衛門の督(なま)になり給へりき。

(伊通)このをとゞ、近衛の御門の御時、御女(むすめ)御(ご)に参り給へりし、后(きさき)に立ち給て、帝

かくれさせ給にしかは、御髪(ごみ)をろし給てけり、九条の院とぞ申なる。(忠通)法性寺殿、

御子(ごこ)とて参り給へれど、まことにはこの御子(ごこ)なれば、いとめでたき御名(ごな)なり。后

には立ち給へど、院の御女(むすめ)、一の人のなどならねば、かたき事(こと)にぞ侍なる。御み

めも御けはいも、いとらうある人になむおはずとて、鳥羽の院も、いとありがた

くとぞほめさせ給ける。近衛の御門かくれさせ給て、御髪(ごみ)をろし給て、又の年五

月(つき)の五日の日、皇嘉門の院に奉(たまつ)らせ給ける、

あやめ草(くさ)ひきたがへたる袂(たもと)には昔(むかし)を恋(こ)ふるねぞかゝりける

その御返し、

さもこそは同じ袂(たもと)の色(いろ)ならめ変(かは)らぬねをもかけてけるかな

と侍りけるとぞ聞え侍し。

(四伊通)太上の大臣(とと)の太郎(たろう)にてをはせし、宰相とて失(う)せ給にき。その宰相は、次郎が大

郎(らう)にをはすとて、祖父(おほぢ)の大納言殿(のだの)、次太君(じただみ)と童名(わらな)つけ申給けり。その宰相の御子(ごこ)

は、このごろ泰通(やすみち)の少将と申なる、侍従(せいでん)の大納言子(のだの)にし給てをはしけり。またも

(五)御子(ごこ)をはすとぞ。伊実(いみ)の中納言と申し、其母(はは)従三位(じゆい)玄子(げんし)、顕隆(あきたか)の中納言(ちゆうなご)の女の

腹(はら)にて、むかひ腹(はら)とて、むねとし給しかば、兄(あに)の宰相(せうそう)よりもときめき給。兄弟(あにとも)み

一 かんだちめ―和本、国本―かたちめ。蓬本に廻り補ふ。

な笛をぞ吹き給し、二人ながら大臣殿より先にかくれ給にき。

伊実の中納言の子に、少将、侍従など申てをはすなり、宗通の大納言の三郎にて、季通前の備後守とてをはしき。書のかたも知り給へりけり。箏の琴、琵琶な

ど、ならびなくすぐれてをはしけるを、兵衛の佐より四位し給ひて、この御中に上達部にもなり給ざりしこそくちをし。さやうの道のすぐれ給へるにつけても、色めき過し給へりけるにや。

かりがね

かの九条の民部卿の四郎にやをはしけむ、侍従の大納言成通と申しこそ、よろづのこと、能多く聞え給しか。笛、歌、詩など、その聞えをはしき、今様うたひ給こと、類なき人にをはしき、又鞆足にをはする事も、昔もありがたき事になむ侍ける。おほかたことに力入れ給へるさま、ゆゝしくをはしけり。鞆も千日欠、ずならし給けり。今様も、碁盤に碁石百数へ置きて、うるはしく装束し給て、帯なども解かで、「尺迦の御法は品ぐに」といふ同じ歌を、一夜に百かへり数えて、百夜うたひ給ひなどしけり。

馬うまに乗り給たまをすぐれてをはしけり。白川の御幸ごきょうに、馬うまの川がはにふしたりけるに、鞍くらの上うへにすぐたに立ち給たまて、露濡つゆぬれたる所ところをはせざりけるも、ことひとならば、水みづにこそはうち入れられましか。おほかた早業はやわざをさへならびなくし給たまければ、そりかへりたる沓くつはきて、高欄かうらんの矛木ぼぎの上うへあゆみ給たまひ、車くるまの前まへ後ご築地ついでのうらうへ、とゞこほる所ところをはせざりけり。

一「あまり」より一七〇頁一六行「待ける」まで、和本、国本なし。蓬本にぬり袖ふ。
 一あまりに到いたらぬくまもおはせざりければ、宮内卿有賢きんねと聞きえられし人ひとのもととなりける女房にようぼうに、しのびて夜よるくさまをやつして通かよひ給たまけるを、さぶらひども、いかなるものゝふの局つぼねへ入いるにかと思おもひて、うかゞひて、あしたに出いでんを打ち伏うちふせんといひ、支度しだしあへりければ、女房にようぼういみじく思おもひ歎なげきて、例れいの日暮ひぐしにければ、おはしたりけるに、泣なくくこの次第かたを語かたりければ、「いとゞ苦くるしかるまじき事ことなり。きと帰来こん」とて、出いで給たまにけり。

女房にようぼうのいへるごとくに、門かどどもさしまはして、さきくにも似にずきびしげなりければ、人ひとなかりける方かたの築地ついでを、やすくと越こえておはしにけり。女房にようぼうはかく聞きておはしぬれば、又はよも帰かへり給たまはじと思おもひける程ほどに、とばかりありて、袋ふくろを手てづから持もちて、又また築地ついでを越こえて帰かへり入いり給たまひけり。

あしたには、このさぶらひども、いづらくとそゞめきあひたるに、日ひさし出いづるまで出いで給たまはざりければ、さぶらひども、杖つゑなど持もちて、打うち伏ふせんずる設まち

けをして、目をつけあへりけるに、ことの外に日たかくなりて、まづ折烏帽子の先をさし出し給けり。次に柿の水干の袖のはしをさし出されければ、あはすでにとて、をのくすみやきあへりける程に、その後、新らしき香をさし出して、縁に置き給ひけり。こはいかにと見る程に、いとよらかなる直衣に、織物の指貫着て、あゆみいで給ひければ、このさぶらひども逃げまどひ、土をとりて膝を突きけり。香をはきて、庭に下りて、北の対の後をあゆみ参りければ、局くたて騒ぎけり。

中門の廊のぼり給けるに、宮内卿もたゞずみありかれける。急ぎ入りて装束して、出であひまうされて、「こはいかなる事にか」と騒ぎければ、「別の事には侍らず。日ごろ女房のもとへ時ぐしのびて通ひ侍つるを、さぶらひの打ち伏せんと申しようけたまはりて、其をこたり申さんとてなん参りつる」と侍ければ、宮内卿おほきに騒ぎて、「この科はいかゞあがひ侍べき」と申されければ、「別の御あがひ侍るまじ。かの女房を賜りて、出で侍らん」とありければ、左右なき事にて、御車どもの人などは、かちにて門の外に設けたりければ、具して出で給けり。女房、さぶらひ、すべて家のうちこそりて、めづらかなることにてぞ侍ける。

一 一六九頁六行「あまりに」より「侍ける」まで、和本、国本なし。蓬本に掘り補ふ。

唐国、江都王と申けむ人も、かくやをはしけむ、おほかたは心若くをはして、

一 給一國本「給ひ」

二 すきもの一和本、國本「すむもの」。蓬本に廻り改む。

三 ける一和本、國本「ける」。蓬本に廻り改む。

四 なりみち一國本「なかみち」

五 しばし一和本「しばしはし」。國本。蓬本に廻り改む。

六 こゝろへ一國本「ころへ」

七 なりみち一國本「なかみち」

はじめて人の婿むこにをはしける折せも、調度てうどの厨子くしかき出して、呪師ずしの童わらわの御おんをばえなるに給たまなどし給たまけり。上達部じやうたつぶになり給たまても、賀茂詣かものまうぎに、檳榔びんろうに青あおすだれかけなどし給たま、しめたる事ことにはあらねど、さやうに好このみ給たまけるなるべし。

若わかくより、左の中將ひだりなかつしやうとて、すきもの、やさしき殿上人とのんじん、名高なだかきにてをはしき。

五節ごせつなどは、雲くもの上うへ、皆みなそのまゝなるやうにぞ侍まじける。いづれの年としにか、五節ごせつに蔵人くらひんの頭かしらたちの舞まひ給たまはざりければ、殿上人とのんじんたちはやみて、いかにぞや、歌うたくひ給たまけるに、右兵衛みぎべゑの督公行かみきむぎの、別当べつたうの兵衛祐べゑすけなどや申まをけむ、その人ひとを表おもてにをし立て、成通なりとほの中將なかつしやうかくれて、うたひ給たまけるを、頭かしらの弁べんうれへ申まをされたりければ、その折せこそ、御おんかしこまりにてぞ、しばし籠かごりる給たまへりしかば、白川しろがわの院いんには、御おんいとをしみの人ひとにてをはしき。殿上人とのんじんの中に、たゞひとり色いろゆるさりてをはずとぞ聞きえ給たまひし。

雪降ゆきふりの御幸ごきやうに、ひきわたの狩衣着かりぎよ給たまへりとて、心得こころえぬ事ことに仰おほせらると聞きて給たまて、資遠すげんとて侍まじりし檢非違使けんびゐしの、まだ童わらわにて、御前ごぜんにも近ちかく使つかはせ給たましに、「わび申まをよし聞きかせまいらせよ」との給たまければ、はかなくうち出して、成通なりとほこそ、ひきわたの事ことかしこまり申まをさぶらへ」と申まをたりければ、あしよしの御おんけしきはなくて、¹⁵「まことに奇怪きくわいなり」とぞ仰おほせられける。近衛このゑのすけなどは、かとり、薄物うすものなど、花はなの色いろ、紅葉もみぢのかたなど、染そめつけらるべかりけるを、ひきわたあらくしく思おもふ

ほしめしけるにや。

讃岐の院位の御時、十五首の哥、人々に詠ませ給けるに、述懐といふ題詠み給とて、

白河の流れをたのむ心をば誰かは汲みてそらに知るべき

と講ぜられける時、むしろこそりて、あはれと思ひあへりけり。涙ぐむ人もありけるとかや。おほかた歌なむども、をかしく詠み給き。帰る雁の哥に、

声せずはいかで知らまし春霞へだつる空に帰る雁がね

など詠み給へるも、きよくに聞え侍り。恋の歌ども、「恋せよとても生れざりけり」、又「降る白雪の哥もなく」なども、わが心より思ひ出し給へるべし、と聞えていとをかしく。

詩なども、よく心得給へりけるなるべし。左大弁の宰相顯業といふ博士の語られけるは、「詩の事などいはるゝ聞けば、「なにかし千里なども作りたる、優に聞えて、心澄むわざになむある。万里といふになりぬれば、又いふにも及ばず」などある、いと興あり」とぞ侍りける。

あまり音泣きやうにぞおはしける。鳥羽にて、白河の院、やぶさめといふ事御覧じけるに、滝口なにかしとかいふもの、射むとしけるに、兄とて、つはものゝおほえある家のものにて侍るなるが、的立てけるを見給て、「弟の射るに、兄の

一 いふ一和本 国本「い」。蓬本に擬り補ふ。

二 いる一 国本「いか」

一とて一和本、国本にて。蓬本に拠り改む。

的立てによるか。いとやさしき事なり」とて泣き給ければ、二条（兵衛）の輔は、「行兼がやぶさめ射むに、公兼が的立てむ、あはれなるべき事かは」とぞ侍ける。またある源氏の武者の、やさしく歌詠み、遊びなどしけるに、指貫のくりの狭く見えければ、「をのづからの事もあらば、さは、きとあげむするか」などいひて、涙ぐみ給けり。また三井寺に侍ける山伏の、法橋になりけるとかたらひ給ても、「山伏ゆかしくは、それがしを見よ」なむといふらむこそ、大峯の姿ゆかしけれ」などいひても、うちしぐれ給けりと聞え給ひき。やすき事も、ものをほむる心ちにて、かくなむをはしける。

二ども一和本「と」
三 ふき一和本、国本「ふ」。蓬本に拠り補ふ。
四 をはせ一和本、国本「をせ」。蓬本に拠り補ふ。
五 皆一和本、国本「み皆」。蓬本に拠り改む。

その弟の按察大納言重通と聞え給ひしは、みめなどは、似通ひ給へりけるが、いま少しにほひありて、あいづかはしきやうにはしける。いと能などをはせねども、生の笛吹き、琵琶弾き給き。（忠通）法性寺殿にぞ、常は親しく侍ひ給けるに、殿も此大納言も、過ぎておはする後など、なつかしくさとかほる香ぞをはしける。

句兵部卿、薫大将など、おぼえ給けるなるべし。この二人の大納言たち、御子も

ますみのかげ

閑院の東宮の大夫と申も、高松の御腹なり。贈太政大臣能信と申。白河の院の御祖父、贈皇太后宮の御親にて、まことの御女にこそおはしまさねど、いとやむごとなし。この殿は、詩なども作らせ給ひけるとて、人の語り侍しは、「春に富める山の月は頭に当りて白し」とかやぞ聞ゝ侍しが、まだ忘れ侍らぬ。これは文を題にて作り給へるに、吳漢とかいふ人とぞいひし。所の名ゝどをも、さすがにたどたどしくなむ申ゝ。又御哥もうけ給はりき。

くもりなき鏡の光ますくくに照さむ影にかくれざらめや

と、白河の院の御ことを、伊勢大輔が詠み侍ける、その御返りとぞ聞え侍し。

白河院一つ御腹の御いもうとは、仁和寺の一品の宮とて、近くまでをはしましき。聡子の内親王と申なるべし。後三条の院失せさせ給ひし時、その日御髪をうさせ給て、仁和寺に住ませ給き。さてをはしましゝかども、年ごとに、つかさ位など賜らせ給き。その御をとくに、伊勢のいつきにておはせし、三品し給へりき。俊子の内親王と聞へき。樋口の斎宮と申なるべし。次に賀茂のいつき、佳子の内

親王と聞え給し、御なやみによりて、延久四年七月にまで給き、宮の少路の齋院とぞ申めりし。齋宮は師走に出で給き。

そのをとうとにて、篤子の内親王と申しも、みな同じ御はらからなり。はじめ延久元年、賀茂のいつきに立ち給ひて、同じ年五月に、院失せさせ給にしかば、前の齋院にておはしまし、むばの女院の御ゆづりにて、准后御封など給はらせ給へりし程に、堀河の御かどの御時、后に立ち給ひき。帝よりは御年ことのほかにをとなをはしましければ、世にうたふ歌など侍りけるとかや。

一 をはせし國本「おはせ」

春宮の大夫殿は、まことの御子もをはせねど、三条の内大臣能長のをとゞの甥

二 おとど一國本「をとど」

にはするをぞ、子にしたてまつり給へりける。まことには、堀河殿の御子におはす。御母、これも帥殿の御女なり。この内の大官の御子は、中納言基長と申しは、贈三位濟政の女の腹の子なり。彈正の尹になり給へりしかば、尹の中納言とぞ申し。三井寺に僧都とて、御子をはすとぞ。

尹の中納言のをとうと、大藏卿長忠と申おはしき。母、昭登の親王の女なり。大弁の宰相より、中納言になりておはせし程に、中納言をたてまつりて、われは大藏卿になり、子は弁になされ侍き。この大藏卿をば、石山の弁とぞ申めりし。賀茂にぞ限りなくつかうまつられし、中納言までと、夢にも見られたりけるとかや。

一 一に「國本なし。」

二 おと「國本」を「と」

三 かうぶり「和本」かうぶりに。國本、蓮本に拠り改む。

四 内親王「和本」國本親王。蓮本に拠り補ふ。

五 にて「和本」國本にて。蓮本に拠り補ふ。

その子は、左少弁能忠と申、詩などよく作り給。心さとき人になむをはしける。若くてとく失せ給ひにき。小將の入道有家と聞えし人の子に、この弁の同じ名つきたるが、わづらひける程に、公伊法印といふ人に祈りをつけたりけるが、同じ名にて、取り替へられたるとぞ、世には申あえりし。その取り替へられ人は、まだおはすとか。大藏卿のをとうとに、山の座主仁聚と申もおはしき。南勝房とぞ申めりし。又律師などいひて、二人ばかりをはしき。又四位の侍従宗信と申も聞へき。その子には、仁和寺に禎喜僧正とて、東寺の長吏にて、このごろおはすとぞ。

尹(麻呂)の中納言の同じ腹におはせし、三条のおと(能長)の御女は、白河院、東宮におはしまし、時、御息所と聞へ給し。御門位に即かせ給て、延久五年、女御の宣旨三かうぶり給き。道子の女御と聞へき。女宮生みたてまつりて後、内へも参り給はずなりにけり。承香殿の女御とや申けむ。御女の善子の内親王四、伊勢にいつきにて下り給しに、具したてまつりてぞおはしける。七十にあまりて失せ給き。この女御は、又なにとかや申御名をはしき。

(能臣)春宮大夫の御をとふとは、同じ高松の御腹の、無動寺の馬のかみの入道顯信五の君と聞へ給し。僧の御名は長禪とぞ申なる。十八にて、この世思しすて、比叡六の山に籠らせ給し、たふとくあはれになど、ことをろかなり。昔の物語どもにこ

一 伊よかみ―国本「伊与かみ」

まかに侍れど、さのみやは繰り返し申侍らむ。長家の民部卿と申も、やがて高松の御腹なり。御哥どもこそうけ給はりし。「庭しろたえの霜と見えつゝ」など詠み給へるも、この御哥とこそ聞ゝ侍しか。

この大納言の御子に、忠家の大納言、祐家の中納言など申てをはしき。母、美濃守基貞の女とぞ。大納言の御子にては、基忠、俊忠二人の中納言おはしき。それは経輔の大納言の御女の御腹なり。俊忠の中納言は、それも哥詠み給と聞へ給き。堀河の院の御時、男女のふみかはしにも、詠み給へるとぞ聞ゝ侍しか。その中納言の君たちは、民部大輔忠成と聞へ給し。

又顕広の三位とてもおはすなり。伊予守敦家の女の腹とぞ。その三位の御哥も、このごろの上手におはすとかや。歌の判などし給とこそ聞ゝ侍れ。この三位、讃岐の御時、殿上人におはしけるが、帝位をり給て後、院の殿上をし給はざりければ、

雲井よりなれし山路をいまさらに霞へだてゝ歎くころかな

と詠みて、女房につけてたてまつられ侍ければ、御返しはなくて、やがて殿上仰せくだされけるとぞ、撰集には、「あやしやなにの暮を待つらむ」とかやいふ哥ぞ入り侍ける。その兄、山の大僧正とて、経たうとく読み給ふおはすと聞へ給。

竹のよ

御門、関白にすぎたてまつりては、御母方の君達こそ、みな世にしかるべき人にてはおはすめれ。九条殿(前輔)の御子の中に、三郎(兼家)にをはしまし、は、関白たえずせさせ給。十郎にあまり給へりし、閑院(公季)の太政大臣の末こそ、関白をし給はねども、うちつゞき御かどの御祖父にて、さるべき人々おはすめれば、その御有様申さむとて、まず御かどの御母方を申つゞけ侍なり。

朱雀、村上の御祖父は、堀河殿(基経)。冷泉院、円融院の御祖父は、九条殿。花山の(伊尹)は、一条殿。一条院、三条院のは、東三条殿。後一条院、後朱雀、後冷泉院、この三代の御祖父は、御堂(道隆)の入道殿。この十代の帝は、照宣公と申堀河殿、一つ御末なり。

後三条院こそ、母方も御かどの御孫にをはしませど、御母陽明門の院は、御堂の御孫におはしませば、一つ御流れ也。白河の院の御祖父、閑院(能信)の東宮大夫同じ流れにをはしますを、まことの御親は、閑院の左兵衛の督公成、この同じ御流れなれど、東三条殿の御末にはおはせて、その御弟の閑院のをとゞの御末なり。こ

二 御おや―国本「御をや」

一 後朱雀―和本「御朱雀」。国本、蓬本に拠り改む。

の閑院の太政大臣の御孫にをはせし、左兵衛の督の御末、うちつゞき御門の御祖父にをはず。この公成の左兵衛の督の御子、按察の大納言実季は、鳥羽院の御祖父なり。

この大納言の太郎には、東宮の大夫公実と申き。経平の大式の女の腹におはす。みめもきよらに、和歌などよく詠み給と聞へ給き。笛吹き、琴弾きなどはし給はざりけれど、紅梅の陸奥紙に巻きたる笛、腰にさして、琴爪おほしてぞおはしける。ことひとのさやうにせば、あざけるべきに、よくなり給ぬるは、とがなく優にぞ見え侍ける。

若くおはしける程にや、右近の馬場にほとゞぎす尋ねに、夜をこめてをはしたりければ、女房車の雑色一人具したる。さきに立てりけるに、ほとゞぎすも鳴かで、やうく明け行く程に、水鶏の叩きければ、かの車より、

いかにせむ待たぬ水鶏は叩く也

といひ送り侍ければ、

山ほとゞぎすかゝらましかば

とぞつけて帰りにける。女は誰にかありけむ、百合花にやとぞうけ給はりし。いかにもやさしく侍けることかな。この世には、さやうの事ありがたくぞあるべき。詠み給へる哥多かる中に、いとやさしく聞へ侍しは、

思出づやありしそのよのくれ竹はあさましかりしふしどころかな

と詠み給へるこそ、いづこにかいばみ給けるにか侍けむ。からうすの音して、当
来導師などや、拜みけむとさへ思やられ侍。

その大君は、經実の大納言の上、その次は、花園、左の大君の北の方、三の君
は、待賢門の院におはします。次さまはまさり給へる事を、「まろが姉あらし
かば、夫などいひて、薪負へる賤の男に、具する人にてやあらまし」などのたま
はせけると聞へし。さしものたまはぬ事を、人のいはせ侍にもありけむ。またさ
やうのことはたはぶれ給はむ、さも侍けむ。みなこの御母、光子の二位の御腹な
り。

東宮大夫の太郎にては、侍従中納言実隆と申ておはしき。その御母、美濃守基
貞の御女也。この中納言、人からはよくおはしけるにや、院に和哥の会させ給
けるに、歌人にまじりて哥書きたる、胸にも入れ、ひきそばめなどはし給はで、
いつとなく擗けておはしければ、御をととの大政の大臣、その折まだ中納言な
どにやおはしけむ。見給て、この人は哥なども詠み給はぬに、とおほつかなくて、
「御哥見給へはべらばや」と申給ければ、「なにごとのたまふぞ。前の左衛門の
佐ひがごとせられむやは」との給ける、をかしかりしとぞ侍ける。基俊の君すぐ
れたる哥詠みなれば、「難なくよき哥なるべし」と、のたまふにこそとは聞ゆれ

ど、哥の道は、よきにつけ、あしきにつけて、しるしあひて、我もたびく見、人にも見せ合することなり。

その子にて、冷泉の宰相公隆とおはせし、若くて後少将と聞へて、若殿上人の優なるにてをはしき。そのをとふとに、兵衛佐成隆とてをはしける、まだ幼くてかくれ給にき。又こそ御腹にや、奈良に覚珍法印と申、当時おはす。才ある人と聞へ給。東宮の次郎におはせしにや、大宮のすけ実兼とか聞へて、後には刑部卿と申おはしき。この御中に、上達部にもなり給はざりき。その御女の、阿波守朝綱と聞えし女の腹にをはしける、女院へ参り給けるが、鳥羽院しのびてものなど仰せらるゝことありとて、法皇の出させ給ひたりけるとぞ聞え侍し。

梅のこのもと

東宮大夫の三郎にやあたり給らむ、それも美濃守の女の腹にをはせし太政大臣実行のをとらは、学問もし給たる人にておはせし上に、立居のふるまひなどめでたく、よき上達部にぞおはしける。四位し給て、前の少納言にて、いつとなくおはしければ、親の東宮の大夫殿は、「身の才もあり、よきものにてあるに、くち

一 もとより國本「もととし」
二 をはし國本「おはし」

をしく」とのみ歎き給けるに、失せ給て後、中弁にも藏人頭にもなり給ければ、
「身のとがなかりしをのみ、見えたてまつりて」とぞ、思出でつゝのたまはせける。

親の御病の程なども、まろぶしにて、常はあつかひきこへ給けるに、失せ給て後も、
「基俊の君とぶらひにをはして、梅の枝に結びつけ給ける、

昔見しあるじがほにて梅が枝の花だに我に物語せよ

と侍れば、このをととの御返し、

ねにかへる花の姿のゆかしくはたゞこのもとをかたみとは見よ

とぞ侍ける。おとうとの左衛門督より下臈にて、頭にてならび給へるに、頭中将
は上臈にておはしけれど、この兄は才もはし、命も長くて、太政大臣までいた
り給へる、いとめでたし。

(後白河) 院位におはしまし、時、内裏行はせ給に、詩作りて参らむとし給を、御子の

内の大臣は、「さらで侍なむ。年もあまりつもり給。御ありきもかなひ給はぬに

見苦し」といさめ申給ければ、中院の入道をととに、「内の大臣かく申侍はいか

ゞ」と申あはせ給ひければ、「かならず参らせ給べきことなり。おぼろげに侍ら

ぬことなるに、御門の御をぢにおはしまして、太政大臣の参らせ給はざらむ、く

ちをしく侍」なむと侍れば、孫の実長の大納言の、宰相の中將と申しに、かゝ

一 一の國本なし。

二 侍一國本「侍れ」

三 少将一國本「小将」

りてこそ参り給けれ。御髪をろし給しも、中の院にかくと申給ひければ、「しか
侍まじきことにやとこそ、思給へて過ぎ侍つれ。思しめし立つならば、いとめで
たきことに侍り。同じくは、さはりなき程に、とく侍らむ、めでたきこと」の
たまはせければ、入道し給てぞ失せ給ひにし。

をとふとの左衛門督は、御声めでたくて、歌をよくうたひ給て、成通の大納言
にも、とりぐにぞ申ける。その左衛門の督通季と申は、東宮大夫の四郎にて
おはせしなるべし。みめもきようらにて、声おほきに、肥りたる人にておほしき。
母二位の御子にて、むかひ腹におはせしかば、兄をもこえ給て、頭の中将、頭弁
にてならびてをはしき。ことのほかに世にあひたる人にて、通季、信通とて、ひ
とてにておはせしに、立ちならび給けるに、信通の君はちいさく、これはほき
にをはすれば、母の二位殿、「これはいづれかかたわ」と申給ければ、白河の院
は、「男のおほきなるは、あしきことかは」とぞ仰せられける。

実行の太政の大臣の御子は、内大臣公教と申き。修理の大夫頭季と申し女の腹
にをはす。その御母は、歌詠みにおほしき。少将公教の母とて、集などに多くを
はすめり。「ときはの山は春お知るらむ」などこそ、儼に聞え侍。その内の大臣
は、若くよりみめも心ばえも、思あがりたるけしきにぞおほしける。藏人の少将
四位の少将など申し程、左右の御手の裏に、香になるまで、たき物にしめて、月

一 ゆふつかた―和本、国本「ゆふへかた」。
蓬本に廻り改む。

出したる扇あふぎに、なつかしき程ほどに染めたる狩衣かりぎぬなど着給きて、さきはなやかに追おはせて、夕ゆふつ方かたなどに、三条室町殿むろまちに、院いん、女院にょいんなどおはしますかたくに参まゐり給へば、女房にようぼうなどは、「四位の少将せうしやうの時になりにたり」などぞ、いはれけるとぞ聞きえし。

才ざいもおはし、笛ふえもよく吹ふき給たまき。心こゝろばえをとなくして、公事こうじなどもよくつとめ給たま。世よの沙汰さたよくおはせしを、世よの人のやうに、あながちなる追従ついでもし給たまはずおはしければにや、家いへなどはかなひ給たまはでぞありける。藏人ざうじんの頭あたま、檢非違使けんひゐしの別当べつたうなどし給たましも、いとよくおはしけり。左大将さだざうなど申し、程ほど、鳥羽とりはの院いんの御後見ごごみ、院いんのうちとり沙汰さたし給たましかども、われと国くに一つもしり給たまはず、賢人けんじんにこそをはずめりし。父ちちの大政（実行）の大臣だいじんよりも、さきにぞ失うせ給たまひにし。

二 をほかたをとなしきやうにふるまひ給たまて、藏人ざうじんの頭あたまになり給たまへりしに、おとうとにをせし公行こうぎやうの、弁べんにはじめてなりて、厚額あつがひのかうぶりになし給たまければ、われも今は額がひあてせむとて、同じおなじやうにして、内うちに参まゐり給たまへるに、成通なりあちの宰相さうしやうの、中将ちゆうしやうにはじめてなりて、しばしは透額すゐがひのかうぶりにてとや思おぼしけむ、内うちに参まゐり給たまて、頭あたまの中将ちゆうしやうのかうぶりを見給みて、額がひに扇あふぎさしかくして、まかで給たまて、やがて厚額あつがひになりてをはしける。成通なりあちの御心ごこゝろばえは、世よの沙汰さたをばいたくも好このみ給たまはで、公事こうじなどは識者ししやにをせしかど、世よのまめなる事はとりいらぬ御心ごこゝろにや、藏人ざうじんの

一 一と和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

二 を一和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

三 うせ一和本「うせて」。国本、蓬本に拠り改む。

四 など一國本「なども」

五 のおはせし。宰相までなり給て、わかてかくれ給にき。ぞえなども一和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

頭も、檢非違使の別当もへ給はず、侍従の大納言などいひて過ぎ給にき。公教大臣殿は、三条の内大臣とも、高倉のをとゞとも申なるべし。三条の内大臣は、能長ののをとゞを申、かば、いひ換ふるなるべし。

高倉のをとゞの姫君、清隆の中納言の女の腹にをはする、院の女御にたてまつり給へり。いま梅壺の女御と申なるべし。御名こそいとやさしく聞へ侍れ。その弟の姫君は、父をとゞ失せ給て後、祖父の太政大臣沙汰し給て、この摂政殿の、左の大臣など聞へさせ給し時、参り給て、北政所とぞ聞え給ふ。

男君たちは、同じ御腹にをはする大納言実房と申、こそ、内の大臣失せ給て後、三位の中将になり給て、ことのほかの御栄へなるべし。末の子におはすれど、むかひ腹なれば、兄二人にまさり給へるなるべし。左衛門の督実国と申すは、中納言におはすなり。このごろみめよき上達部と聞へ給ふ。又笛吹き給て、御親のあとつぎ給とぞ。御門の御師にもおはすと聞へ給ふ。神楽などもうたひ給ひて、清暑堂の御神楽にも、拍子とり給ふと聞へ給。その御兄、左大弁の宰相実綱と申なるも、文などにたづさはり給て、弁にもなり給ふなるべし。僧君たちも、法眼など申て、山におはすなり。又石山の座主など聞へ給。

内大臣の御次に、右兵衛の督公行と申し御をとうとのおはせし。宰相までなり給て、若くてかくれ給にき。才などもおはしけるにや、弁にても仕へ給ひき。哥

こそよく詠み給けれ。その御子に、顯親の播磨守の女の腹に、前の大納言実長と申はすなり。みめよき上達部にぞおはすなる。入りこもり給へるわかき人たちのいかに侍ことにか。実慶法眼とて、山におはしけるも失せ給ひにけり。右兵衛の督のをとうとに、民部大輔公宗と聞へ給ふをはしき。うつし心もなくて、常は物のけにて失せ給にけり。みめなどもよくおはしけると聞へ給き。みな同じ御はらからにぞおはしける。顯季の三位の婿にをはしけり。

左衛門の督通季と申し中納言の御子に、按察の大納言公通と申おはすなり。詩なども作り給なり。くびの御病重くおはすればにや、度くつかさも辞し給て、前の大納言におはすとぞ。の御子中将、侍従などをはすなり。通基の大蔵卿の女の腹におはすとぞ。前の少将公重と申も、左衛門の督の御子なり。哥詠み給とぞ。又山に法印など申ておはすなり。

この人々の御いもうとに、廊の御方と申て、白河の院の御おぼえし給人おはせし。後には、徳大寺の左の大臣の御子二人うみ給へりき。今の公保の大納言におはすなり。いまひとり、山に僧都と申とぞ。左衛門の督の次には、山の座主仁実と申、同じ腹にをせしかば、山の僧などは、二位の僧正などぞ申なる。いと能はすぐれたる事もおはせざりけれども、心ばえなどもかしこくおはし、世おぼえもすぐれ給へりけるにや。世の末にさばかりの天台座主はかたくなむ侍。山

一 御おぼえ―和本御おぼ。国本、蓬本に
廻り補ふ。

一 院一國本「院の」

のやむごとなき堂どうどものやぶれたるも、多くは造り立て、大衆だうしゆなどの中に、少しも不用ふようなるをば、よくしたゝめなどせられければ、世よのため山のため、その時はをだやかになむ聞きへ侍し。伝教大師のふたゝび生れ給へるといふ事も、侍けりとかや。

白河の院いんかくれさせ給へりけるに、七月七日、にはかに御心地ごんちそこなひて、つとめてより御火くらむなど聞へて、さだかに物なども仰せられざりけるに、いまはかくと見えさせ給ひける時、かねてより、忠盛たけもりのぬしに、「念仏かならずゝめよ」と、仰せられ置きたりければ、「かくなむうけ給はりし」と、為業たのわざなどいふが母ははして、度々たび申けれど、仁和寺の宮なども、「仏頂尊勝陀羅尼ぶつとうそんじやうだらに」とのみ仰せられて、「これ同じことなり」とのたまはせけれど、かねてうけ給はりたるにたがひておぼえけるに、この僧正（仁実）の、「南無阿弥陀仏」と高く申給へりけるなむ、うれしかりしところ、後に聞へけれ。その僧正は座主ざすなど辞こと給て、坂本さかもとに梶井かぎといふ所に籠りゐて、四十にあまりて失せ給ひにけり。

花ちるにはのをも

春宮大夫の六郎にやはすらむ、左大臣実能のをとゞ、これも左衛門督、山の座主、女院などの一つ御はらからにて、二位の御子におはす。大炊の御門のをとゞとも、徳大寺のをとゞとも申すなるべし。御みめも心ばへもたをやかに、いとよき人にをはしき。

兄よりもなつかしく、優なる人にをはせしを、文など作り給事ははせねど、哥などよく詠み給き。恋の哥の中にも、優に聞え侍しは、「うつゝにつらきなりとも」。また「命だにはかなからずは」なども聞へ侍き。また「思ばかりの色に出でば」なども、よき歌とこそ聞へ侍れ。又「あひ見し夜半のうれしさに」とも聞え侍き。御こゑもよくをはしけるにや、御み遊には、拍子とり給とぞうけ給はりし。「庭こそ花の」といふも、この御哥とこそおほえ侍れ。

世をばえもことのほかにをはしき。むかい腹にておはする上に、人がらのよくおはすればにや、三位中将へ給えるも、ことのほかの御おほえなり。このごろこそ多く聞え給へ、関白つき給べき人など放ちては、さる事も侍らぬに、いとめづらしく侍き。大納言大将になり給へりしも、近くたゞ人のなり給事もなきに、いとめづらかになむ侍し。左大臣までなり給へる。

閑院のをとゞの後は、四代なり絶へ給えるに、この殿々大将になりはじめて、兄の大政の大臣、この左の大臣、右大臣、内大臣になりはじめ給て、君達もをの

一 になりはじめ「和本」なりはじめて「国本」なりはじめ。蓬本に拠り改む。

くなり給へり。兄の大政の大臣、按察の大納言とてをせし、大将をとうとに
 なられて籠り給にし。一の大納言忠教、二の大納言実行、三にて雅定の大納言、
 第四実能の大納言をせし、上臈三人をきて、大将になり給しかば、実行、雅
 定二人は、入り籠りてをせしを、中の院の源大納言雅定、左大将になり給て後
 こそ、実行、雅定、右大臣、内大臣になり給しか。

いづれの中納言とかの、まづ右の大臣の御よろこびにをしたりければ、その
 家の門に、馬車多く立ち並みて、にはかに四足建つとて、こと門より入りたるに、
 見やりたれば、かくれの方までひきつくるひて、男女、色くにとり装束きて、
 掃きのごひなどして、ゆしくはなやかに見えけるに、かくと申入れたれば、ひ
 さしくありて、烏帽子直衣にて、物語まめに聞えて、「院の御心ざしかたじけな
 く」などいひて、はなうちかみつゝ、よろこびの涙をしのごひつゝ、しのびあへ
 ぬ御けしきなるに、程もへぬれば、やうく急ぎ出でゝ、次に中の院にわたりて、
 内の大臣の御よろこび申給ければ、中門の廊に、犬の足形八つ九つありて、さり
 げなるけしきもせず。さぶらひ呼び出して、申入れたれば、使にとりつゞきて、
 半尻なる狩衣にて出で給て、「よろこびにわたり給へるか。大臣は大變など申て、
 大事多かり。なにかとぶらひ給」などいひちらしてやみ給にけり。二人の人の交
 られたりしさまこそとぞ、語られけるとなむ。

一
し—國本「侍」

(実能) 徳大寺のをとゞの御子は、右大臣公能のおとゞと申き。その御母、按察の中納言顯隆と聞へし女にをはず。このをとゞ、管絃も身の御才も、かたぐおはずと聞へ給き。御親、祖父などは、御才もをせぬに、詩など作り給、御みめも心ばへも、いと優なる人にぞをはしける。中納言の大将になりて、右大臣までなり給りき。このをとゞは、若くより御声もうつくしくをばして、蔵人少将などいひて、五節の淵醉の今様などに、権現うたひ給ける。内侍所の御神楽に、拍子とりなどし給けるも、細き御声のいとおかしくぞ侍ける。

むねとは詩作り給事を好みて、中将など聞へ給し時、北野の人の夢に、「ひさしくこそ詩など講ずる人なけれ」との給はずとて、「野道はたゞ青き草」とかいふ詩を、博士、学生など、あまたまうで講じけるに、年廿に少しあまり給える若き殿上人の、みめはいとをかしくて、上の御衣など、なえよかに着なし給へるに、細太刀、平緒など、したゝかにてまじり給へる、神もいかゞ御覧ずらむとぞおぼえける。次第に朗詠し給へる中に、はなやかなる御声して、「羅綺の重衣たる」とうち出で給へりける、年老ひたる人など、涙抑へなどして、むしろこそりて、めで思えりけり。

又讃岐の御かど、位にをはしましける時、后の宮の御方にて、管絃する殿上人も召して、夜もすがら遊ばせ給けるに、大殿もをはしまして、「朗詠つかうま

一 周文「和本」周文。国本、蓬本に拠り改む。

つれ」と仰せられけるに、この右の大^{そと}臣、中将など申ける時に、「大公望が周文にあへる」と出し給へりけるこそ、御^ご声もうつくしく、御門、一の人の事にて、そのよしある事の優^いに聞へ侍けれ。

蔵人の頭より、宰将になり給しに、中将をぞ、もとの事なれば、かけ給べかりしに、道をへむとてにや、右大弁になり給えりき、いと身にも負^おひ給はずなど、思人もありけるに、侍従になりそへ給て、太刀はき給へるなど、心のまゝにおはせしさま、事につけてあらまほしくをはしき。蔵人の頭にはせし時も、殿上の一寸ものし、日記の唐櫃^{からびつ}に、日ごとに日記書き入れなどせさせて、古^{ふる}き事を興^{おこ}さむとし給とぞ聞へ給し。

宮 木 野

このをと^(公能)の御女^{むすめ}、俊忠の中納言^{むすめ}の女の腹^{はら}に四人をはすとぞ聞へ給。大い君は、いまの皇后宮にをはしますとぞ。^(後白河)この院^{くらゐ}の位の御時、后^{きさき}に立ち給へり。御名^なは忻子と申なるべし。

その次に姫君^{ひめ}をはすなるは、「后^{きさき}二人の中にて、おぼろけの御ふるまひあるま

一、給はせー國本「の給はせ」

じ。仏の道にこそは入らせ給はめ」と、故大い殿へ給はせければ、それにたがはず、若くをはするに、御髪をろし給たると聞侍。いとあはれに、この事をたれか詠み給へるとかや、

宮木野へ秋の野中の女郎花なべての花にまじるべきかは

とぞ聞侍し。まことにいとありがたく、さ契り置き給とも、そのまゝに思しなり給、いとありがたくものし給御心なるべし。

三の君は、宇治の左の大臣の北方は、父おとゞの御いもうとにをはすれば、御

二より一國本「よりも」

子にしたてまつり給て、近衛御門の御時、姉宮よりさきに、后に立ち給えり。近

衛の御かども、この宮も、そのかみまだ幼くおはしまし程に、九条の大政の大

臣の御女を、鳥羽院、女院などの御沙汰にて、女御にたてまつり給。法生寺のを

とゞの北方は、九条のをとゞのいもうとにをはすれば、御子とて、うらうへに心

を一つにて、たてまつり給へりしに、宇治の左の大臣、年ごろは兄の法性寺殿よ

三をしはりー和本「をしり」。國本、運本に廻り改む。

りも、世にあひ給へりしに、あまりにおはせしけにや、さすがにひとへにも、を

しはり給はざりしに、いま参り給える中宮のみ、ひとへにをはします事にて、父

の伊道のをとゞも、大納言など申て、常にさぶらひ給。

関白殿も、内の御祖父のありさまにて、世に思ひかはし給て、へだて多かりけ

る程に、御門もかくれさせ給、左の大臣も失せ給て、年ふる程に、二条御門の御

一 御き丁―園本「御木丁」

時、あながちに御消息ありければ、父をとゞも、かたぐ申かへさせ給けれど、しのびたるさまにて、参らせたてまつり給けるに、昔の御すまも同じさまにて、雲井の月も、光かはらずおぼえさせ給ければ、

思ひきやうき身ながらにめぐり来て同じ雲井の月を見むとは

とぞ、思かけず、伝へうけ給はりし。

かやうに聞へさせ給し程に、御門もかくれさせ給て、世も心細くおぼえさせ給けるに、例ならずおはしませばなど聞へて、御髪をろさせ給てけるは、御年廿五六ばかりにやははしましけむとぞ聞えさせ給し。この宮、なに事も艶なる方、なさけ多くをはしまして、御手なども、うつくしく書させ給。絵をさへ、なべての筆だちにもあらずなむをはしますなる。又ほに出で、琴、琵琶など弾かせ給事は聞へさせ給はねど、すぐれたる人にも劣らず、ものゝ音もよく聞、知らせ給たるとかや。

御せうとたち参り給たるにも、御丁、御座などこそあらめ、さぶらふ人ぐまで、よろづめやすく、もてつけたるさまにて、人参るとて、いまさらに大はむ所とかくひきつころひ、御き丁をし出でなどもせで、かねて用意やあらむ、心にくゝぞをはしますなる。故左の大臣も、中にとりわきて、御心につかせ給とてぞ、御子に養ひ申させ給ける。かやうになさけ多くおはします事をや聞かせ給けむ、

二条の御時も、あながちに御けしき侍けるなるべし。

この宮たち、親の御子にをはしませば、ことはりとは申ながら、なべてならぬ御姿になむおはしますなる。誰もと申ながら、院の御姉にをはしますなる女院こそ、すぐれてをはしますさま、ならぶ御かたぐかたくをはしますなるに、いまの皇后宮にや、いづれにかをはしますらむ、参らせ給へりけるに、人の見くらべまいらせけるにこそ、とりぐにいとをかしく見えさせ給けれ。

女院は、白き御衣十にあまりて重なりたるに、菊のうつろひたる小桂、白き二重織物、うはぎたてまつりて、三尺の御き丁のうちにみさせ給えりけるに、宮はうへ赤色にて、下ぎまに黄なるはじめみぢの、十ばかり重なりたるに、うはぎは同じ色に、やがてこき葡萄染の小桂の、いろくなるもみぢうち散りたる、二重織物たてまつりたりけるを、見まいらせたる人の、語りけるとなむ。

さてこの大ほゐの御門の右の大臣の男君は、大郎にては、三位中将と申、宮たちの同じ御はらからにをはせし、大納言実定と申なる。つかさも辞給て、籠り給へるとかや。さばかりの英雄にをはするに、人をこそこへ給べきを、人にこえられ給ければ、位にかへてこへ返し給ける、いと事はりと聞へ侍。詩なども作り給。哥もよく詠み給とぞ。御声などもうつくしくて、親の御あつぎて、御神楽の拍子もとり給。今様もすぐれ給へるなるべし。籠り給へるもあたらしく侍

一 大ほゐ一國本「おほゐ」

二 よくよみ給とぞ。御こゑなども一和本、國本なし。蓬本に拠り補ふ。

一 一に和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

事かな。

次には三位中将実家と申なるは、藏人の頭より宰相になり給たらむにも中々
まさりて、なべてならず聞へ侍。和琴などもよくかき給、声もすぐれて、これも
今様、神楽うたひ給と聞へ給。この御をとうとに、頭中将実守と聞へ給も、東琴
ならひ伝へ給也。この君たち、みな才などもはして、唐、大和の文作り給。御
みめも昔のにほひ残りて、このごろのすぐれ給へる御ありさまどもにおはすと聞
へ給。

又いづれの御腹にかをはずらむ、山に法眼とてをはずと聞え給。又院の姫宮生

みたてまつり給へる姫君もをはずとぞ。まことや、北の方の御腹にやをはずらむ。

侍従とてをはずなるは、頭中将御子にし給とぞ。徳大寺のおととの二郎にては、

中御門の右の大臣の御女の腹に、公親の幸将中将とてをはずしき。とく失せ給にき。

次に一条の大納言公保と申なる、左衛門の督の姫君、廊の御方と申御腹なり。当

時大納言にをはずなり。父をととに御みめは少し似給へるとかや。同じ御腹に、

公雲僧都とて、山にをはずなり。

こと腹の御子僧にて、三井寺などにおはすとぞ。春宮大夫の末の御子は、民部

卿のすゑ也とてをはずしき。和琴にてぞ、おほみ遊には、まじり給けると聞へ侍し。

右京のかみ道家の女の腹にをはず。文の方もならひ給へりけり。

二 御むすめのはら一和本、国本「御はら」。
蓬本に拠り補ふ。

三 おはす一国本「をはず」

一「みゆ」より七行「おはしける」まで、和本、国本なし、蓬本に廻り袖ふ。

その御子に、左衛門督公光と申なるこそ、才ざへなどもはして、詩うたも作り給。よき人と聞きゝたてまつるに、これも前まへの中納言などうけ給はるこそ、いかに侍世中しやくせいぢゆうにか。この御母おはは、頭頼あたまよりの民部卿みんぶせいの女むすめとぞ。みゆもことによき上達部かんだらめにて、父ちちの大納言(季成)にはまさり給へりとぞ。声こゑよく神楽などもうたひ給とか。これもゆゝしくおほきなる人にて、御をぢの通秀みちひで左衛門督の御たけに、いと劣おとり給はずとぞうけ給はる。すべてよき人にこそ。若わかくても、父ちちの世のおぼえよりは、事のほかに殿上とのうへにゆるされたる、近衛このゑづかさにてぞおはしける。

しがのみそぎ

(公老) 春宮大夫の御末すゑの、かく栄さかへ給事も、御門の御ゆかりなれば、女院(待賢)の御事をこそ申侍べけれど、その御ありさまは、さきに申侍ぬ。その生うみたてまつり給える宮みやくは、一の御子は、讃岐さぬきの院いんをはしましき。二の御子は、御目めくらくなり給て、幼こゝろくてかくれ給にき。

(君七) 三の御子は、若宮わかみやとてをはしましゝ、幼こゝろくよりなへさせ給て、起おき臥ふしも人のまゝにて、ものも仰おほせられでをはしましゝ。十六にて御髪みづかみをろさせ給て、かくれ

させ給にき。御みめもうつくしく、御髪も長くをはしましけり。昔朝綱の宰相の日本記の哥に、

たらちねはいかにあはれと思らむ三年になりぬ足立ゝずして

と詠まれたるも、蛭子にはしましける宮の事とこそは聞えさせ給へ。昔もかゝる類をはせぬにもあらぬにこそ。

嵯峨の御門の御子に、隠君子と申けるみこは、御耳にいかなる事のをはしけるとかや。さて嵯峨に籠り給て、ひき物ゝうちにたれこめて、人にも見え給はで、童にてぞをはしける。このごろならば、法師にぞなり給まし。昔はかくぞをはし

ける。心もさとく、いとまもをはするまゝに、よろづの文をひらき見給ければ、身の御才人にすぐれ給てをはしけるに、やむごとなき博士の道をとげ給ける時、広相の宰相と聞ゆる人、かの博士になり給ける、小屋とかいふ所立ち寄りて、とぶらひたてまつられけるに、かたき事侍けるをば、駒をはやめて、かの嵯峨にまうでゝぞ、問ひたてまつりける。御門の御子にも、かやうなるさまゝをはしけり。

これは、仏の道に入らせ給たれば、後の世の契は結ばせ給らむ。この宮赤子にははしましける時、絶へ入り給へりければ、行尊僧正祈りたてまつられけるに、白川法皇、「位もつぎ給べくは、生きかへり給へ」と仰せられける程に、なをら

一「させ」と本「さへ」。国本、蓬本に拠り改む。

二の「国本なし。

せ給たれば、たのもしく人も思ひあえりけるに、そのかひなくをはしましける。

いかに侍けるにか、なへさせ給たりとも、御命は十にあまりてをはしますべく、又人のしるしもたうとくおはすれば、なをらせ給とも、位は別の事なるべし。

第四御子は、いまの（後白河）一院におはします。第五の宮は本仁親王と申、童より出家し給て、仁和寺（仁和寺）の法親王と申なるべし。

后腹（后腹）の宮、法師にならせ給事、ありがたき事と申せども、仏の道を重くせさせ給、いとめでたき事なるべし。この宮いとよき人にをはして、真言よくならひ給、御手も書、せ給、詩作り歌詠などもよくし給き。その御歌多く侍なかに、箕面に籠りて出で給けるに、ありあけの月をもしろかりけるに、

木の間もるありあけの月の送らずはひとりや秋の峯を越えまし
と詠み給けるとかや。又、

夏の夜はたゞ時の間もながむればやがてありあけの月をこそ見れ
など詠ませ給へり。

三
又まだ若くをはせしに、この一二年がさきに失せさせ給にき。四十二にやをはしましけむ。をしくもおはします御よはひに、さだめなき世のうらめしきなるべし。又なにことも、世におはぬ程の人と、聞、たてまつりしけにや、失せ給はむとてのころ、金泥の一切経書き出して、高野にて供養し給けるも、比叡の山の

三
又一「国本なし。

僧都澄憲を、院(後白河)に申うけさせ給て、導師にて供養せさせ給けり。その時、院に御ものまうでに、具ぐせさせ給べかりけるとかや。ことにえらび給ひて、あらぬ方の僧なりとも、よく説ときつべきおと思ましけむも、いとたうとし。黄金こがねの文字もじも、院(待賢)女院などはなちたてまつりては、ありがたきことを、おぼろけの御ごころざしにはあらざるべし。

女官は、一品宮とてをはしまし、は、禧き子の内親王とて、賀か茂ものいつきに立ち給へりし、御なやみにて、程ほどなく出いで給にき。長承二年十月十一日、御年十二にてかくれさせ給にき。いつきの程ほどなくをりさせ給ためしありとも、まだ本院にもつかせ給て、かく出いでさせ給事、いとあさましき事とぞ聞きへ侍し。廿七日薨こ奏すとて、このよし内裏に奏すれば、三日は廃朝とて、御殿の御簾みすだもおろされ、何事も声立こゑたて、奏することなども侍まざりけり。帝みかど御ごいもうとにをはしませば、御服ごふくたてまつりなどしけり。紋もんもなき御かうぶり、繩なはな纒まなど聞きゑて、年中行事の障子しょうしのものにてぞ、たてまつりける。帝みかどは、日の数かずを月つきなみのかはりにせさせ給なれば、三日の御服とぞ聞きへける。

三 後一國本「のち」
 次の姫宮ひめのみやは、又前またまへの齋院さいいんとて、恂じゆん子内親王と申し、後のちには統子とゆうしとあらためさせ

給たるとぞ聞きえさせ給しは、大治元年七月廿三日に生なれさせ給て、八月に親王の宣旨のたまひかぶり給ひて、長承元年六月卅日、いつき出いでさせ給て、保元三年二月、皇

一と「和本 国本」とと。蓬本に拠り改む。

后宫に立たせ給。上西門院と申すなるべし。永曆二年二月廿七日、御髪ぐしをろさせ給と聞きへき。后きさきに立たせ給と聞きえしは、御門ごもんの御母ははになぞらへ申させ給とぞ聞きえさせ給。(部方)六条院の例れいにや侍らむ。

この女院の前齋院とて、唐崎からさきの御祓はらへせさせ給し時、御おぢの大政(実行)の大政をとりの詠み給へる。

昨日までみたらしがはにせしみそぎ志賀しがの浦波うらなみ立ちぞかはれる

と侍けるとなむ。秋の事なりけるに、狩装束かりさうぞくをのく、萩はぎ、龍膽りゅうたむなどいとめづらしきに、逢坂あふさかの関せきうち越こえて、山のけしき、水うみなどいともしろくて、御祓はらへの所は、かたのやうなる飯屋かひやに、齋垣いがきのあけの色いろ、水のみどり見えわきて、心あらむ人は、いかなる事ことの葉はも、いひとゞめまほしきに、おとゞの御歌うたたけも高く、いとやさしくこそ聞きへ侍まししか。

二事のは一國本「事の葉」

一 むらかみの源氏第七―和本、国本なし。
目録に拠り補ふ。

一 むらかみの源氏第七

う た ね

二 かむだちめども―国本「かむだちめどん」

藤波の御流れの栄へ給のみにあらず、帝、一の人の離れぬ方には、近くは源氏の御流れこそ、よき上達部どもにておはすめれ。堀河の帝の御母、賢子の中宮は、大殿、御子にて参り給つれど、まことには、六条の右の大臣の御女なり。後の御事は、帝の御ついでに申侍ぬ。その御ゆかりのありさま、源をたづぬれば、いとやむごとなくなむ侍り。

三 も―国本「ん」

村上の帝の御子に、中務の卿具平のみこと申しは、六条の宮とも、後中書王とも申は、この御ことなり。文作らせ給かたも人にすぐれ給たりき。御調も、代々の集どもに見えはべらむ。

その御子に、土御門の右の大臣と申は、はじめて源の御姓得さえ給て、師房のおとと聞えさせ給き。御身の栄へも高くおはし、文作らせ給かたもすぐれ給

て、野々御狩の歌の序など、人の口に侍なり、又月の御哥こそ、心にしみて聞えはべりしか。

ありあけの月待つほどのうたゝねは山の端のみぞ夢に見えける

すぎくしきかたのみにあらず、土御門殿の御日記とて、世中のかゞみとなむ承ル。帝、一の人の御用意ども、その中にぞ多く侍るなる。

御堂の女は、多く后、国母にてのみをはしますに、この殿の北の方のみこそ、たゞ人はおはしませば、いとやむごとなし。その御腹に、堀河の左の大臣俊房、

六条の右の大臣顕房と申て、兄おとうと並び給えりき。堀河殿の御才学高くおはして、文作り給ことすぐれて聞え給き。

六条殿は、哥詠みにぞおはして、判などし給き。世をぼえの兄よりもまさり給て、大納言の大将、中宮の御親にてをはせしに、大臣のあきて侍けるを、白河の御門の思しわづらひ給ひて、日ごろ過ぎけるに、匡房の中納言に仰せられあはせければ、「堀河の大納言おなさせ給へ」とうち出して申ければ、帝の仰せられけるは、「をとふとなれども、右の大将は、中宮の親にて、この度ならずは、法師にならむなどいふなり。又上臈どもありて、われこそなるべけれなどいゑば、それも捨てがたきなり」と仰せられければ、「大納言の大臣になり侍める事は、かならずしも一二といふこと侍らず。なるべき人をえりてなされ侍なり。あるは又

一 御よういども一國本「御よういどん」

二 顕房と申て、あにおとうと一和本、國本なし。蓬本に抛り補ふ。

三 ども一國本「どん」

一 御おほち―和本、国本「御おち」。蓬本に
 抛り補ふ。

二 まいり―国本「まけり」

三 にて―国本「に」

四 ともに―国本「とんに」

国のつかさへたる人はいかゞなど申ければ、「菅原のおとゞも、讃岐守ぞかし」と仰せられけるお、江帥の申けるは、「博士は別の事に侍。又才学高く侍らむ兄を、大臣になさせ給はむに、出家するをとうともよも侍らじ」と申ければ、堀河殿(後月)はなり給へりけるとぞ。

六条のおとゞは、その後(うち)にぞなり給ひし。中宮の御親、堀河の帝の御祖父にて、いとめでたくおはしき。後には大將をば、太上の大臣の大納言におはせしに譲り申給て、行幸につかうまつり給へりしこそ、いとめづらかに侍りしか。をそく参り給て、道にて車よりをりて、馬に乗り給しかば、大將殿よりはじめてみなをり給えりしに、盛重といひしが、左衛門の尉なりし時、行利といひし隨身の、陣につかうまつれりしを、あがり馬に乗せて、先に具せさせ給へりければ、なを大將にてわたり給とぞ見えける。

この兄おとうとの大殿の、少將におはしける時に、隆俊の治部卿、御婿にとり申さむと思ひて、その時めしあたる相人のありけるに、「かの二人いかゞ相したてまつりたる」と問はれければ、四「ともによくおはす。みな大臣にいたり給べき人なり」といひけるを、「いづれか世にはあひ給べき」と問はれけるに、「を」とうとは末ひろく、帝、一の人も出で来給べき相おはす」と申ければ、六条殿おばとり申たるとぞ聞侍し。そのかひありて、帝、関白もこの御末より出で来給へ

り。雪降のみゆきにおそく参り給て、「雪見むとしも急がれぬかな」と詠み給へるこそ、いとやさしく、昔の心地しはべれ。

夜女のもとにわたり給けるに、かねてもなくて、門に車のたえず立ちければ、それを召して出で給ければ、盛重といひしが、出でさせ給道に、常はふしたりければ、かならずをくれたてまつる事なかりけるに、田舎さぶらひと、盛重と、二人ともに具して出で給けるに、馬に乗りけるものゝ、おりざりければ、田舎人ともしたる続松にて、打ち落さむとしけるを、たけき物のふども多く具したりけるが、御車に寄らむとしけるを、盛重御車の供にて、「皇后宮の大夫殿おはしますぞ。あやまちつかうまつるな」といひければ、まどひをりて、「まなくまかりのけ」といひければ、過ぎ給にけり。次の日の夕まぐれに、頼治といひし武者の大殿に参て、御門のかたにて、盛重たづね出で、「よべかしこく御恩かうぶりて、あやまちをつかうまつるらむに」とて、かしこまり申にまいりたるなり。「かくとはな申給ひそ」といひけれど、大殿に申たりければ、召して御酒すゝめなどし給けりとぞ。盛重が子の盛道といふは語りけるとなむ。

ほりかはのながれ

堀河ほりかはのおとこの御子は、太郎にて、師頼しよりの大納言とておはせし。御母おはは、中将実基さねもとの君きみの女也むすめ。文ふみなどひろくならひ給て、才ざいおはする人におはしき。中弁なかつより宰相しやうになり給て、ひら宰相さいしやうにて、前の右兵衛みぎべゑの督かみとて、年久としひさしくおはしき。年寄としよりてぞ、中納言なかつ、大納言おほなつなどにひき統つときて、程ほどなくなり給し。近衛みかどの帝みかど、東宮あづまみやに立たせ給しかば、母后ははきさきの御おんゆかりにて、大夫おほおとになり給へりき。

歌うたをぞ口くちとく詠よみ給ける。はやく懸想けんきやうし給女の、「百首ひゃくしゆの哥詠かゐみ給たらば、あはむ」といふありけるに、題だいを内うちより出いしたりけるにしたがひて、宵よひと夜よがあか月つきになる程ほどに、詠よみはて給けるに、女むすめかくれにけるぞ、いとくちをしかりける。

周防すおうの内侍うちじがゆかりなりければ、内侍うちじのとがにぞ聞く人申ける。

大納言おほなつの御子おんこは、師能しよのりの弁へんとて、若狭守わがさのり道みちむねの女むすめの腹はらにおはしき。その兄あにとうと、師教しよのり、師光しよみつなど聞え給。三井寺みいでらに証禪しやうぜん已講いかうとて、よき智者ちやうしにおはしける、失うせ給にけり、師光しよみつは、小野おの宮みやの大納言おほなつ能実のりの孫まごにて、小野おの宮みやの侍従じじゆなど申にや。大納言おほなつの次つぎの御おんとうとは、師時しよときの中納言なかつと申。その御母おはは、侍従じじゆの宰相さいしやう

一 ものし—和本、国本「ものしり」。蓬本に
 拠り改む。
 二 おとり—国本「をとり」

三 ひつども—国本「ひつどん」

基平もとひらの女むすめなり。それも詩うたなどよく作り給たまひしなるべし。

大蔵卿おほくら匡房まをらふと申まをらふ、博士はかせの申まをらふされけるは、「(前時)この君きみは、詩うたの心得こころえで、よくつくり給たまいとぞほめきこゑける。唐からの文ふみものし給たまへる事は、兄あには劣せつとりけれど、日記にきなど量はかりなく書きつめ給たまひて、この世よにさばかり多く記しせる人ひと、なくぞはむべる。その文ふみどもは、失うせ給たまて後のち、鳥羽とよはの院のゐ、鳥羽とよはの北殿のきたに置おかせ給たまりけるに、権大ごんたい夫とと書かきつけられたる櫃三ひつども、数かず知らずぞはむべりける。宗茂そうも菅領すげうなどいひし学生がくせいの上う官くわんなりし時は、この君きみ弟子でしに召めして、車くるまなど貸かし給たまへりければ、外記げうきの車くるまは上う藤とうの次第しだいにこそ立つなるを、中将ちゆうじやう殿のの車くるまとて、牛飼うしひ一ひとに立たて、争あそひなどぞしける。

四 執筆—和本「執筆」。国本、蓬本に拠り改む。
 哥か詠よみにもおはして、兄あにの大納言(前時)も、この君きみも、堀河ほりがわの院のゐの百首ひゃくしゆなど詠よみ給たまへり。為隆なみたかの宰将さいじやうは、大弁おほとにて中納言ちゆうなごんにならむとしけるにも、宰将さいじやうの中將ちゆうじやうなれど、大弁おほとに劣せつとらず、なにごともしえ、除目じよもくの執筆しつしつなどもすればとて、うれへとゞめなどし給たまけり。おほかたものゝ上手うまにて、鳥羽とよは殿の御堂みだうの池掘いけほり、山作やまつくりなど、りもちて沙汰さたし給たまとぞ聞きへ侍まじりし。

五 すこし—国本「すがらし」
 ゆゝしく上うをぞ、多く持もち給たまへると承うけし。六七人ろくにんと持もち給たまへりけるを、夜よごとにみなおはしわたしけるとかや。冬ふゆは炭すすなどを持もたせて、火ひをこしたる、消きえがたに出いでつゝ、夜よもすこしありき給たまて、朝寝あさひを馬うまの時ときになるまではせられけると

一 一など一國本「と」

ぞ。さてその上ども、みな中よくて、いひかはしてぞおはしける。

この中納言の御子は、中宮大夫師忠の女の腹に、師仲の中納言とおはする。

衛門の督いくさをこしたりし折、東に流され給て、帰りのぼりておはすとぞ。この兄ども、少納言、大藏卿など聞ゆる、あまたをはしき。

大殿の御子は、入道中納言師俊とおはしき。大弁の宰相より、中納言になり

て、治部卿など申へほどに、御病によりて、頭おろし給て、塔の下の入道中納言

とぞ聞へ給し。それも物よくならひ給て、詩などよく作り、歌詠みにもおはしき。

この兄おとうとたち、かやうにおはする、ことはりと申ながら、いとありがたくなむ。

延喜天曆二代の御門、かしこき御世におはします上に、文作らせ給方も妙にお

はしますに、中務の宮、又すぐれ給へりけり。土御門殿、堀河殿あひつぎて、御

身の才も、文作らせ給方もすぐれ給へるに、土御門殿は才すぐれ、堀河殿は文作

らせ給事、すぐれておはすとぞ聞え給ける。この大納言、中納言たち、かくつぎ

給て、六代かくおはする、いとありがたくやむごとなし。この大納言、中納言殿

たちの詩も哥も、集どもに多く侍覽。

中納言の御子は、小納言になり給へりし。後には、大宮の亮とぞ聞へける。そ

のおとうとは、寛勝僧都とて、山におはしけるこそ、あめつちといふ女房の、み

二 しようども一國本「しようどん」

—
も—国本「ん」

めよきが生うみきこえたりければにや、みめもいときよらに、心ばへもつきくしき学生にて、山の探題たもとなどいふ事もし給けるに、あるべかしくいはまほしきさまに、いとめでたくおはしけれ。説法もよくし給ける。人にすぐれても聞きへ給はざりしかど、ある所にて、阿弥陀仏あみだぶつ釈しやくし給しこそ、法文のかぎりし給へば、聞き知ちらぬ人は、なにとも思まじきを、男も女も、身にしみてたうとがり申して、聞き知ちりたるは、かばかりの事ことなしと思おもひあへり。

天台大師の経しやくを釈しやくし給に、四よつつの法文にて、はじめ「如是」より、経の未すまで、句くごとに尺し給へば、その流れ汲くまむ人、法のりを説とかむそのあとを思おもふべければとて、はじめには因縁などいひて、さまざまの阿弥陀仏あみだぶつを説ときて、昔物むかし語説がたりとき具ぐしつゝ、「何事もわが心よりほかの事物ことものやはある。事の心こころを知らぬは、いとかひなし。朝夕あさゆふによその宝たからを数かずふるになむあるべき」など説とき給しお、思おもひかけずうけたまはりしこそ、世よの罪つみも滅ほろびぬらむかしとおぼえ侍ししか。

ゆめのかよひぢ

(後序) 堀河殿の御君達、大臣になり給はぬくちおしく。(師頼) 春宮の大夫は、一の大納言に

- 一 も一國本「ん」
 二 も一國本「ん」
 三 も一國本「ん」

て、時にあひ給へりしかば、なり給べかりしに、折節あきあふ事なくて、えならで失せ給にき。

若くおはしける時、夢に採桑老といふ舞をし給ふと見て、語り給えりけるを、物に心得ぬ人の、「宰將にて久しくやおはしまさむ」とあはせたりける、いとあさましく。宰將といふ事はありとても、採桑とやは心得べき。桑といふ木を採れる翁といふ心とも、その木を採りて、老いたりともいふにつけてぞ心得べきを、かゝるひがごとのあるなり。されば大納言殿腹立ちて、のたまひたりければにやありけむ、あはせて、さいひける人も、とく失せにけり。又この大納言殿も、まことに宰將にて久しくおはしき。昔九条の右の大納言御夢の、あしくあはせたりけむやうなる事なり。

宰將にて久しくおはせざらましかば、大臣にはなり給なまし。「又大殿の、いつきを取り据ゑ給えりしかばにや、御末のつかさのほりがたくおはする」と、申人もあるとかや。九条殿の北の方(康子)の宮も、便なき事なれど、それたゞ宮ばかりにおはしき。これはいつきに居給える人を、籠め据へ給へりし、類なくや。業平の中將も、「夢かうつゝか」の事にて止みにけり。道雅の三位も、「ゆふしでかけしいにしへに」などいひて、忍びたる事にこそ侍けれ。これは盗み出して、取り据ゑ給へれど、これは業平の中將にはかはりて、前のなれば、さまざまあやまりな

四 なれ一和本、國本「なに」。蓬本に拠り改む。

らずやあらむ。齋宮さいぐの女御なども、又いつきのをり給て、后きさきになり給へるもおはせずやはある。又大臣までぬしの、ぼり給にしかば、末すえのかたかるべきにもあらず。おのづからの事ことなるべし。

堀河殿ほりがわのどのの僧子そうごも多くおはしき。小野のの、法印ほういん、山の座主ざすなど聞へ給き。姫君ひめぎみは、冨家ふけの入道にりだうおとゞの北きたの方かたにておはせし。後のちには、御堂ごどうの御前ごぜんなど聞えて、御髪ごかみおろし給へりき。おとうとの姫君ひめぎみを子にし給て、御堂ごどうをもゆづり給へるは、堀河ほりがわの大納言おほのくわんごの子この弁へんに具ぐし給へりけるとかや。それもさまかゝておはすとぞ。又近この衛ゑの御門ごもんの御母女院おほはるめも、左ひだりの大臣おほなまの御女おほなまの、生うみたてまつり給ゑると、聞へ給たまひき。

この堀河殿ほりがわのどの、七十しじゅうになり給し年とし、御子ごごの堀河ほりがわの大納言殿おほのくわんごのどの、右近衛みぎのちかえの督とくと申まを、父ちちおとゞの御賀ごがせさせ給とて、長治元年ちやうじげん師走しすずの廿日はつかあまり、堀河殿ほりがわのどのにて、御賀ごがしたてまつり給と聞き、侍さむらいしこそ、昔むかしの事こと聞き、侍さむらいやうにおぼえ侍さむらいしか。

その殿どのに参まゐる僧そうの語かたり侍さむらいしは、瑠璃るりの御国ごくにの仏ぶつの、人のたけにおはします、かきたてまつりて、恒河こうがの岸きしの御法ごほう、黄金こがねの文字もじに七卷ななまき、たゞの文字もじの御経ごきやう七十しじゅう、写うつしたてまつりて、僧綱そうかう有職うしやくなど、七人しちにん請しやうせさせ給て、供養くわうやうしたてまつり給へる。15

一家いけの上達部かみちらべ、殿上人どのにん、太上おほほの大だい殿どのの、内大臣うちなまと申まを、よりははじめてわたり給て、御仏ごぶつ供養くわうやうの後のち、舞人まひにん、衆人しゆにんなど、左右みぎひだりの舞まひなどして、後のちにはおほみ遊あそびせさせ給ひ、

御みき聞えかはしなどして、いひ知らずめでたく聞ゝたてまつりしか。(雅正) 中の院の大將殿の若君にをはしける、十ばかりにて、箏の笛お吹き給けるこそ、の日めづらしく、涙も落しつべき事には侍けれ。

このおとゞよりは、(頭房) 六条の大殿は、さきに失せ給しかば、その御子の太上の大臣は、(後房) 堀河殿に何事もたづねならひ給て、親のごとくなむおはしける。それにひかれて、こと甥たちも、みなゝびき申ゝ給けるとぞ聞ゝ侍し。

ね あ は せ

(頭房) 六条の右の大臣の君たちは、まづ堀河の御門の御母中宮、その御腹に、(敦文) 前坊と、堀河の御門と、男宮生みたてまつり給えり。女宮は、媿子内親王と申は、白河の院の第一の御女の、伊勢のいつきにおはしましゝかば、中宮失せさせ給しかば、出でさせ給て、堀河の帝の姉にて、御母后になぞらへて、皇后宮に立ゝせ給ふ。院号ありて、郁芳門院と申き。

一 せー和本、国本なし。蓬本、金本に拠り補ふ。
二 判者「国本」判官「
寛治元年皐月の五日の日、あやめの根合せさせ給て、歌合の題五、あやめ、ほととぎす、さみだれ、祝恋なむ侍ける。こまかには哥合日記などに侍らむ。判

者は、(御厨)六条の大おほよろ殿せさせ給へり。周防の内侍、恋の歌に、

恋こひわびてながむる空そらのうき雲やわがしたもえの煙けなげなるらむ

と詠みけるを、判者、「あはれつかうまつりたる歌うたかな」と侍ければ、右の方人

「勝かちぬ」とて、この歌詠えいじて立ちにけりとなむ。二位大納言の、宰相さいしやうの中將に

おはせしにかはりて、孝善たかよしが「ひく手てもたゆく長ながき根ねの」と、詠よみとゞめ侍ぞかし。

永長元年八月七日、かくれさせ給にき。その年、大田おほいで楽がくとて、都みやこにも、道みちもさ
りあえず、神かみの社やしろく、この事ことひまなかりけるを、この御事ごことあるべくてなど、世
に申ける。この御事、白河院なげかせ給などもおろかなり。これによりて、御髮ごみづ
をろさせ給えり。あさましなども申もおろかなり。

御乳めのとこ母子ぼしの、まだ若わかくて廿一とか聞きえしも、法師ほうしになり侍し。かなしきことは
りと申ながら、若わかきそらにいとあはれに、ありがたき心こころなるべし。日野ひのといふと
ころに住すまるとぞ聞き侍し。次つぎの年としの秋あき、むかしの御事思おもいで、その知信ちのぶの大
徳とく、

一 「かなしきに」より十六行「筑前かへし」
まで和本、国本なし。蓬本に換り補ふ。

一 悲かなしきに秋はつきぬと思しを今年ことしも虫むしの音ねこそなかるれ

と詠よみて、筑前のごとて、伯はくの母ははと聞きえしがもとにつかはしたりければ、筑前か
へし、

一 虫一 国本「むし」

二 金葉集に「和本、国本空白。蓮本に廻り補ふ。」

虫の音はこの秋しもぞなきまさる別れの遠くなる心ちして

とぞ聞え侍しを、金葉集には、聞あやまりたるにや、書きたがへられてぞ侍なる。

六条院に御堂建てさせ給て、昔をはしましやうに、女房侍など、かはらぬさ

まに、いまだ置かれ侍なり。御悲しみ、昔も類あれど、かゝる事侍らず。御荘、

御封など、世にをはしますやうにし置かせ給えれば、末ぐの御門の御時にも、

三 このごろも、さきの齋宮つたへておはします「和本、国本なし。蓮本に廻り補ふ。」

あらためさせ給ことなくて、このごろも、前の齋宮伝へておはしますとこそ、聞えさせ給めれ。

ありすがは

四 七条大后宮「和本二条大御宮」。国本に廻り改む。

故中宮の姫宮、二条大后宮とて、女院のをとうとおはしまし、令子内親王とて、齋院になり給て、後に鳥羽の院の御母とて、皇后宮に立ち給て、大宮にあが

らせ給えりき。

いと心にくき宮のうちと聞侍しは。侍従大納言、三条のをとなど、まだ下臈にをはせし時、月のあかゝりける夜、さまやつして、宮原しのびて立ち聞給

一 一し和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

二 一し和本なし。国本、蓬本に拠り補ふ。

けるに、あるはみな寝入りなどしたるもありけり。この宮に入り給えれば、西の対の方、しづまりたるけしきにて、人々みな寝入りたるにやと、おぼしかりけるに、奥の方に、わざとなくて、箏の琴つま鳴らしして、たへく聞えけり。いとやさしく聞へけるに、北の対のつまなる局、妻戸もたてたりければ、月も見ぬにやと思しけるに、うちに源氏よみて、「榊こそいみじけれ」、「葵はしかあり」など聞えけり。又台盤所の方に、さざれ石まきて、乱基拾ふ音など聞えけるをぞ、昔の宮原もかくやありけむと侍ける。

又古き哥詠み、摂津のごといふ人、六条とて、若哥詠みなどありて、折節につけて、心にくきごたち多く侍けり。為忠といひしが子の為業といひしにや、いづれにかありけむ、かの宮に夜参りて、ごたちに遊びけるに、為忠国々まかれりける程なりけるに、年老ひたる声にて、「八橋、天の橋立と、いづれかまさりておぼえさせ給と、たよりに伝へさせ給へ」などいひけるを、後にまたあるごたち、「かく事づけし給人をば、誰とか知り給たる」といひければ、「八橋、天の橋立など侍に心得侍」といひけるを、次の日、「よべ心得たりといはれしこそ、なをその人のごとおぼゆる」などいひけるを聞て、摂津のご、とりもあえず、「心得ずの事や。八橋などいはむからに、われとやは心得べき。長柄の橋といはゞこそ、我とは知らめと侍」といひけるををかしく。

又土御門の齋院と申て、禊子内親王と申おはしき。その齋院は、常に法の筵ひ
 らかせ給て、ほうもん法文の事など、僧も参りあひて、たうとき事ども侍けり。みやま雅兼の入
 道中納言など参りつゝ、もてなしきこへ給けるとかや。歌なども、人く参りて
 詠む折も侍けり。「水の上の花」とかいふ題の歌、時の歌詠みども、参りて詠み
 けるに、女房の歌、とりくをかしかりければ、木工頭俊頼も、むしろにつらな
 りて、「この歌は、暮ならば、かたみ先にてぞよく侍らむ」と、とりくほほめ
 られけるとぞ。

ゝのひとりは、堀河の君とて、頭仲の伯の女のおはせし歌、
 雪と散る花の下行く山水のさえぬや春のしるしなるらむ

又、

谷川の岸の桜の散るまゝにいと咲きそふなみの花かな

このほかの歌ども聞へ侍りしかど、忘れにけり。（権世）入道治部卿の、「風や峯をわた
 るらむ」と詠み給も、その度の歌なり。白河院、哥ども召し寄せて、御覧じなど
 せさせ給けり。

（白河）一院の御女なればにや、ことのほかにあるべかしくぞ、宮のうち侍ける。女房
 中麿になりぬれば、みづから侍に物いひなどはせざりけりとぞ聞へ侍し。この齋
 院（禊子）かくれさせ給て後、そのあとに、堀河の齋院つぎて住み給けるにぞ、昔思し出

で、中院(雅定)の入道おとゞ詠み給ける、

有栖川ありすがは同じ流れと思へども昔むかしのかけの見えばこそあらめ

むらさきのゆかり

一 の一和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

二 と一和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

三 御はらから一和本「御はらか」。国本、蓬本に拠り補ふ。

四 「中納言」より十一行「しもづかさなどいふことは」まで、和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

五 はづかしく一國本「はづかしくも」

六 べかり一和本、国本「へり」。蓬本に拠り補ふ。

中宮(皇子)の御せうとたち、男も僧も、さまざま多くおはしき。太政大臣雅実のおと

と申は、中宮の一つ御はらからにて、六条の右の大員おとぎの大臣のおはしき。そ

の御腹、治部卿隆俊の中納言(四)の女なり。久我の太政大臣申き。いと御身の才など

はおはせざりしかど、世に重く思はれたる人にぞおはせし。

父おとゞ、わがまゝなる御心にて、ひがくしき事こともし給ひけるにも、この

おとゞ参り給ければ、とゞまり給けり。白河院も、恥ぢさせ給へりけるとこそ聞

え侍しか。醍醐より僧正の申さるゝ事ことなど侍りけるを、このおとゞに仰せられあ

はせければ、「しる所などいくばくも侍らねば、侍ふものどもに申つけて、下司しもつか

などいふ事は、みこ知り給はぬ事なむ」など侍ければ、「いと五はづかしくあるか

な」と仰せられけり。

堀河ほりかはの帝の御時、近衛ちかゑの少将とて、入道右のおとゞの、石清水いししみづの舞人まひびとし給へか

りけるに、中(宗徳)の御門(みかど)の内の大臣(おとぎ)、少将(しょうしょう)とおはするは、上臈(かみ)なりけれど、一の舞(まい)は、中の院(いん)ぞ仰(おほ)せられむずらむと思しけるに、知足院殿(ちそくいん)の関白(せんぱく)におはするに、帝(みかど)もはゞかりて、宗能(むねよし)の一(ひと)の舞(まい)し給ければ、久我(くが)のおとゞ聞(き)くつけ給て、この少将(しょうしょう)をば呼(よ)びとゞめて、腹立(はらた)ちて籠(こも)り給ければ、帝(みかど)もいたませ給て、心ゆかさむとて、加階(かゑ)を給はせたりければ、しかあらば、出(い)でありかざらむも便(びん)なしとて、よろこび申(まう)などせられけるに、関白(せんぱく)殿(たむらひ)対面(たいめん)し給て、「事のついでなれば申ぞ。大舞(おほまい)には、おとゞ尊者(おんげ)に申さむずるなり。そのよし聞(き)へらるべき也」などありて、頼(たの)みておはしける程(ほど)に、その日(ひ)になりて、見(み)せにつかはしたりければ、御物忌(みぶつぎ)とて、門(かど)さしておはしければ、俊明(しゅんめい)の大納言(おほのつひご)をぞ、尊者(おんげ)には呼(よ)び給へりける。

四(四子)条(じょう)の宮(みや)は、「むげにくだりたるかな」とて、泣(な)かせ給けるとかや。臨時(りんじ)の祭(まつり)の一の舞(まい)、少将(しょうしょう)のし給はぬ、やすからぬ心にて、かくたがへ給なりけり。

その入道(みちの)右(みぎ)の大臣(おとぎ)、宰相(さいしやう)の中将(ちゅうしょう)と申(まう)時(とき)、実能(まねよし)のおとゞ、三位(さんゐ)中将(ちゅうしょう)とおはせし、こえて中納言(ちゅうなごん)になり給たりけるにも、太政(たいてい)の大臣(おとぎ)、院(いん)うらみ申(まう)と聞(き)かせ給て、「中宮(ちゅうぐう)のせうとにて、内(うち)のせさせ給、ずちなき事を」と仰(おほ)せられながら、長忠(ながちゆう)の宰相(さいしやう)、大弁(おほひん)にて中納言(ちゅうなごん)になりたりけるを、「子を弁(ひん)になさむと申たりける物を」ととて、中納言(ちゅうなごん)にて七八日(しちやっぴつ)ばかりありける長忠(ながちゆう)をば、大蔵(おほくら)卿(きやう)になして、子(こ)の能忠(よねちゆう)は、弁(ひん)になりてぞ、中の院(ちゅうのいん)の宰相(さいしやう)の中将(ちゅうしょう)は、中納言(ちゅうなごん)になりけるとうけ給はりし。

待賢門院立、せ給ける程にや、白河院、盛重とてありしを御使にて、大政の大
 臣に、「なに事も思ふ事のかなはぬはなきに、上臈女房なむ、心のかなはぬ事は
 あるを、思ひかけず上臈女房をまうけたる事なむ侍」と仰せられければ、「いか
 なる人の事に」と問ひ給に、外腹の姫君のおはしけるが御事なりけり。それを聞
 へ給て、御後見呼び給て、「姫君のもとへ沙汰しやる事どもはおこたらぬか」と
 問ひ給へば、「さらにおこたり侍らず」と申すに、「いまはその沙汰あるまじ」
 とありければ、御使も、後見も、いと思はずに思へりけるを、「返り事いかゞ」
 と申ければ、「うけ給はりぬ」とばかり申給けり。院は、ともかくもの給はざり
 けりとなむ。かやうに院にも閑白にも、はゞかり給はぬ人にておはしけり。

一 御心「和本」御。国本、蓬本に廻り補ふ。

御心あてなるあまりに、ものゝ数も、こまかに知り給はざりけるにや、納殿す
 るものに人のもとに、「きぬせさせにやれ」とありければ、「二つが料には、二
 疋つかはしつる」と申ければ、「二つをこそ、二疋にてはすれ」との給て、おど
 ろき給けるに、内匠助ながしとかいふに、問ひ給ければ、同じさまに申けるに
 こそ、「さはえ知らざりけるにこそ」と折れ給けれ。

二 申けるに「和本、国本なし。蓬本に廻り補ふ。

これを家人語りあへりけるを聞て、兼延といふ近衛舍人、「いづれの国のき
 ぬとかを、こまかに切りなどせさせ給ところも、おはします物を」などいひける、
 いとほづかしく。

このおほいまうちぎみ、おこり心地わづらひ給けるに、白河院より、平等院の僧正をつかはして、祈らせ給けるに、おちたりける布施に、馬をひき給へりける。おほかたいひ知らぬ悪馬になむ侍ければ、院きこしめして、「われこそ布施も得べけれ」と、盛重といひしをつかはして、仰せられければ、「院にありがたきも5の参らせむ」とて、武蔵の大徳隆頼が作りたる、小弓の弓柄の、しも一ひねりしたるを、思ひ出で、漆のきらめきたる砥して、すりさはて、錦の弓柄取り捨て、陸奥国紙して、ひき巻きて、錦の袋にも入れず、たゞ陸奥国紙に包みて、たてまつられたりければ、「いとめづらしきものなり」と、たちかへり仰せられけるとぞ聞侍し。

にるまくら

このおとゞの御子は、大納言頭通と申、父おとゞよりも、さきに失せ給にき。その御子は、いまの内大臣雅通の大將と申なるべし。この大將の母、能俊の治部卿の女にやおはすらむ。

又この御兄、や、摂津守広綱の女の腹に、山の座主明雲権僧正とて、いまおは

一 ひろつな一和本、国本「ひろつな」。蓬本、金本に拠り改む。

一 まさ定一和本、国本「まさたゞ」。蓬本、金本に抛り改む。

二 さう一和本、国本「いせ」。蓬本、金本に抛り改む。
三 の一和本、国本なし。蓬本、金本に抛り補ふ。

四 つくりつたへ一和本、国本「つくりたへ」。蓬本に抛り補ふ。
五 いなりまつり一和本、国本、蓬本「いなりまつ」。蓬本傍註「り也」に抛り補ふ。
六 ふきわたり一和本「ふきてわたり」

するなるこそ、世の末には、かやうなる天台座主おはしがたくうけ給はれ。わが道の法文をも、深くまなび給ひ、かた／＼にたうとくて、御心ばへも重くおはするにや、山の上こそぞりてもちゐたてまつりたるとかや。うちつゞき保つ人、ありがたく聞へ給に、大衆など、鐘ならしておこる事もし侍らぬとかや。

又大政の大臣の御子にては、右大臣雅定と申て、さきにも舞人の事侍つる、中の院のおとゞおはしき。御母加賀兵衛とかいひしがいもうとにて、下臈女房におはせしかど、兄の大納言よりも、おぼえもおはし、もてなし申給き。このおとゞに才おはして、公事などもよくつかへ給けり。

笙の笛なむすぐれ給へりける。時元ゝて侍しを、声もたがへず、うつし給へるとぞ。まじり丸といふ笛をも伝へり。まじり丸とは、唐の竹、大和の竹の中に、すぐれたる音なるをえらびて、作りたるとなむ。まじり丸といふ笙の笛は、二つぞ侍なる。時元が兄ゝて、時忠といひしも作りつたへ侍りけり。

むらといひて、稻荷祭などいふ祭わたるものゝ、吹きわたりける笛の、響ことなる竹のまじはりて聞へ侍ければ、棧敷にて時忠吹び寄せて、「かゝる晴には、同じくは、かやうの笛をこそ吹かめ」とて、わが笛に取り換へて、「われを見知りたらむ。後に取り換へむ」といひければ、むらの男よろこびて、「みな見知りたてまつれ」とて、取り換へたりけるを、すぐれたる響ありける竹を抜き換へて、

- 一 ならし和本、国本「なとら」。蓬本に拠り改む。
- 二 時ひでし和本、国本「ひで」。蓬本に拠り補ふ。
- 三 ごころし和本、国本「ころ」。蓬本に拠り改む。

四 えし和本「へ」

五 ふえしらぶるし和本、国本「ふしゑる」。蓬本に拠り改む。

六 まひし和本、国本「かひ」。蓬本に拠り補ふ。

七 たゞかたし和本、国本「たかた」。蓬本に拠り補ふ。

八 ちか、たし和本、国本「ちかた」。蓬本に拠り補ふ。

ゑならず調べたて、給たりければ、よろこびて返し得てなむ侍ける。そのまじり丸は、時忠が子の、時秀といひしが伝へたりしを、子も侍らざりしかば、この頃は、誰か伝へ侍らむ。

時忠、刑部丞義光といひし源氏の武者の、好み侍しに教へて、その笛をもとりこめて侍ける程に、義光あづまの方へまかりけるに、時忠も、「いかで年ごろの本意に送り申さむ」とて、供して行きけるを、この笛の事を思ふにやと心得けむ、「わが身はいかでもありなむ。道の人にて、この笛いかでか伝へざらむ」とて、貸し給たりければ、これよりこそ、暇乞ひて帰りのほりにけれ。

その笛をかかたしなみたりけれども、時元は若かりける、武能といひて、えならず笛調ぶる道のものありけるが、年たけて、夜道たどくしきを、手をひきつゝまかりければ、いとうれしく思ひて、ゑならず調ぶるやうをも、伝へて侍りければにや、いと事なる音ある笛にぞ侍なる。

この右の大臣、かゝる伝へておはするのみにもあらず、家の事にて、胡飲酒舞ひ伝へ給事も、いみじくその道得給て、心ごとにおはしける。その舞も、資忠とてありし舞人の、政連といひしと見て、祇園の会のはやしの日、取り殺されにければ、忠方、近方などいひしも、まだいはけなくて、習ひも伝へねば、大政の大臣の、忠方には教へ給へるぞかし。しかはあれども、この大殿ばかりは、え

伝へざるべし。

政連は出雲に流されて、かの国の司の下り侍けるにも教へ、また子の友貞とかいふも、京へのほりて、あきなりといひし中納言に教へなどすと聞へしかども、

この大殿伝へ給へるばかりは、いかでか侍らむ。兄の忠方は、胡飲酒を伝へ、おとうとの近方は、採桑老を伝へ、おとうとの天王寺の公貞といひしに伝へて、こ

のごろは、その子どもの兄おとうとの、筋わかれて舞ひ侍となむ。忠方、近方、落蹲といふ舞し侍しに、おとうと、兄のかたを踏まぬさまに舞ひ侍しは、めづら

しき事に侍しお、子どもはいかゞ侍らむ、ゆかしく。

この右の大臣は、御心ばへすなをにて、いと労ある人にておはしけるに、後の世の事など、思しとりたる心にや、わづらはしきけなどもおはせて、いとおかし

き人にぞおはしまし。若くおはせしころにや、伊予のごといふ女を語らひ給けるに、ものゝ給はで、程もへぬ程に、山城の前の司なる人に馴れると聞て、や

り給へりける御歌こそ、いと労あり、おかしく聞え侍しか。

まことにや三年も待たで山城の伏見の里に新枕する
と侍ける。昔物語の心地して、いとやさしくうけ給はりしか。おほかた歌詠みに

おはしき。

二 殿上人におはせし時、石清水の臨時の祭の使し給へりけるに、その宮にて、御

二 おはせし和本、国本「おは」。蓬本に拠り補ふ。

神楽など果て、まかり出で給ほどに、馬場のこずゑに、ほとゝぎすの鳴きけるを聞、給て、俊頼の君の、陪從にておはしけるに、「木工の頭の殿、これは聞、給や」と侍ければ、「思ひもかけぬ春鳴けば、にくゝこそ侍めれ」と、心とくこたへ給けるこそ、いとしもなき歌、詠みなどし侍らむには、はるかにまさりて聞へけれ。(定頼)四条中納言、この料に詠み置き給けるにやとさへおぼえて。この聞、給ておどろかし給も、優に侍けり。

かやうにおはせむ人、いとありがたく侍が、出家などし給しこそ、いとぎよらかにめでたくうけ給はりしか。別の御病などもなくて、たゞこの世はかくて、後の世の御ためとて、右大将、左大将などかへしたてまつりて、かくなり給はむなどいふ御まうけもなくて、中の院にて頭おろして、籠り給へりしこそ、いと心よく侍しか。

御子もおはせねば、兄の御子を、(雅通)いまの内の大臣、又雅兼の入道中納言の御子の、定房のやしなひ給たるかひありて、位高くおのゝくなり給へり。御能どもをつぎ給はぬぞくちをしく侍る。内の大おとよ臣の御子も、少将とて二人おはすなり。

一 少将―和本、因本「りる」。蓬本に廻り改む。

むさしのくさ

一 はらくくにおとこ女あまたおはしき一和本、国本なし。蓮本に廻り補ふ。

(頭題) 六条の右の大^{おとこ}臣は、おほかた君たちあまたおはしき。太政大臣につぎたてまつりては、大納言雅俊とておはしき。御腹、美濃守良任と聞へし女の腹なり。京極に九体の丈六つくり給へり。その御子は、腹ぐに男女あまたおはしき。

伊予守為家のぬしの女の腹に、神祇の伯頭重と申き。もとは前の少将肥前のすけにてぞ久しくおはせし。その同じ腹に、四位の侍従頭親と申、後には右京権大夫播磨守など聞へき。同じ御腹に、上野守頭俊とておはしき。中宮の御祖父にやおはすらむ。又憲俊の中將と聞へし、後には大式となり給へりき。百良と御童名聞へき。又摩尼君と申、左の馬の頭、権の頭など聞へき。このほかにも、上野、越中などになり給へると聞へき。僧子ども多くおはするなるべし。

大納言の同じ御腹に、中納言国信と申、おはしき。堀河の院の御おちの中に、ことに親しく候給けりとぞ聞へ給し。歌詠みにおはして、百首哥人にもおはすめり。この中納言の姫君、大君は、近くおはしまし、少将殿、御母二位と申なるべし。次には、入道殿にさぶらひ給て、さがたき人におはすなり。第三の君は、

二 にあり和本、国本「にな」。蓮本に廻り改む。

(五厨) いまの殿の御母におはします。三位の位得給へるなるべし。うちつゞき二人の一人の御祖父にて、いとめでたき御未なり。

(国臣) この中納言の御子に、四位の少将頭國としておはしき。その御母、前の伊予守泰仲の女と聞へき。その少将、いとよき人にて、歌などよく詠み給き。とく失せ給にき。少将の一つ腹のおとうにておはしけむ、備前の前司、修理の権大夫、越後守など聞へ給き。

(頭厨) 又六条殿、御子に、頭仲の伯と聞へ給は、大納言、中納言などの兄、やおはしけむ。その母、備後守さだなかの女の腹にやおはすらむ。歌詠み、笙の笛よく吹き給けり。公里、いひしが、調子をすぐれて伝へたりけるを、うつし習ひ給へりけるとぞ。

(僧徒) その御子、淡路守、宮内の大輔など聞へ給き。覚家法印とて、法性寺殿の、仏のごとくに頼ませ給へるおはしき。僧子もあまたおはするなるべし。女子は、堀河の、右兵衛督など聞へ侍て、みな歌詠みにておはすと聞へ給し。姉の君は、もとは、前の斎院の六条と申けるにや。金葉集に、

露しげき野べにならひてきりくすわが手枕の下に鳴くなり

と詠み給へるなるべし。堀河とは、後に申けるなるべし。かやうなる女歌詠みは、世に出で来給はむ事かたく侍べし。

— ひろたかかかなをかなど一和本「ひろたかかかなをなかに」国本「ひろかたかかなをなかに」。蓬本の「弘高金岡など」を参照して改む。

又楊梅の大納言頭雅とて、六条の大殿、御子おはしき。その末いとおはせぬなるべし。御女ぞ、鳥羽の女院の皇后宮の時、御匣殿とおはせし。女院の御せうとの、備後の前の守と聞えしは、大納言の婿におはせしかばなるべし。その大納言の御車の紋こそ、きらゝかにおもしろく侍けれ。大かたばみの古き絵に、弘高か金岡などかきたりけるにや、それを見てせられ給けるとぞ。いまは乗り給ふ人もおはせずやあらむ。

ものなど書き給事はおはせざりけるにや、行尊僧正のもとにやり給へりける文の上書に、「きむく上、はうどうゐのそう上の御ばうに」とありける。仮名ゝらば、謹上なくてありつべけれども、書き給ぬあまりにやありけむ。こと能も聞へ給はざりき。たゞ車をぞ、なべてよりもよくしたゝめて、牛雑色ゝよげにてありき給ける。車などよくする人は、まさなき事とて、はげあしくなれども、にはかにかき据ゑたるこそ、しかるべき人は、さもすると申ともあるべし。これも又一つのやうにて、つやゝかにし給けるにこそ。

かぜなどの料にておはしけるにや、ひが事ぞ常にし給ける。雨の降るに、「車ひき入れよ」といはむとては、「車降る。時雨さし入れよ」と侍りければ、車のさまゞく空より降らむ、いとおそろしかるべしなど、思ひあへりける。かやうの事を堀河の院きこしめして、「ひが事こそ不便なれ。祈りはせぬか」と仰せられ

一 おはせー和本、国本「おは」。蓬本に拠り補ふ。

二 六条殿ー和本、六条院殿。国本、蓬本に拠り改む。

三 一ー和本、国本「う」。蓬本に拠り改む。

ければ、御返り事申されける程に、鼠の走りわたりければ、「されば等身の鼠作らむと侍か」と申されければ、「おほかたいふにもたえず」となむ仰せられける。これは信濃守これつねの女の腹がするなるべし。

同じはらからに、信雅の陸奥守とおはしき。加賀介家定とて、久しくおはせしが、後に陸奥にはなり給へりし也。その子は、成雅の君とて、知足院の入道おとゞ、寵し給人にておはすと聞へき。後には近江の中將など聞へし程に、都にみだれ侍りし折、左の大臣のゆかりに法師になりて、越の方に流され給と聞へし。うつりのほり給へるなるべし。その成雅の中將の兄かおとうとにてか、房覚僧正とて、三井寺の験者おはすとぞ聞へ給。

又、六条殿の御子に、因幡守惟綱の女の内侍の腹に、雅兼の治部卿と申中納言おはしき。才学すぐれ給、公事に仕へ給事も、昔もありがたき人になむおはしける。詩作り、歌詠みにおはしき。高くもいたり給へかりしを、御病に頭おろし給て、久しくおはしき。鳥羽の院、大事仰せられあはせむとて、常に召し出で、対面せさせ給折ども侍けり。

この入道中納言の君たちぞ、この御流れには、上達部などまでも、あまた聞へ給う中に、雅綱と聞へ給し。よく仕へ給とて、四位の少弁にめづらしくなり給へり。とく失せ給にき。その御おとうとに、能俊の大納言の女の腹に、当時新中納

- 一 一定海一和本、国本「宗海」。蓬本に廻り改む。
- 二 賞樹一和本、国本「賞宗」。蓬本に廻り改む。
- 三 やんごとなき一和本、国本「や監事なる」。蓬本に廻り改む。
- 四 おほしめし一和本「おほ、しめし」。国本、蓬本に廻り改む。

言雅頼と聞へ給こそ、入道治部卿の御子には、文など伝へ給らめ、家をつき給へる人にこそ、同じ御腹に、その次に、大納言と申、入道君のおととの御子にし給て、高くのほり給へるなるべし。その御をとうと、四位の少将通能と申なるは、琵琶弾き給と聞へ給。清暑堂の御神楽にも、弾き給けるなむ。師能の弁とおはせし、やしなひ申給たると聞へ給し、これにやおはすらむ。

(願所) 六条の大殿、君たちなど、僧も多くおはすれど、さのみ申つくしがたし。山に相賞僧都とて、大原に住み給おはしき。醍醐には、大僧正定海とて、讃岐の御かどの御ちそうにおはしき。山階寺の隆賞僧正、東大寺の賞樹僧都と申は、東南院と聞へ給き。これやんごとなき学生におはしき。

賞雅僧都ともおはしき。歌詠みにてぞおはせし。末の世の僧など、さやうに詠まむ、ありがたくや侍らむ。白河院のいとしもなく思しめしたる人にておはしけるに、俊頼の君、金葉集撰びたてまつりたりけるはじめに、貫之「春立つ事を春日野」といふ歌、その次、賞雅法師とて入り給へりけるを、「貫之もめでたしといひながら、三代集に漏れ来て、あまりふりびたる。賞雅法師も、げにともつゞきおほえず」など仰せられければ、古き上手ども入るまじかりけり。又いとしもなく思しめす人除くべかりけりとして、御おほえの人をのみとり入れて、次の度たてまつりければ、「これもげにとおほえず」と仰せられければ、又作り直し

て、源・重之はじめに入れたるをぞ、とどめさせ給けるは、隠れて世にもひろまらで、中たびのが世には散れるなるべし。

一 み一和本、国本「みよ」。蓬本に拠り改む。
又山におはせし妙香院の清覚など聞へ給し、その内供の一つ腹にや、はたの御腹にや、治部の大輔雅光と聞へ給し歌詠みおほしき。人に知られたる歌、多く詠み給へりし人ぞかし。「逢ふまでは思ひもよらず」、又「身を宇治川のはしぐ」

二 おと一和本、国本「おと」。蓬本に拠り補ふ。
「など聞へ侍めり。その御子には、実寛法印とて、山におはす。六条殿、御子には、又男も、丹波の前司、和泉の前司など申ておほしき。はかぐしき末おはせぬなるべし。」

もしほのけぶり

二条の帝の御時、近くさぶらひ給て、督の君とか聞へ給しは、事のほかにときめき給と聞へ給しかば、内侍の督になり給へるにやあらむ。たゞ又督の殿など申にや、よくもえうけ給はりさだめざりし。それこそ六条殿、御子の、季房の三河守の子ぞ、大夫とか申て、伊勢に籠り給へる御女と聞へ給しか。

かの御時、女御、后かたぐうちつゞき多く聞へ給しに、御心のはなにて、一

一 とがー和本、国本」とり。蓬本に拠り改む。

二 き、にくきー国本「きにくき」

三 かなかくー和本、国本「かたに」。蓬本に拠り改む。

四 くに「国本」には「
五 やん事なきー和本、国本「やらむ事なき」。蓬本に拠り改む。

時のみ、盛りすくなく聞へしに、これぞときはに聞へ給て、家をさへつくりて給はり、世にもつてあつかふ程に聞へ給て、帝御なやみにさへ、とが負ひ給しぞかし。御乳母の大納言の三位なども、「いたくな参り給そ」など侍けるとかや。ある折は、常にも候給はぬ折などありけるとかや。かつは御おぼえの事など、祈り捨て給へる方も聞へけるとかや。かつは聞にくきにも聞へけるとぞ。

思はれ給ほどには、「年若き人なれば、おはしまさむには、いかにもあらむずらむ。御消息ども返し参らせよ」とありければ、泣くく取り重ねて、参らせられ侍ければ、信保とかいふ人うけ給はりて、かき集めさせ給へる、藻塩の煙となりけむも、悲しく思しけむ。

御髪くまの丈たけにあまり給へりけるも、そぎおろさばやとは聞へけれど、心つよき事こと三 かつたくて、月日へける程ほどに、心ならずやありけむ、昔むかしにあかぬ事ことも出で来て、若わかき上達部かみだちめの、時ときにあいたるところにこそ迎へられ給てと、聞へ侍めれ。召めり返かへさせ給ける、やん事なき水釜みづかまのあとも、いまや思おもひあはすらむ、いとかしこくこそ。

六条のおとと、あさましく末すまひろくおはします。昔むかしより藤波ふぢなみの流れこそ、帝みかどの祖父おぢにては、うちつゞき給へるに、堀河ほりかはの院いんの御祖父おぢにめづらしく聞へ給しか。かく末すま栄へひろごらせ給へり。一人の祖父おぢとなり、うちつゞきておはします。六

一 四位一國本「四ゐ」

条殿の御女は、堀河の院の御時に、宣陽殿と申なるは、女御の宣旨などはなかりけるにや、醍醐におはすとぞ聞へし。近く失せ給にき。

堀河殿(後厨)御おとうとに、中宮の大夫師忠の大納言おはしき。その御母、堀河の頼宗の右の大臣の女也。この大納言の御子は、左の馬の頭師隆とて、千日の講久しく行ひ給て、後には大藏卿と申き。そのおとうとは、師親の四位の侍従など申ておはしき。大納言の御子は、仁和寺の大僧正寛遍と申ておはしき。備中守まさなりと聞へし女の腹にやおはしけむ。高松の院の中宮とて、御髪おろさせ給し、戒三の師におはしけり。東寺の長者にて、近く失せ給にけり。

中宮(師忠)の大夫の御をとうと広綱とておはしき。四位までやのぼり給けむ。摂津守など申とかや。又堀河の殿などの同じ御腹にやおはしけむ、仁覚大僧正と申、山の座主をはしき。それ中宮の大夫の兄、やおはしけむ。又こと腹に、山階寺の実覚僧都など申ておはしき。莊嚴院の僧都と申なるべし。

二 たかまつ一和本、国本「かまへ」。蓬本に
擬り改む。
三 かいの一和本、国本「かは」。蓬本に擬り
改む。

一 みこたち第八―和本、国本なし。目録に
 掲り補ふ。

みこたち 第八

源氏の宮す所

御門の祖父(実兄)にをはせねど、東宮や宮たちなどの御母(実母)にをはせしに、後三条院の女御にて、侍従宰相基平(むねひら)の御女(むすめ)こそをはせしか。その宰相は、小一条院の御子(みこ)にをはしき。その源氏の宮す所の御名は、基子の女御とぞ申す。その御せうとにては、春宮大夫季宗(すきむね)、大藏卿行宗(ゆきむね)など申てをはしき。みな三位の位(くらゐ)にぞをはせし。大藏卿は八十ばかりまでをはせしかば、近くまで聞へ給き。哥詠(かよ)みにをはしき。二人ながら、唐の文なども作り給とぞ聞へ侍し。良頼の中納言(ちゆうなごん)の女の腹(はら)の君たち也。女御(むすめ)も同じ御はらからにをはす。

またかの腹(はら)に、平等院僧正行尊とて、三井寺にをはせしこそ、名高(なだか)き験者(けんしや)にてをはせしか。小阿闍梨(あざり)など申ける折(まじ)より、大峯(おほなね)、葛城(かつらぎ)はさる事にて、遠(とほ)き国(くに)く山(やま)など、久(ひさ)しく行(ゆ)ひ給て、白川院、鳥羽院、うちつゞき御(み)ぢ僧(しやう)にをはしき。仁

一「後冷泉院」より十行「よめる」まで、
和本、国本なし。蓬本に掘り補ふ。

和寺の女院の、女御参りにや侍けむ、御物ゝけ、その夜になりてをこらせ給て、
にはかに大事におはしましけるに、この僧正祈り申給ければ、程なくをこたらせ
給て、御車にたてまつりて、出でさせ給にけるあとに、物つきに物うたせて、ゐ
給えりけるこそ、いとめでたく侍けれと、伝へうけ給はりしか。

僧正哥詠みにはして、代々の集どもにも、多く入り給へるとこそ聞侍れ。
生のいはやにて、

草の庵をなに露けしと思ひけむ漏らぬいはやも袖はぬれけり

など詠み給へり。伝へ聞く人の袖さへ、絞りつゝなむ聞え侍。大奉にて、後冷泉
院失せさせ給て、世の憂き事など思みだれて、籠りあて侍りけるに、後三条院位
に即かせ給て後、七月七日参るべきよし仰せられければ、詠める、

もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし

など詠み給える。哥詠まさらむは本意なかるべき事なるべし。いと御心もすみ
まさり給けむ。手書きにもおはして、仮名の手本など世にとゞまり侍る也。こと
腹ぐにも、観宗寺の僧都、光明山の僧都など申てをはしき。

その女御の御腹に、み子あまたをはしき。東宮と申、延久三年二月に生れ給
て、同四年十二月に、御年二にて春宮に立ち給き。永保元年八月に、御元服させ
せ給。応徳二年十一月八日、十五にをはしまし、かくれさせ給にき。平等院

僧正(行尊)は、女御の御せうとなれば、東宮の御忌に籠り給て、御はて過ぎて、人々散りけるに、常陸の乳母(ぬの)にをくり給と聞へ侍し、

思ひきや春の宮人名のみして花よりさきに散らむ物とは

と詠み給ける。返し、御乳母、

花よりも散りくになる身を知らで千歳の春とたのみける哉

とぞ聞へ侍し。

これは、白川院の腹異(はらご)の御をとうと、後三条院の第二御子なり。東宮(実仁)と同じ腹に、第三御子をはしき。すけ人の親王と申き。延久元年正月に生れ給へり。承保二年十二月に、親王の宣旨かふり給。この御子は才(ぎ)をはして、詩など作り給事、昔の中務(つかさ)の宮などのやうにをはしき。哥詠(か)み給事もすぐれ給へりき。円宗寺の花見給て、

植(う)え置きし君なき宿(やど)に年へたる花は我身の心ちこそすれ

と詠み給えるこそ、いとあはれに聞へ侍しか。

かやうの御哥(歌)ども、木工(ほく)の頭の撰(あ)びてたてまつれる集(あ)ひに、すけひとの御子と書きたりければ、白川院は、「いかにこゝに見む程(ほど)、かくは書きたるぞ」と仰せらども、御をとうとなればなるべし。

一 若宮―国本「若宮」

詩などは、数知らずめでたき、侍なり。「よろこびもなし、うれへもなし、世上の心」とかや作り給へりけるを、中御室と申てをはせしがの給けるは、「うれへこそあれ」とのたまはせけれど、位にはかならずしも、御門の御子なれど、即き給事ならねば、もの知り給へる人は、歎きと思すべからず。かの仁和御門の宮の利口にこそあれ、何事かは御のぞみもあらむな。

花のあるじ 又は宮の大將とも
源氏大將とも

三宮の御子は、中宮大夫師忠の大納言の御女の腹に、花園、左大臣とてをはせしこそ、光源氏なども、かゝる人をこそ申さまほしくおぼえ給しか、まだ幼くをはせし程は、若宮と申ゝに、御能も御みめも、しかるべき事と見えて、人にもすぐれ給て、常に弾物、吹物などせさせ給。

又詩作り、哥など詠ませ給けるに、庭の桜盛りなりけるころ、濃きむらさきの御指貫に、直衣姿いとをかしげにて、我も詠ませ給、人にも哥詠ませさせ給とて、をしと思花のあるじををきながら我物がほに散らす風かな

と詠み給えりければ、父の宮見給て、「まろをゝきて、若宮はあしく詠み給か」

一年一國本「季」

など愛し申給けるとぞ、人の語り侍し。

御年十三になり給し時、うみかうぶりせさせ給しかば、白川院の御子にし申させ給て、院にて、基隆の三位の播磨守なりし、初元結したてまつりて、右の大臣とて、久我のおとゞをせし、御かうぶりせさせたまつり給けり。御みめのきよらさ、おとなのやうにいっしかをはして、見たてまつる人、よろこびの涙も、こぼしつべくなむありける。

元永二年にや侍けむ、中の秋の頃、御年十七とかや申けむ。はじめて源氏の御姓給はりて、御名は有仁、聞へき。やがてその日三位中将になり給き。その年の霜月の頃、中納言になり給て、やがて中納言中将と聞えき。昔も御門の御子、一人の人の君達などをはすれど、かく四位五位なども聞へ給はで、はじめて三位中将になり給ひ、年のうちに中納言中将などは、いとありがたくや侍らむ。

またその次の年、保安元年にや侍けむ、大納言になり給て、年をならべて、右近大将かけ給き。世の人、宮大将など申て、御幸見る人は、これを見物にしあへる事に侍しか。白河の花見の御幸とて侍し和歌の序は、この大将殿書き給へりけるをば、世こそりてほめきこえ侍き。

低枝を折りてさゝげもたれば、紅蠟の色手に満てり。

落葉を踏みてたゞずみたれば、紫麝の気衣に薫す。

など書き給えりける、その人のし給える事とおぼえて、なつかしく優いよに侍けるとぞ。御哥もおぼえ侍。

かげきよき花の鏡かざらみと見ゆるかなのどかに澄すめる白河の水とぞ聞き侍し。

一 眞まことて一國本一御手

二 おはし一國本一をはし

管絃はいづれもし給けるに、御琵琶、生笛ぞ御遊あそびには聞きへ給し。すぐれておはしけるなるべし。御手てもよく書き給て、色紙形いろしづがた、寺の額がくなど書き給き。中納言になり給し折せにや、三（三）の御子かくれ給しには、法皇（法皇）の御子とて、御服おんぎなどもし給はざりけるとかや。又うすくてやおはしけむ。院（白河）の失うせさせ給へりしにぞ、色いろこく染め給へりける。まだつかさなども聞きへ給はざりし程ほどは、常つねに法王の御車ごくるまのしりにぞ乗り給て、御幸みゆきなどにもをはしける。さやうの御つゞきを思おもほし出しけるにや、院の御忌いひの程ほど参り給てありける時、南面みなをむかへの方にひとりをはして、さめくくと泣なき給て、御手てして涙なみだふりすてつゞをはしける、ものゝはさまざまのぞきて、あはれなりしと、人の語かたり侍し。

実能まねのをとゞは、北方のせうとにをはして、朝夕あさゆふなれ遊あそびきこへ給ければ、左兵衛督さへいゑくなど申ける程ほどにや、五月五日大將殿（行七）

あやめ草くさねたくも君が問とはぬかな今日けふは心にかゝれと思おもひなど心こころやり給へるも、いとなつかしく。

一 きらめき糸ぼうしー和本、国本なし。蓬本に廻り袖ふ。

この大将殿は、ことのほかに衣紋をぞ好み給て、うへのきぬなどの、長さ短さの程など、こまかにしたゝめさせ給て、その道にすぐれ給えりける。おほかた昔は、かやうの事も知らで、指貫も長うて、烏帽子もこはく塗る事もなかりけるなべし。この頃こそ、さび烏帽子、きらめき烏帽子なども、折／＼かはりて侍めれ。白河院は、装束参る人など、をのづからひきつくるひなどしまいらせければ、さいなみ給けるとなむ聞ゝ侍し。いかにかはりたる世にかあらむ。

鳥羽院、この花園をとど、おほかたも御みめとり／＼に、姿もえもいはずをはしますうへに、こまかに沙汰させ給て、世のさがになりて、肩あて、腰あて、烏帽子とゞめ、冠とゞめなどせぬ人なし。又させでもかなふべきやうもなし。かうぶり、烏帽子のしりは雲をうがちたれば、さゝずは落ちぬべきなるべし。時にしたがへばにや、この世に見るには、袖のかゝり、袴のきはなど、つくるひたてたるはつき／＼しく、うちとけたるはかひなくなむ見ゆる。衣紋の雑色などいひて、蔵人になれりしも、この御家の人也。

三 リー和本、国本「に」。蓬本に廻り改む。

上の御せうとたちの君達、若殿上人ども、たえず参りつゝ、遊び合はれたるはさる事にて、百大夫と世にはつけて、影法師などの朝夕馴れつかうまつるが、弾物、吹物せぬはすくなくて、ほかより参らねど、うちの人／＼にて、御み遊たゆる事なく、伊賀大夫、六条大夫などいふすぐれたる人どもあり。

一 君たち一國本「君達」

哥詠^カみも、詩作^シりも、かやうの^カ人^ニども数知^カらず。越後^カの乳母^ニ、小大進^カなどいひて、名高^カき女哥詠^カみ、家^カの女房^ニにてあるに、君^カたち参^カりては、鎖連歌^カなどいふ事常^カにせらるゝに、(公教)三条内^カの大^カ臣^ニ、まだ四位少将^カなどの程^カにや、

ふきぞわづらふ賤^カのさゝやを

とし給^カたりけるに、中務^カの丞実重^カといふ者、常^カにかやうの事^ニに召^カし出^カさるゝ物^ニにて、

月は漏^カれ時雨^カはとまれと思^カまに

とつけたりければ、いとよくつけたりなど、感^カじ合^カひ給^カへりける。又^カある時^ニに、

奈良^カの宮^ニこそ思^カひこそやれ

といはれ侍^カけるに、(有七)大將殿^カ、

八重桜^カ秋^ニの紅葉^カやいかならむ

とつけさせ給^カへりけるに、越後^カ乳母^ニ、

時雨^カるゝ度^ニに色^カや重^カなる

とつけたりけるも、後^カまでほめ合^カはれ侍^カけり。かやうなる事^カ多く侍^カけり。その越

後は、「さこそはかりの人^カはつらけれ」といふ哥^カなどこそ、やさしく詠^カみて侍^カしな。かやうなる事^カ、数知^カらずこそ聞^カへ侍^カしか。

ふしゝば

(有七) 大将殿年若くをはして、何事もすぐれたる人にて、御心ばへもあてにをはして、昔はかゝる人もやおはしけむ、この世にはめづらかに、かくわざと物語などに作り出したらむやうにおはすれば、やさしくすきくしき事多くて、これかれ、袖より色くの薄様に書きたる文の、引き結びたる、なつかしきども、二三ばかりづゝ取り出して、常にたてまつりなどすれば、これかれ見給て、あるは哥詠み、色好む君だちなどに見せ合せ給て、この手はまさりたり、哥などもとりくにいひあえり。あるは見せ給はぬもあるべし。

(実能) 又兵衛督や、少将たちなど参り給へば、かたみに女の事などいひあはせつゝ、雨夜のしづかなるにも、語らひ給折もあるべし。月明き夜などは、車にて御隨身ひとりふたりばかり、何大夫などいふ人ども、かはるくかちより歩み、御車に参りかはりつゝ、古き宮ばら、あるは色好むところく、にわたり給つゝ、人く、にうちまぎれて遊び給に、琵琶、笙の笛などは、人も聞ゝ知りなむとて、琴弾き、笛吹きなどぞし給ける。

ある折は、哥詠むごたちまうで通ひける中に、本意なかりけるにや、

かねてより思ひし物をふしゝばのこるばかりなるなげきせむとは

とて、たてまつりければ、やがてふししばとつけ給て、折節には、をとづれたてまつりければ、「今宵はふしゝば、音すらむものを」などあるに、すぐさず哥詠みてたてまつりなどして、いたき物とて常に申かはす者ありけり。土御門の前のいつきのもとに、中将のごとかいひける者とかや。

北の方は近き哥詠みにをはして、いと優なる御中らひになむありけるに、あまりほかにやをはしけむと聞へしは、鳥羽院位の御時に、大将殿の、菊を掘りにやりてたてまつり給けるに、薄様に書きたる文の、結びつけて見えければ、御門御覧じつけて、「かれはなにぞ。取りて参れ」と藏人に仰せられけるに、大る殿ふと心得て、色もかはりて、うつぶし目になり給へりける程に、文かとひろげて御覧じければ、

九重にうつろひぬとも菊花もとのまがきを忘れざらなむ

とぞありける。後の御姉にをはすれば、時々参り通ひ給につけつゝ、しのびて聞へ給事などもおはしけるなるべし。昔の御門の御世にも、かやうなる御事は聞えて、猶くなど仰せられければ、あまりなりける事も侍けるやうに、これもをはしけるにや。

一 こだいしむ一 国本「こ大しん」

殿（有じ）いろこの、色好み給など、おほかた上はのたまはせず、へだてもなくて、文よども取り入れて、哥詠む女房に返しせさせなどし、上うえの乳母めのとの車にてぞ、女をんなをくりむかへなどし給。殿もこゝかしこあるき給ける、家の女房ども、男おとこのもとより得たる文よをも、その北きたの方に申あはせて、哥の返事などし給ける。

小大進など、色好みいろのの男をとこのもとより得たる哥とて、申あはせけるなど、あまた聞きへしかど、忘わすれておほえ侍らず。安察中納言とかいふ人の、おほやうなるも、哥などつかはしける返事に、「こだいしむ、小大進、

夏山のしげみが下の思草露し知らざりつ心こころかくとは
などぞ聞き侍まし。口くちとく哥などおかしく詠よみて、和泉式部いづみなどいひし物ものやうにぞ侍まし。

伊予いよのごとて侍まし、中院大將（確定）の、わかくをはせし程ほどに、物などの給て、のちに
は、山城やましろといふ人にいふと聞き給て、さきにも申侍まつる、「みとせも侍またで」と
いふ哥詠よみ給へりしぞかし。かやうに色好みいろの給へるごたち、おほくこそきこえ侍ま
しか。

二 たまへー和本、国本「たへ」。蓬本に廻り補ふ。

一 御子―国本「御子の」

月のかくるゝ山のは

このを有七とゞの、御子一をはせぬぞくちをしけれど、かへりてはあはれなる方もありて、なごり多く侍て、我もの給はせけるは、「いとしもなき子などのあらむは、いと本意なかるべし。村上の御門の末、(貞平)中務宮の孫などいふ人く見るに、させる事なき人どもこそ多く見ゆめれ。我子こなどありとも、かひなかるべし」などぞありける。

姫君ひめぎみこそをはすれ、北きたの方なたの御腹みはらにはあらで、うちに使つかひ給けるわらはの、多くの人の中に、いかなる宿世すくぜにか、うみきこへたるなど、上西門院かみさいもんゐんにぞをはすと聞え給。琴こと、琵琶びわなども、弾ひき給とも知られでをはしけるに、月あかき夜、しのでびてかきならし給けるより、あらはれ給たるとかや。また異腹ことはらに女君むすめ聞へ給は、高松たかまつの院いんに参り通かよひ給て、殿上人どのじやうにんの車くるまなどつかはして、迎むかへなどせさせ給とかやぞ聞へ給。

大将殿たいしやうでん、いづれの程ほどにか侍まけむ、年としごろ住すみ給し冷泉れいぜんひむがしの洞院どうゐんよりにや侍まけむ、七夜しちや、かちより御束帯ごそくたひにて、石清水いししみづの宮みやに参り給けるに、光清みつひらとか聞へ

し別当、御まうけ誰が房とかいふにして、御気色聞へけれども、事さらにたちやどる事なくて、「この度は参らむところざしたれば、えなむ入るまじき」とて、より給はざりけるに、七夜まより果て給ける夜、三津といふ所をひて、たてまつりける。

再拜と三所の御前ふしをがみ七夜のねがひ十ながらみて

と詠めるを、神の御言ゝたのまむとて、御ふところに納めさせ給て、返さに乗り給御馬を、鞍置きながらぞ引きて給はせける。

その御供人など、いかばかりなる御心ざしにて、かくかちの御物まうで、夜を重ねさせ給らむ、あら人神、昔の御門におはしませば、流れのとだへさせ給御事にやなど、おぼつかなくおぼえけるに、「臨終正念、往生極楽」と、しのびてとなえさせ給ける御ねぎ事にて、あはれにかなしくうけ給はりし、とぞきこへける。

おほい殿、後には大将も辞へ給て、左の大臣とてをはしましき。仁和寺に花園といふ所に、山里つくり出して通ひ給き。四十にあまりてやうせ給けむ。近くなりては、御髪おろし給ける、姿はなを昔にかはらず、きよらにて、すこし面やせてぞ見え給ける。岩倉なるひじり呼びて、烏帽子直衣にて、ゐ出で、御髪をろし給ける、いとかなしく、見たてまつる人も、涙をさへがたくなむありける。越後

の乳母、風いたみける頃、花にさして、

我はたゞ君をぞおしむ風をいたみ散りなむ花は又も咲きなむ

と詠み給けるを、乳母は常に語りつゝ、こひ申ける。

この大將殿、御門の孫にて、たゞ人になり給へる、この世にはめづらしく聞ゝ

たてまつるに、なさけ多くさへをはしける。いとありがたく聞ゝたてまつりしに、⁵

まだ盛りにて雲がくれ給にけむ、いとかなしくこそ侍れ。かの花園も、雲煙との

ほりて、あとさへ残り侍らぬと聞ゝ侍こそ、あはれに心うく侍れ。そのわたりに

まうで通ひける人、

一
かたみ一國本「かた見」

いづくをかかたみとも見む夜をこめて光消えにし山葉月

三の御子の御子には、また信証僧正とて、仁和寺にはしき。鳥羽院の御髪を¹⁰

ろさせ給し時、御戒の師におはしき。又山にも聞へ給し僧都君など、一定もなか

りしにや、院よりおほい殿にたづね申給けるとかや。御女は、大る殿の一つ腹に、

伊勢のいつきにてくだり給へりき。後には、伏見の齋宮と申ゝ、これにやをはす

らむ。

又行宗の大藏卿の女の腹に、齋院もをはするなるべし。この頃、六十などにや¹⁵

あまり給らむ。そのいつきにをはせし頃、おほい殿ゝ、本院に有栖河のものとの桜

の、盛りなりけるにをはして、哥など詠み給けるに、女房の哥とて、

散る花を君ふみわけて来ざりせば庭のをもてもなくやあらまし
とぞ聞へ侍し。

はらぐのみこ

一 後(宮)の宮、女御、更衣におはせねど、みこうみたてまつり給へるところ、近
き御代にあまた聞え給。后腹(宮)の宮たちは、みな申侍ぬ。散りぐにうちつきつゝ、
おはします、多く聞え給。白河の院の后腹(宮)の女宮、三ところのほか、承香殿(道子)の
女御のうみたてまつり給しは、伊勢のいつきにおはしき。それは女四(御子)の宮なるべ
し。女五(御子)の宮も、天仁元年霜月のころ、御占にあひ給て、齋宮と聞え給き。御腹
はいづれにかおはしけむ。ひがごとくにや侍らむ。季実とか聞えし女にやおはしけ
む。

一 みうらー和本「みうち」。国本、蓬本に規
り改む。

せか院(宮子)の齋院と申ししも、同じころ立ち給と聞えき。それは頼綱と聞えし源氏
の、三河守なりしが女の腹におはすと聞えき。七十にあまり給て、まだおはずと
聞え給。唐崎のみそぎ、上西門院(院子)せさせ給ひしころ、そのつゞきに、院の御沙汰
にて、殿上人などたてまつらせ給けり。とのもりのかみ何大夫とか名ありし人、

一にて一國本「とて」

二 たづねえ侍らぬおりくも一和本、國本なし。蓮本に拠り補ふ。

三 ね一和本「ぬ」。國本、蓮本に拠り改む。
四 に一國本なし。

五 の一和本、國本なし。蓮本に拠り補ふ。

六 とは、くろあけをき、たゞ人の五位一和本、國本なし。蓮本に拠り補ふ。
七 お一國本「を」

八 覺行法親王一和本、國本「覺法親王」。蓮本に拠り補ふ。

御うしろみにて、御車のしりに、綾の指貫、院のおろして着てわたるなど聞えき。

男みこは、この世には、多く仏の道に入り給て、御元服もかたくて、うるの御衣の色なども、たづねえ侍らぬ折くも侍るとかや。位おはしまさぬ程は、あさぎと日記に侍なるをば、「青き色か、黄なる色か」などおほつかなくて、花園（有七）のおほあとのに、たづねたてまつられけるも、幼なくておぼえ給ぬよし申給など聞えし。一宮の御元服のは、黄なるおたてまつれりけるなるべし。位はまだ得させ給はねば、黄なる衣にぞ、まことにもおはしますらむと。無位の人には、黄袍なるべければ、小野篁が、隱岐よりかへりて作りたる詩にも、「請ふ君菊を愛せば、われを見るべし。白きことは頭にあり、黄なることは衣にあり」などぞ聞え侍し。神の社の黄狩衣なども、位なきうるのきぬの心なるべし。

かやうのついでに、ある人の申されけるは、「つるばみの衣は、王の四位の色にて、ただ人の四位と、王の五位とは、くろあけを着、たゞ人の五位、あけの衣にてうるわしくあるべきお、今の人心およすげて、四位は王の衣になり、五位は四位の色を着るなるべし。檢非違使、上官などは、うるはしくて、なをあけをあらためざるべし」とぞ侍りける。

仏の道に入り給へるは、このごろうちつゞかせ給へり。仁和寺に、覺行法親王

一 御名一國本「御名」

と聞え給ひしは、白河の院の御子におはす。御髪をろさせ給て、やうくおとなにならせ給ほど、いとかひくしくおはしければ、さらに親王の宣旨かうぶり給とぞ聞えはべりし。大御室とておはしまし、は、三条の院の御子、師明の親王と聞え給し。まだちごにおはして、みこの御名得給ひければ、法師の後も、親王かはり給はず。

その宮につけたてまつり給へりしに、御弟子の宮はわらはにて、親王の御名お得給ねども、親王の宣旨かうぶり給へり。後二条殿、出家の後例なきよし侍れども、白河の院、「内親王といふこともあれば、法親王もなかなからむ」とて、はじめて法師の後、親王と聞え給しなり。かくて後ぞうちつゞき、いづこにも出家の後の親王聞え給める。

その御をとふとにて、覚法親王と聞え給しは、六条の右の大臣の御女のうみたてまつり給へりし、法性寺のおとゞの御はらからにおはす。さきに申侍りぬ。帝の御子、関白など一つ腹におはします、いとをはしがたきことなるべし。この御室は、おほきに、声きよなる人にぞおはしける。真言の道よくならひ給ひ、又手書きにもおはしけり。御堂の色紙形など書き給と聞えき。高野の大師の手書きにおはしければにや、御室たちも、うちつゞき手書きにぞおはすなる。高野へまうで給ける道にて、

さだめなきうき世の中と知りぬればいづこも旅の心ちこそすれ

と詠み給ひけるとぞ。横川の覚超僧都の、「よろづのことを夢と見るかな」とい

ふ歌思出でられて、あはれに聞え侍御歌なり。

又仁和寺に、花蔵院の宮とおはしましき。それは異御腹なるべし。御母、大

宮(後深)の右の大(前深)臣の御子に、なでしこの幸將とか聞え給し女とぞ。六条殿とか聞え給

て、後には、九条(宗通)の民部卿とおはしけるとかや。宮はいみじくたうとき人と聞え

給き。長尾の宮とも申き。

三井寺の大僧正行慶と聞え給しもおはしき。備中守政長と聞えし人の女の腹に

おはす。これも真言よくならひ給へるなるべし。この院も、この僧正にぞ、御を

こなひのことなど受けさせ給と聞えし。法性寺のおとと、御髪おろし給て、御戒

の師にし給とも聞えき。狛の僧正ともなひて、天王寺へ参り給けるに、難波お過

ぎ給とて、

ゆふぐれに難波わたりを来て見ればたゞうすゞみのあしでなりけり

となむ聞えし。ことゞころの夕べの望みよりも、難波の葦手と見えむ、げにと聞

え侍り。帰る雁のうすゞみ、ゆふぐれの葦手になりたるも、やさしく聞え侍。又

若御前法眼と聞え給ひしも、白河の院の御子にやおはしけむ。陸奥守有宗といひ

し女の腹におはすとぞ。

堀河の帝の宮たちは、山に法印など聞え給し、後には座主になりて、親王の宣旨かうぶりて、座主の宮と聞えき。伊勢守時経とて、傳の大納言のすへと聞えし女の、うみたてまつれるとぞ。仁和寺の花藏院の大僧正と申は、近江守隆宗と聞えし女の腹とぞ聞え給ひし。僧正御身の沈み給へることをおもほしける時、詠み給ける、

さみだれのひまなきころの傘には宿もあるじもくちにけるかな

とぞ聞え侍し。身を知る雨の、時にもあらぬしぐれなどや、御袖に降りそひ給けむと、いとあはれに聞え侍。

一 も一 国本「に」
 女みこは、大宮の齋院と聞え給おはしき。やがてかの宮の女房の、うみたてまつりけるとなむ。又さきの齋宮も、堀河の院の御女と聞え給。まだこのごろも、おはするなるべし。 10

二 御は、一 和和本「御はら」。国本、蓬本にぬり改む。
 鳥羽の院の宮は、女院二所の御腹のほかに、三井寺の六の宮、山の七の宮とておはしますなる。御母石清水の流れとなむ聞ゝたてまつる。俊頼の撰集に、鹿の歌など入れて侍る。光清法印とかいひける別当の女となむ。小侍従など聞ゆるは、小大進が腹にて、これはさきのはらからなるべし。白河の院の御時より、近く侍ひて、鳥羽の院には、みこあまたおはしますなるべし。またその同じ腹に、あや御前と聞えさせ給、御髪おろして、双林寺といふ所にぞおはしますなる。寺の宮 15

一 八九年一和本、国本「八月」。蓬本に廻り改む。

二 なにがしと一國本「なにがごと」なる一和本、国本「なり」。蓬本に廻り改む。

は、ひとへせうせ給ひにけり。山(山岳)のは、法印など申し、親王になり給とぞ。

又幸將(幸將)の中將家政(中將家政)と聞えし御女(御女)、待賢門(待賢門)の院におはしけるも、鳥羽(鳥羽)の院(院)の女(女)もこ、うみたてまつり給へりし。吉田(吉田)の斎宮(斎宮)と申(申)き。それもうせ給て、八九年にもやなり侍ぬらむ。尼(尼)にならせ給て、智懸(智懸)ふかく、たうとく聞えさせ給(聞えさせ給)き。その御母(御母)こそあさましくてうせ給しか。河内守(河内守)なにがしとかやいひしが、子(子)なる男(男)の、いかなることのありけるにか、失(失)ひたてまつりたる(失ひたてまつりたる)とて、親(親)も罪(罪)かぶりて、都(都)にも住(住)まざりき。

又徳大寺(徳大寺)の左(左)の大臣(大臣)の御女(御女)とて、鳥羽(鳥羽)の女院(女院)に侍(侍)ひ給けるも、女(女)みこうみ給ひて、春日(春日)の姫宮(姫宮)と聞え給。冷泉(冷泉)の姫宮(姫宮)と申(申)にや。その母(母)を春日殿(春日殿)と申(申)なるべし。

又せか院(せか院)の姫宮(姫宮)、斎院(斎院)の姫宮(姫宮)、高松(高松)の宮(宮)など聞えさせ給も、おはしますなるべし。10
鳥羽(鳥羽)の院(院)の宮(宮)たちは、男(男)女(女)、后腹(后腹)たゝのなど取り加(取り加)へたてまつりて、男官(男官)八人(八人)、女官(女官)八人(八人)ばかりおはしますなるべし。

讃岐(讃岐)の院(院)の一(一)のみこと聞え給ひしは、重仁(重仁)の親王(親王)と申けるなるべし。その御母(御母)、院(院)に具(具)したてまつりて、遠(遠)くおはしましたりける、かへりのぼり給へるとぞ聞え給ふ。帝(帝)、位(位)におはしました時(時)、后(后)の宮(宮)、一(一)の人の御女(御女)にておはしますに、内(内)の女房(女房)にて、かの御母(御母)、宮仕(宮仕)へ人(人)にて侍(侍)はせ給ひしが、ことのほかに時(時)めき給ひしは、后(后)の御方(御方)の人(人)は、めざましく思(思)ひあひて、人(人)の心(心)をのみはたらかし、世(世)の人

もまばゆきまで思へるべし。

さりとて、御うしろみのつよきにもおはせず、たゞ大蔵卿行宗とて、年七十ばかりなるが、歌詠みによりて、したしくつかうまつり馴れたるを、親などいひて、兵衛の佐などつけ申たる許なれば、さるべき方人もなし。まことの親は、男にはあらで、むらさきの袈裟などかけ賜はりて、白河の御寺のつかさなりける。それもうせて、年経にけり。しかるべき人の子なりけれど、男ならねば、かひなかるべし。常に侍ふなにも中将などいふ人の、片心あるなども、目をそばめらるゝやうにて、はしたなくなむありける。

されど、たくひなき御心ざしをさがたきことにて、すぐし給ほどもに、男君うみ出し給へれば、中宮にもまだかゝることなきに、いとめづらしく、いとゞやすからぬつまなるべし。御祖父の一院も聞かせ給て、むかへ取り給ひて、女院の御方にやしない申させ給ふ。やうく内の御乳母子の、播磨守、隠岐守などいふ人も、かの里や局などの女房など、かみしものことども、とり沙汰すべきよしうけたまはりて、つかうまつり、若宮御乳母刑部卿などいひて、大式の御乳母の男と聞ゆ。みこも親王の宣旨かうぶり給て、元服などせさせ給ぬ。

かくて年月すぐさせ給ほどもに、位去らせ給て、新院とておはしますすにも、世にたくひなくて、すぐさせ給へば、後の宮、殿、御わたりには心よからず、うとき

一 をとこ一國本」をとこに」
二 つね一國本」つれ」

一 かやう一和本、国本「かや」。蓬本に拠り補ふ。

ことにてのみおはします。本院(鳥羽)の御まゝなれば、世を心(こころ)にまかせさせ給はず内(近衛)、中宮(皇子)、殿(近衛)などに一つにて、世の中(なか)すさまじきこと多くおはしますべし。

かやうなるにつけても、わたくしものに思ほしつゝすぐさせ給に、法皇(鳥羽)かくれさせ給ぬる後、世の中にことゝも出で来て、讃岐へ遠くおはしましにしかば、やがて御局(つぼね)に具したてまつりて、かの国(くに)へ年経給き。一のみこも、御髪(みけ)おろし給て、仁(に)和(わ)寺(じ)の大僧正(だいそうじょう)寛暁(かんせう)と申につかせ給て、真言(まごん)ならはせ給けるに、さとくめでたくおはしましければ、昔(むかし)の真如親王(まごしんおう)もかくやと見えさせ給けるに、御足(みあし)の御やまひ重(おも)くならせ給て、ひとゝせ失(う)せさせ給ひにけり。御年(ごとし)、二十二三許(じふにさんごほ)にやなり給けむ。

讃岐(さぬき)にも、御歎(ごなげ)きのあまりにや、御なやみつもりて、かれにてかくれさせ給にしかば、宮の御母(みはは)ものほり給て、頭(かぶ)おろして、醍醐(たいご)の帝(みかど)の母方(はかた)の御寺(みでう)のわたりにぞ、住(す)み給なる。かの院(いん)の御(み)にほひなれば、ことほりと申ながら、歌(うた)などこそ、いと勞(ろう)ありて詠(よ)み給なれ。のほり給へりけるほどに、ある人のとぶらひ申たりければ、

君(きみ)なくてかへる波路(なみぢ)にしほれ来(こ)し袂(たもと)を人の思(おも)ひやらなむ

と侍(まじ)ける。さこそはと、いとをほしくなむをしはからればべりし。

院(いん)の御おとうとの、仁(に)和(わ)寺(じ)の宮(みや)おはしましゝほどは、とぶらはせ給と聞(き)えしに、

宮もかくれ給て、心ぐるしく思ひやりたてまつるあたりなるべし。その遠くおはしたりける人の、まだ京におはしけるに、白河に、池殿といふところを人のつくりて、御覽せよと申ければ、わたりて見られけるに、いとをかしく見えければ、書きつけられけるとなむ、

音羽川せきれぬ宿の池水も人の心は見えけるものを

とぞ聞ゝ侍し。

又讃岐の院の皇子は、それも仁和寺の宮におはしますなる。法印にならせ給へるとぞ聞えさせ給ふ。それも真言よく習はせ給て、つとめをこなはせ給なり。上西門の院、御子にし申させ給へるとぞ。の御母、師隆の大蔵卿の子に、三河の権の守と申人おはしける女の、讃岐の帝の御時、内侍のすけにて候はれしが、うみたてまつり給へるとぞ、聞えさせ給ふ。

「讃岐の法王かくれさせ給えりける御服は、いつかたてまつる」と、御室よりたづね申させ給へりければ、

うきながらその松山のかたみにはこよひぞ藤の衣をば着る

と詠ませ給りける、いとあはれにかなしく。又御をこなひ果て、休ませ給けるに、嵐はげしく、滝の音むせびあひて、いと心ほそく聞えけるに、

夜もすがら枕に落つる音聞けば心をあらふ谷川の水

と詠ませ給へりけるとぞ聞え給し。昔の風吹つたへさせ給、いとやさしく。女宮は聞えさせ給はず。

今(後白河)の一院の宮たちは、あまたおはしますとぞ。后腹(高倉)のほかには、高倉の三位と申すなる御腹に、仁和寺の宮、御室つたへておはしますなり。まだ若くおはしますに、御をこなひの方も、梵字などもよく書せ給と聞えさせ給。次に御元服せさせ給へる、おはしますなるも、御文にもたづさはらせ給ひ、御手など書せ給と聞えさせ給。その宮も、宮たちまうけ申させ給へるとぞ。

同じ三位の御腹に、女宮もあまたおはしますなるべし。伊勢のいつきにて、姉をとうとおはしますと聞えさせ給し。おとふとの宮は、六条の院の宣旨やしなひたてまつりて、かの院つたへておはしますとぞ聞えさせ給ふ。又賀茂のいつきに一もおはするなる。又女房のさぶらひ給なる、御をばえのなにかしとか聞えし。いもうとの腹にも、宮たちあまたおはしますなるべし。三井寺に、法印僧都など聞えさせ給。又女宮もおはしますとぞ。大炊御門の右の大臣の御女、姫宮うみたてまつり給へる、おはしますと聞え給ふ。又異腹の宮くも、あまたおはしますなるべし。

二条の帝の宮たちも、男宮、女宮聞えさせ給。その女宮は、内の女房うみたてまつり給へるとぞ。中原の氏の博士の女のにぞおはすなる。男宮は、源氏の右馬

一 又賀茂のいつきにもおはするなる一和本、国本なし。蓬本に廻り補ふ。

助とかいふ女の腹におはしますと聞え給。又徳大寺のおとゞの御女の腹とか聞え給は、位につかせ給へりし、さきに申はべりぬ。又かむのきみの御おとうとおはしけるが、うみたてまつり給へる、おはしますと聞えさせ給ふ。かく今の世のことを申つゞけ侍、いとかしこく、かたはらいたくも侍るべきかな。

一 むかしがたり第九一和本、国本なし。目録に擬り補ふ。

むかしがたり第九

あしたづ

二 も一國本「ん」

「今の世のことは、人にぞ問ひたてまつるべきを、よしなきこと申しつゞけ侍になむ」などいゑば、「さらばむかしがたりも、なをいかなることか聞ゝ給し。語り給へ」といふに、「をのづから聞ゝ侍しことも、ことのつゞきにこそ、思出で侍れ。かつは聞ゝ給へしことも、たしかにもおぼえ侍らず。つたえうけ給しこと、思出づるにしたがひて申侍なむ。かたちこそ人の御覽じどころなくとも、いにしゑの鏡とも、^二などかなり侍らざらむ」とて。

昔、清和の帝の御時、かたぐ多くおはしける中に、ひとりの御息所の、太上天皇かくれさせ給えりける時、御経供養して、仏の道とぶらひたてまつられけるに、御法書き給えりける色紙の色の、ゆふべの空の薄雲などのやうに、すみぞめなりければ、人くあやしく思えりけるに、昔給はり給へりける御文どもを、色

一 おほく一和本、国本「ほく」。板本に拠り補ふ。

紙にすきて、御法の料紙となされたりけるなりけり。それよりぞ、多く色紙の経は世につたはれりけるとなむ。書きとゞめられたる文なども侍らむものを。橘の氏の贈中納言と聞え給、幸将の日記にぞ、このことは書ゝれたると聞ゝはむべし。

二 も一國本「ん」

村上の御時、枇杷の大納言延光、藏人の頭にて、御おほえにおはしけるに、すこしも御けしきたがひたることもをはせで、すぎ給けるに、心よからぬ御けしきの見えければ、あやしく恐れ思ほして、こもりぬ給えりけるほどに、召しありければ、いそぎ参りておはしけるに、「年ごろは、をろかならず頼みてすぐしつるに、くちをしきことは、藤原雅材といふ学生がくしやうの、作りたる文のいとをしみあるべかりけるをば、など藏人になるべきよしをば、奏せざりけるぞ。いと頼むかひなく」と、仰せられければ、ことはり申かぎりなくて、やがて仰せくだされけるに、御倉の小舎人、家をたづねかねて、通ふところありと聞ゝつけて、そのところこゝにいたりて、藏人になりたるよし告げゝれば、その家あるじの女の男、所の雑色ざしきなりけるが、藏人にのぞみかけたる折節にて、わがなりぬるとよろこびて、禄など饗きやう応せむ料に、ゝはかにしたしきゆかりども呼びて、いとなみける間に、小舎人こしやう、¹⁵

三 雑色一和本、国本空白。蓬本、東本に拠り補ふ。

四 「雑色殿ざしきどのにをはず。秀才殿しやうたうどのゝならせ給えるなり」といひければ、あやしくなりて、家あるじ、「いかなることぞ」とたづねけるに、雑色が女の、姉か、をとう

一 女房一和本「女な」。国本、蓬本に廻り改む。

とかなる女房の、まかなひなどしけるを、この秀才しのびて通ひつゝ、局に住みわたりけるを、「かゝる人こそをはすれ」と、家の女どもいひければ、「よもそれは、藏人になるべきものにはあらじ。ひがごとならむ」といひければ、小舎人、「その人なり」といひけるに、雑色も家あるじも、はちがましくなりて、「かゝる者ゝ通ふより、かゝることは出で来るなり」とて、夜のうちに、その局の忍びづまを、追ひ出してけり。

二 たり一和本「たる」。国本に廻り改む。

そのことを、いかでか雲の上まできこしめしつけゝむ、「いとをしきことかな。さてはつかうまつらむ装ひのしかるべきも、かないがたくやあらむ」とて、内蔵寮に仰せられて、内蔵頭とゝのえて、さまざまの天の羽衣給はりてぞ、参りつかゑける。その作りたりける詩は、積奠とかに、「鶴九つの鼻に鳴く」といふ題の序を書きたりけるとぞ。詞をばおほえ侍らず。その心は、「廻り廻けらむことを蓬が島に望めば、霞のそで未だ逢はず。ひく人やあると、あさぢが山に思えば、霜の上毛いたづらに老いになり」といふ心なり。

三 ひく一和本、国本「く」。蓬本、東本に廻り改む。

又村上の帝、かの大納言に、「わがなからむ世に、忘れず思出されむずらむや」などのたまはせければ、「いかでかつゆ忘れまいらせ侍らむ」と、こたへ申されけるを、「折節には思出すとも、いかでか常には忘れざらむ」と、仰せられければ、「御服を脱ぎ侍らで、この世を送り侍らむずれば、かはらぬたもとの色に侍

五 一 国本「な」

15

一 とも一國本「とん」

らば、忘れまいらすまじきつまとは侍べき」と奏し給て、まことにその契りにたがはずおほしければ、後の帝の御時も、色ながら、事にしたがひ給えるを御覽じて、御涙もをさへず、かなしませ給けるとぞ。かの大納言、夢に先帝を見たてまつりて、作り給える詩も聞へ侍き。

夢のうちにもし夢のうちのことを知らましかば

たといこの生を送るとも早くは覚めざらまし

とぞおぼえ侍。「夢と知りせばさめざらましを」といふ哥の同じ心なるべし。

いのるしるし

二 慈恵一和本、國本空白。蓬本に拠り補ふ。

田融院の御時にや、横川の慈恵大僧正参り給えりけるに、「真言のをこなひの時、行者の本尊になることは、あるべきさまをすることにや。又まことに仏になることにてある」と問はせ給ければ、「その印を結びて、真言をとなへ侍らむに、いかでかならぬやうは侍らむ」とこたへ申給ければ、五壇の御修法に、帝あはせ給て、御覽じけるに、「阿闍梨の印結びて、定に入りたりとは見ゆれども、もとの姿にてこそはあれ」と仰せられければ、「まことに本尊になりて侍を、御さは

三 ども一國本「どん」

りも除ぞこらせ給、御功德もかさならせおはしましなば、御覽せさせ給こともおはしましなむ」と申給けるに、度なほくかさなりて、御覽じければ、大僧正不動尊のかたち、本尊と同じやうになりて、芥子けし焼やまして給たりけるに、広沢ひろさわの僧正（寛明）も、又降三世になり給たりけるが、ほどなく例人れいじんになり、又仏になりなどし給けり。いま三人は、もとのさまにて、仏にもならず。

かく御覽じて後に、大師おほし参まゐひ給へりけるに、「まことにたうときことをまがつることの、世よにありがたき」と仰おほせられて、「寛朝こそいとをしかりつれ。心のみだれつるにや、ほどなく姿すがたのもとのやうになりかへりつる」と仰おほせられければ、大師の申給けるは、「寛朝なれば、まかりなるにこそ侍れ」とぞ奏し給けるとなむ。

禅林ぜんりん寺の僧正（頼通）と聞きえ給けるが、宇治（頼通）の太政大臣おほきをとらにやおはしけむ、時の関白とらのもとに消息せうそくたてまつりて、「宝蔵のやぶれて侍、修理すうりして給はらむ」と侍ければ、家の司つかさどなにかみなどいふ、うけ給て、下家司しもけいしなどいふもの、継紙つぎがみ具ぐして、僧正（頼通）の房ぼうにまうで、殿とのより宝蔵ほうぞう修理すうりつかうまつらむとて、やぶれたるところへ、しるしになむ参まゐりたる」と申ければ、僧正（頼通）呼び寄せ給て、「いかにかく不覚ふかくにはおはするぞ。おほやけの御うしろみも、かくてはいかゞし給と申せ」と侍ければ、かへり参まゐりて、「しるしにまふで侍つれども、いつこなる宝蔵とも侍らず。」い

かに心得ぬやうには侍ぞ。おほやけの御うしろみも、いかやうにか御沙汰候らむ」など思かけず、心も得られ侍らぬ御返事なむのたまはせつる」と申ければ、「とはいかに。さはいかにすべきぞ」など仰せられければ、年老ひたる女房の、「あれは御腹のそこなはせ給へるを、御法の蔵とは侍ものを」と申ければ、「さもいはれたる事、さもあらむ」とて、まな御あはせどもとのえて、たてまつり侍ければ、「材木給て、やぶれたる宝蔵つくろひ侍ぬ」とぞ聞え給ける。このごろの人ならば、関白に申さずとも、かくして行事、僧ゐしなどいふ物に、心あはせととのえさせらるべけれども、かく申され侍けるとかや。

かの僧正(深正)、大ニ条殿(教通)のかぎりにおはしましけるに参り給て、「碁打たせ給へ」と申給ければ、いかにあさましき事など侍けれど、あながちに侍ければ、「やうぞあらむ」とて、碁盤取り寄せ、かきをこされさせ給て、打たせ給けるほどに、御腹のふくれ減らせ給て、一番がほどに例ざまにならせ給ける、いとありがたき験者にて侍けり。

経などよみ、祈り申などせさせ給はむだに、かた時のほどにめでたく侍べきに、碁打ちてやめ給けむ、たゞ人にはおはせざるべし。「なに、出でよ。かに出でよ」などいひて、打たせ給けるに、かひなくして減らせ給にければ、この碁ものくさしとて、立ち給にけりとかや。

一 そなへども一國本「そなへどん」

昔、勘解由の長官なりける宰相の、まだ下臈におはしける時、親の豊前守にて、筑紫にくだり侍ける供におはしたりけるに、その後、國にてわづらひて失せ給にけるを、その子の父のために、泰山府君の祭といふことを、法のごとくに祭のそなへどもとのへて、祈りこひたりければ、その親生きかへりて、語られ侍けるは、「閻魔の序に参りたりつるに、いひ知らぬ供をたてまつれるによりて、かへしつかはすべきさためありつると、その中に、「親の輔通をばかへしつかはして、そのかはりに、子の有國を召すべき也。そのゆへは、道のものにはあらで、たはやすくこの祭を、こなふとがあるべし」と、申さだめありつるを、ある人の申されつるは、「孝養の心ざしある上に、遠き國の道の人のしかるべきもなければ、重き罪にもあらず。有國召さるまじとなむおぼゆる」と申さるゝ人ありつるによりて、皆人、「いはれあり」とて、親子ともにゆるさりぬる」となむ侍けるとぞ。その流れの人の、才も位も高くおはせし人の語られ侍ける。

二 御時一國本「御とき」

一条院の御時とかや侍ける。六位の史を經て、かうぶり給はれるが、県召に、心高く播磨の國のつかさをのぞみけれど、異人をなされけるに、度々墨をすりて書きつけゝれども、おほかた文字の書ゝれざりければ、いかゞすべきと定められけるに、播磨の國のぞむ申文を、みな取り集めて書ゝるべき定めありて、ゑらびすてたる申文をも、大東の中より求め出で、みな書ゝれるに、かの史の大

夫相尹とかいふが名の、あざやかに書ゝれたりけるとなむ。

齊信の民部卿の宰将におはしけるとかや、その座にて見給ければ、ちるさき手して筆の先を受けて、書ゝせぬとぞ見給ける。聖天供をして祈りけるしるしなむありける。その供は、観修僧正とかのせられけるとかや。たしかにもおぼえ侍らず。かく聞ゝ侍しを、又人の申しは、一条院の御時、長徳四年八月廿五日、外記の巡にて、佐伯公行といふものこそ、播磨守にはなりたれ。かの国の書生とかにて、もとありけるものとかや、章尹といふものはなりたりとも見えずと申人もありとなむ。

二 も一 国本「ん」

からうた

一条院は、御心ばえも御能も、すぐれておはしましける上に、しかるべきにや侍けむ、上達部、殿上人、道々の博士、たけきものゝふまで、世にありがたき人のみ多く侍けるころになむをはしましける。

常は、春の風、秋月の折節につけて、花の梢をわたり、池の水にうかぶをすぐさず、もてあそばせ給けるに、御をちの中務の宮、はじめてそのむしろに参り給

一 侍従大納言一和本「侍従大納言」。国本、
蓬本に拠り改む。

二 これら一和本「これ」。国本、蓬本に拠り
補ふ。
三 つくる一和本「つくる」。国本、蓬本に拠
り改む。

けるに、ならばせ給はぬ御ありさまに、御かうぶりの額も、つむる心地せさせ給
御帯も御したうづも、いぶせくのみおほえさせ給けるに、おほみ遊はじまりて、
藤民部卿、(公任)四条大納言、(保賢)源大納言、侍従大納言などいふ人たち、「周の文王の車の
右に載せたる」などいふ詩の序、以言と聞えし博士の作り詠じ給けるにぞ、(具平)
この御かぶりも御よそひも、くつろぐやうにおほえさせ給て、をもしろくすゞし
くおほえさせ給ける。その村上の中務の宮は、文作らせ給道すぐれてをはしまし
ければ、（齊名）以言などいふ博士常に参りて、文作らせ給友になむありける。
大内記保胤とて、中にすぐれたる博士、御師にて、文はならばせ給ける。その
保胤に、二これらが文作、得たるところ、得ぬところのありさま問はせ給ければ、
こたへ申ける事こそ、唐の言の葉、知らぬことなれど、をもしろく聞え侍しか。
「いづれもくとりくにとりくにと侍を、たとへにて申侍らむ」とて、「齊名が文作るさ
まは、月の冴えたるに、なかばふりたる檜皮葺の家の、御藤所くはづれたるう
ちに、女の箏の琴弾きすましたるやうになむ侍。以言が詩は、砂子白くちらした
る庭の上に、桜の花ちりしきたるに、陵王の舞ひたるになむ似て侍。匡衡がやう
は、ものゝふのあけの革して、緋緞とかしたる着て、ゑならぬ駒の足疾きに乗り
て、逢坂の関越ゆるけしきなり」とぞ申ける。さて宮、（具平）「そこはいかゞ」と仰せ
られければ、「すでに檳榔毛に乗り侍にたり」と申侍けるとなむ。

一 いへる―和本、国本なし。蓬本、東本に
廻り補ふ。

二 難ん―和本「難人」。国本に廻り改む。

三 うれは―国本「かれは」

四 にて―国本「に」

五 より―和本なし。国本、東本に廻り補ふ。

かの齊信の藤民部卿、鷹司殿の屏風の詩、撰びたてまつり給けるに、日野>三位の詩の多く入りたりけるを、義忠といひし贈宰相の難じて、「色の糸、ことば作りて、春の風にまかせたり」といへる、糸、いふ文字、平声にあらず。ひが事なり」と申と聞、給て、民部卿の、文集の詩の「句々のうるはしきことば、色の糸を作れり」といゑるをかむがへて、たてまつられたりければ、宇治の大政大臣むつからせ給て、「いかにかゝるひが難んをば申けるぞ」とて、勘当せさせ給て、あくる年までゆるさせ給はざりければ、義忠の三位、女房につけたてまつりける、

青柳の色の糸にてむすびてしうれ葉、解けて春ぞ暮れぬる

と聞、侍し。「よれ葉ほどけで」と書けるもあり。いづれかまことに侍らむ。

昔(茶式部)の御局(つばね)の親(まご)にておはせし越後守(えちごのり)の、県召(あがためし)に淡路(あはぢ)になりて、いとからく思(おぼ)して、女房につけて奏し給ける文に、

苦学の寒夜に紅涙襟をうるをし、除目の春朝蒼天まなこにあり

と書き給えりけるを、一条の帝御覧(みま)じて、夜の御殿(ごてん)に入らせ給て、ひきかづきて臥させ給へりけるを、御堂(みどう)参らせ給て、「いかにかくは」と問はせ給ければ、女房の、為時(なるとき)がたてまつりて侍つる文を御覧(みま)じてより、御殿籠(ごてんかご)り給へるよし申ければ、「いと不便なることかな」とて、国盛(くにもり)といひしを召して、「越前になし給た

一 侍―国本なし。

る、返したてまつるよしの文書きてたてまつれ」とて、為時に越前なさせ給へりしにぞ、帝の御心ゆかせ給て、高麗人、文作りかはさせむと、おほしめしつる御けしきありけるにあはせて、越にくだりて、唐人と文作りかはされ侍ける。

去^レ国三年孤館月 帰程万里片帆風

また、

画鼓雷奔して天あめふらず 彩旗雲そびきて地風をなす

などぞ聞え侍し。

まことの道

二 侍つれば―国本「侍れば」

大内記の聖は、やむごとなき博士にて、文作る道たぐひすくなくて、世に仕えけれど、心はひとへに仏の道に深くそみて、あはれびの心のみありければ、大内記にて、記すべき事ありて、もよをされて内に参れりけるに、左衛門陣などの方にや、女の泣き立てるがありけるを、「なにごとこのあれば、かくは泣くぞ」と問はれければ、「あるじの使にて、石の帯を人に借りて、もてまかる道に、落して侍つれば、あるじに重くいましめられむずらむ。さばかりのものを失へる、あさ

一 かへる空もなければ、思やるかたもなく
て一和本、国本なし。蓬本、東本に廻り補
ふ。

二 ども一國本「どん」

三 はペリ一國本「ほんペリ」

四 は一和本、国本「はて」。蓬本、東本に廻
り改む。

五 僧買ひじり一國本「増買ひじり」

ましくかなしくて、「帰る空もなければ、思やるかたもなく、それを泣き侍なり」と申ければ、「心の中をしはかるに、まことにさぞかなしかるらむ」とて、我さしたる帯を解きて、取らせたりければ、「もとの帯にはあらねども、むなくしく失ひて、申かたなからむよりも、をのづから罪もよろしくや侍」とて、「これもてまからむずるうれしき」とて、手をすりて、取りてまかりにけり。さて片隅に、帯もなく、かくれるたりけるほどに、事はじまりければ、をそしなどもよをされて、みくらの小舎人とか帯を借りてぞ、公事はつとめられはべりける。

池亭の記として書かれたる書侍なるにも、「身は朝にありて、心は院にあり」とぞ侍なる。中務の宮の、ものならひ給けるも、文すこし教ゑたてまつりては、目を閉ちて仏を念じたてまつりてぞ、をこたらずつとめ給ける。

かくて年をわたりけるほどに、年たけてぞ、頭をろして、横川にのほりて、法門ならひ給けるに、僧買聖、まだ横川に住み給けるほどにて、「止観の明静なること、前代にいまだ聞かず」とよみ給けるに、この入道たゞ泣きに泣きければ、聖、「かくやは、いつしか泣くべき」とて、こぶしを握りて、打ち給ければ、我も人も、事にがり、立ちにけり。

またほどへだて、一「さてもやは侍べき。かの書うけたてまつり侍らむ」と申ければ、又さきのごとくに泣きければ、又はしたなくさいなみければ、後の言葉

一 い、と一和本「いと」。国本に拠り改む。

もゑ聞かて過ぐるほどに、又こりずまに、御けしきとりければ、又さらによみ給にも、同じやうにいゝと泣きをりければこそ、聖も涙こぼして、「まことに深く御法のたうとおぼゆるにこそ」とて、あはれがりて、その書しづかにさづけ給けれ。

さてやむごとなく侍ければ、御堂の入道殿も、御戒など受けさせ給て、聖まかりにける時は、御諷誦せさせ給て、さらし布百むら賜ひける。請文は、三河の聖(定基)たてまつりて、秀句など書きとゞめ給なり。

昔隋の楊帝の智者に報ぜし、千僧ひとつをあまし、

今左丞相の寂公をとぶらう、さらし布百千に満り

とぞ書れ侍ける。

その三河の聖も、博士にをはして、大江の氏の上達部の子にをはしけるが、三河守になりて、国えくだり給へりけるに、たぐひなくおほえける女を、具してをはしけるに、女みまかりにければ、かなしみのあまりに、取りすつる事もせで、なりまかりけるさまを見て、心をこして、やがて頭をろして、都にのぼりて、物など乞ひありきけるに、もとの妻にてありける女、「われをすてたりし報ひに、かくれとこそは思しに、かくみなしたる事」など申ければ、「御徳に仏になりなむ事」とて、手をすりてよろこび給けるとぞ、伝へ語り侍。

二 こひありき一和本こひあり」。国本、蓬本、東本に拠り改む。

一 の一和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。
 さて内記(保地)の聖(ひじり)を師にはし給て、東山(ひがしやま)の如音(にょおん)りむ寺(げ)にをはし、横川(よこがわ)にのぼりても、源信僧都(げんしんそうどう)などに深(ふか)き御法(みりやう)の心(こころ)汲(くみ)みつし給て、惟仲(ただなか)の平中納言(へいなかのうりごと)の、北白河(きたしろがわ)にて六

二 衆ども一國本「衆どん」
 十卷(じゆく)講(かう)じ給けるには、覚運僧都(かくうんそうどう)の、まだ内供(うちまがらひ)にをはしける時、講師(こうし)せさせ給へり。この三河(さんか)の入道(にやうだう)は、複師(ふくし)とかにてこそは、法花經(ほふけい)の心(こころ)ときあらはせる書(よみ)も、点(てん)じしたゝめて、そこばくの衆(しゆ)どももみなみて、をのゝ読(よみ)みしたゝめられ侍(まじ)けれ。か

くて後(のち)にぞ、山(やま)、三井寺(さんせいじ)の僧(そう)たちも、やすらかに読(よみ)み伝(つた)へ給なる。

三 事ども一國本「事どん」
 遂(つひ)に唐国(からく)にをはしても、いひ知らぬ事(こと)どもをはしければ、大師(おほし)の御名(おんな)得(え)給て、円通大師(えんつうおほし)とこそは聞(き)え給めれ。かくれ給けるに、仏迎(ぶつむかひ)へ給(あ)給の音(ね)聞(き)えければ、それ(それ)に詩(うた)作り、哥(か)詠(よ)みなどし給たる、もろこしより申(まを)送り侍(まじ)なる、

笙哥(せいか)はるかに聞(き)ゆ孤雲(こくうん)の上(うへ)、聖衆(せいしゆ)来迎(らいがう)す落日(らくじつ)の前(まえ)

とか作り給(つく)えりける。哥(か)は、

雲(うん)の上(うへ)にはるかに楽(がく)の音(ね)すなり人や聞(き)くらむひが耳(みみ)かもし

と詠(よ)み給(たま)へるとぞ聞(き)へ侍(まじ)し。

又少納言(またせうなごん)統理(とうり)と聞(き)えし人(ひと)、年(とし)ごろも世(よ)をそむく心(こころ)やありけむ。月のくまなく侍(まじ)けるに、心をすまして、山深(やまふか)くたづね入(い)らむ心(こころ)ざしの、せつにもよをしければ、まづ家(いへ)に、「泔(ゆまう)まうけよ。出(い)でむ」といひて、頭洗(かぶらあらい)ひ、けづりほしなどしけるを、妻(めづめ)なりける女(をんな)も心得(こころえ)て、さめくと泣(な)きをりけれど、かたみとていふ事はなくて、

一 ども一 国本「どん」

二 をさめ一 国本「おさめ」

あくる日、うるはしきよそひして、一の人の御もとにまうで、山里にまかりこもるべきいとま申けれども、人も申つがざりけるを、強る申ければ、聞ゝ給て、「少納言こなたへ」とて、出であひ給ひて、御数珠給て、「後の世は頼むぞ」など侍ければ、数珠をば納めて、拝したてまつりて、増賀聖の室にいたりて、頭をろしたりけれど、つとめをこなう事もなくて、もの思たる姿なりければ、聖さる心にて、はしたなく侍ければ、「子生み侍べき月にあたりたる女の侍ことの、思すて侍れど、いぶせく思給へて」などいふを、聖、都に急ぎ出で、その家にはしたりければ、ゑ生みやらでなやみけるを、聖、祈り給て、生ませなどして、人にまめなるものなど乞ひ給て、車に積みて、産養までし給けり。

その統理、三条の院より歌の御返し賜はれりける、

忘れず思出でつゝ山人をしかぞ恋しく我もながむる

と侍けるに、涙のごひ侍ければ、「東宮より哥給はりたらむは、仏にやはなるべき」と、聖、恥ぢしめ給けるとかや、たてまつりたる哥も、あはれに聞へ侍き。

君に人馴れなならひそ奥山に入りての後はわびしかりけり

三 て一 和本なし。国本、蓬本に廻り補ふ。

とぞ詠みてたてまつりける。

公経と聞えし手書き、梟召に、ことよろしき国のつかさになりたらば、寺なども造らむと思しを、河内といふあやしき国ゝなりたれば、かひなし、古寺などを

一 ども一國本「どん」
 二 あやしみ思一和本「あやしみて思」國本、
 蓬本に廻り改む。

三 は一國本なし。

四 みづから一國本「身づから」

こそは修理せめと思て、見ありきけるに、ある古寺の仏の座の下に、文の見えけるをひらきて見ければ、「沙門公経」と書きたる文に、「来む世に、この國のつかさになりて、この寺修理せむ」といふ願立てたる文見てぞ、「しかるべき契りなりけり」といひける。書きたる文字のさまなども、似たる手になむありける。伏見の修理の大夫のやうに、同じ昔の名をつげるなるべし。

大外記定俊といひしが、越中守になりて侍けるに、國のものは思さまに得けれども、國の人のなひがしろに思へるをあやしみ思て、寝たりける夜の夢に、昔の國の目くらき聖の、持経者にてありけるが、生れてかくはなりたるぞ。人のあなづらはしく思へるは、昔のなごりなるべし。その聖、前の世には、かの國の牛なりける時、法花経一部を負ひて、山寺にのぼりたりしゆえに、持経者になれりしが、この度は、國の守になりて、色の黒きも、そのなごりなりとぞ見たりける。昔のなごりにや、末には法師になりて、江文のかたに籠りゐて、をこなひけるとぞ聞へ侍し。

その子にて、信俊と聞えしも、身は世に仕ゑながら、仏の道のをみいとなみて、老の後には、頭をろしなどして、限りの時にぞみては、みづから「肥後の入道往生したり」といひあはむずらむ」など申して、たふとくて失せけるに、かうばしき匂ひありけりなど聞え侍き。

かしこき道々

常陸守実宗と聞へし人、くすしにたづぬべき事ありて、雅忠がもとに行けりけるに、しばしとて、障子のほかに据ゑたりけるに、まらうど饗成しけるあひだに、門より入り来るやまい人を、かねて顔けしきを見て、「これはそのやまいを問ひに来るものなり」といひて、たづぬれば、まことにしかありけり。

その中に、見苦しき事もあり、をかしき事もありて、ゑいひやらねば、みな、「心得たり」などいひて、つくろふべきやうなどいひつゝ、あへしらひやりけるに、まらうどは、有行なりけり。家あるじ、さかづきとりたるを、「とくその御酒召せ。たゞいまゆゝしき地震の振らむずれば、うちこぼし給てむず」といふに、さしもやはとや思けむ、急がぬほどに、地震をびたゝしく振りて、はたとひとしき酒をうちこぼしてけり。あさましき事を聞たりしとぞ語りける。

中ごろ、笙の笛の師にて、市佑時光と聞えし、いづれの時にか、内より召しけるに、同じやうに老いたるものと、二人碁打ちて、哥うたふやうによりあはせておほかた聞ゝも入れず、御返りも申さゞりければ、御使あざけりて、かへり参り

一 て、つくろふべきやうなどいひ—和本
 因本なし。蓬本、東本に廻り補ふ。

一 ける「和本」る。国本、蓬本、東本に拠り補ふ。

二 もちみつ「国本」「もろみつ」

三 もちみつ「国本」「もろみつ」
きび「和本」「きびく」。国本「きく」。東

四 本「きひ」に拠り改む。
五 かりぎぬ「和本、国本」から。蓬本の「かり」の本文及び、「きぬ也」の傍書に拠る。

六 しらなみども「国本」「しらなみどん」

て、「かくなむ侍」とうれへ申ければ、いましめはなくて、おほせられけるは、「いとあはれなる事かな、唱歌しすまして、よろづ忘れたるにこそあむなれ。帝の位こそくちをしけれ。さるめでたきことを、行きてもえ聞かぬ」とそのたまはせける。用光といひしひちりきの師と、二人裏頭衆を唱歌にしけるとぞ、後に聞る。

その用光が、相撲の使に、西の国めぐだりけるに、吉備の国のほどにて、沖つ白浪立ち来て、こゝにて、いのちも絶へぬべく見えければ、狩衣、かぶりなど、うるはしくして、屋形の上に出で、をりけるに、白浪の舟漕ぎ寄せければ、その時、用光ひちりき取り出して、うらみたる声に、ゑならず吹きすましたりければ、白浪ども、をのゝかなしみの心をこりて、かづけものどもをさへして、漕ぎはなれて去りにけりとなむ。さほどのことはりもなきものゝふさゑ、なさけかくばかり吹き、かせけむもありがたく。又昔の白浪は、なをかゝるなさけなむありける。

いとやさしく聞え侍し事は、いづれの御時にか侍けむ。中ごろの後、上東門、陽明門などにやをはしましけむ、近き世の帝の御時、めづらしく内に入らせ給へりける時、月のあかく侍ける夜、「昔は、かやうに侍夜は、殿上人あそびなどこそ、内わたりはし侍しか。さやうなる事も侍らぬこそ、くちをしく」など申させ

— ものども— 国本「ものども」

給ければ、いとほづかしくをもほしめしけるほどに、月夜のめでたきに、「りむくとして氷しき」といふ哥を、いとほやかなる声して、うたひけるが、なべてならず聞えけるに、又いといたくしみたる声のたうときにて、無量義經の「微滞まづをちて」などいふ所を、うち出でよまれ侍けるが、いづれもく、とりぐにめでたく聞えければ、「昔もかばかりの事こそ、え聞侍ざりしか。いと優なるものどもこそ侍けれ」と申させ給けるにこそ、御汗もかはかせ給て、御心もひろごろせ給にけれと聞えし、後冷泉院の御時、上東門院などの、入らせ給えりけるにや。又その人くは、伊家の弁、敦家の中將などにやをはしけむとぞ、人は申侍し。ひが事にや。

又能因法師、月のあかく侍ける夜、板井にむかひて、廂の葺板、所く取りのけさせて、月宿して見侍けるに、門たたく音し侍ければ、女声にて、問ひ侍けるに、「内より勅使のわたらせ給えるなり」と、馬部といふものゝ申ければ、門ひらきて、いづみのもとに御使の蔵人入れ侍けるに、「仰せ事になむ。月の哥のすぐれたるは、いづれかある」と仰せ侍れば、にはかに馬寮の御馬召して、急ぎ対面するよしなど、誰にかありけむ、その時の蔵人の申侍ければ、

月夜ゝし夜ゝしと人に告げやらば来てふに似たり待たずしもあらず

といふ哥をなむ申ける。同じ御時のことにや侍けむ、たしかにもえ聞侍らざり

一 ども一 国本「どん」
二 ども「国本」どん

き。老いたる法師のつたへ語り侍しを、よそにてつたへ聞ゝ侍しかば、おほつかなく侍。いづれの歌をぞ申べけれどもなど、語り侍しかども、忘れて、たしかにもおぼえ侍らず。

一 うちぎ、第十一和本、国本なし。目錄に
掲り補ふ。

うちぎゝ 第十

しきしまのうちぎゝ

二 ゆきて、かのともし火のかきおとしたり
しものを見せてと一和本、国本なし。蓬本
に掲り補ふ。

中ごろ男ありけり。女思ひて、時々通ひけるに、男あるところにて、ともし
火のほのをの上に、かの女の見えければ、「これは忌むなるものを。火の燃ゆる
ところをかきをととしてこそ、この人に飲ますなれ」とて、紙につゝみて持たりけ
るほどに、事しげくて、まぎるゝ事ありければ、忘れて、一日二日過ぎて、思出
でけるまゝに、行けりければ、「なやみてほどなく女かくれぬ」といひければ、
いつしか行きて、かのともし火のかきおとしたりしものを見せてと、我あやまち
にかなしくおぼえて、常なき鬼一口に食はれにけむ心憂き、足ずりもしつべく
歎き泣きけるほどに、「御覽せさせよとにや、この御文を見つければ」とて、
取り出したるを見れば、

鳥部山谷、煙の燃えたらばはかなく消えし我と知らなむ

一
と一和本なし。国本、蓬本に振り袖ふ。
とぞ書きたりける。歌さへ、ともし火の煙とおぼえて、いとかなしく思ひける、

ことはりになむ。

また女有けり。時く通ひける男の、いつしか絶へにければ、心憂くて、心の中に思ひなやみければ、よその見る人も苦しく思けるに、その人、門を過ぐる事ありけるを、家の人、「いまこそ過ぎさせ給へ」といひければ、思ひあまりて、「きと立ちながら入らせ給へ」と追ひつきて、いはせければ、やりかへして入りたるに、もと見しよりもなつかしきさまにて、ことのほかに見えければ、くやしくなりて、とかくいひけれど、女たゞ経をのみよみて、返事もせざりける程に、七の巻の「即往安楽世界」といふ所を、くりかへしよむと見けるほどに、やがてたゞたえ入にたえ入りて、失せにければ、われも寄りて押へ、人呼びて、とかくしけれども、やがて失せにけり。

かくて籠りもし、又頭をろしてむと思ひけれども、当時弁なりける人なれば、さすがえ籠らで、土に降りて、とかくの事泣くく沙汰して、しばしは山里にかくれをりければ、世をそむきぬるなど聞えけれど、さすがかくれもはてゞ、出で仕えければ、かえるの弁とぞいひける。

左衛門尉頼実といふ藏人、哥の道すぐれても、又好みにも好みけるに、七条なる所にて、人く「ゆふべにほとゝぎすを聞く」といふ題を詠み侍りけるに、醉

一 ヤー和本なし。国本、蓬本に廻り補ふ。

ひて、その家の車宿りに立てたる車に、歌案ぜむとて、寝すぐしけるを、もとめけれど、思ひも寄らで、すでに講ぜむとて、人みな書きたる後にて、このわたりは稲荷の明神こそとて、念じければ、きとおほえけるを、書きて侍りける、

稲荷山越えてや来つるほととぎすゆふかけてしも声の間ゆる

同じ人の一人に知らるばかりの歌詠ませさせ給え。五年がいのちにかえむ」と、
住吉に申たりければ、「落葉雨のごとし」といふ題に、

木の葉散る宿は聞ゝわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

と詠みて侍りけるを、かならずこれとも思ひよらざりけるにや、やまひつきて、生かむと祈りなどしければ、家に侍りける女に住吉つき給て、「さる歌詠ませしは。さればえ生くまじ」とのたまひけるにぞ、ひとへに後の世の祈りになりけるとなむ。

また同じゆかりに、三河守頼綱といひしが、いまだ若くて、親の供に、美濃、国々くだりけるに、かの国の女をよばひて、またもをとづれざりければ、女、あさましや見しは夢かと問ふ程にをどろかずにもなりにけるかな

と申たりければ、さらにおぼえつきてなむ思ひ侍りける。かく詠むとも、みめかたちやはかはるべきとおぼえ侍れど、昔の人、中ごろなどまでは、人の心かくぞ侍りける。この事は、その人の子の仲正といひしが、語りはべりけるとなむ。

一 どの、一和本、国本に。蓬本に拠り改む。

三河守頼綱は、歌の道にとりて、人もゆるせりけり。我身にも、ことのほかに思ひあがりたるけしきなりけり。俊頼といふ人の、小将なりける時、頼綱いひけるは、「小将殿、歌詠まむとおぼしめさば、頼綱を供せさせ給え。別のものもまかりいるまじ。洗ひたる仏供、二土器供へさせ給べき」などぞいひける。その歌多く侍らめども、

夏山の櫓の葉そよぐ夕暮は今年も秋の心地こそすれ

といふ歌ぞ、人の口に待める。

近き世に、女ありけるを、八幡なるところに、宮寺のつかさなる僧都と聞えしは、少侍従とかいふが親にやあらむ。その房にこめすゑて、ほど経けるほどに、宮こよりしかるべき人、「女をわたさむ」といひければ、「かゝることのあるに、人の聞かむところも、はゞからはしければ、しばし都えかへりて、迎へむ折来」とて、したてゝ出しけるが、あまりこちたく贈り物などし、具しければ、いまはかくて止みぬべきわざなむめりと思ひけるにつけても、いと心細くて、硯瓶の下に歌を書きて置けりけるを、取り出で、見ければ、

行くかたも知らぬうき木の身なりとも世にしめぐらばながれあえかめ

と詠めりけるに、これを見て、女なりける人は、院の宮くなど生みたてまつりたりけるが、まだ若くをはしけるに、「京へ送りつる人、この歌を詠み置きたる、

— はした物、さうしなどいふもの、数あまたしたて、一和本、国本なし。蓬本に廻り補ふ。「したて、」の部分蓬本「したて」につき、板本に廻り改む。

返しをやし侍るべき。また迎へや返すべき」と申あはせければ、「返しは世の常の事に侍。迎え給えらむこそ、歌の本意も侍らめ」と聞えければ、心にやかなひけむ、その日のうちに、迎えにさらにやりて、「今日、かならず返らせ給え」とて、あけゆく程に、かへり来にけり。またそのしかるべき人の女をも、いひ知らず居所などしつらひ、はした物、雑仕などいふもの、数あまたしたて、据えたりけれど、一夜ばかりにて、硯瓶の人にのみ離れざりける。

その女は、大臣家に宮仕え人なりけるが、母の筑紫にくだりて、菅原の氏寺の別当に具してくだりけるが、かの法師みまかりにければ、都えのほるべきよすがもなくてをりけるを、その女は、朝夕にこれを敷きける程に、大臣殿、五節たてまつり給けるにや、童に出すべき女、ほかのをかたく見給けれど、こればかりなる見えざりければ、「思やうありていふぞ。いはむ事聞てむや」とありければ、「いかでか、仰せ事に従はでは侍らむ」と申けるに、「五節の童に出さむと思」との給はせければ、「いかなること、うけ給はり侍べきに、それはえなむ侍まじき」と申ければ、「あながちに思ことにてあるに、かまえて聞たらば、

いかなる大事をもかなえむ」とありければ、かくまでのたまはせむ事、さのみもえいなみ申さで、出でたりけるに、かの大臣殿、童、いかばかりならむとて、殿上人、我もくとゆかしがりあえりけるに、中にさかりにものなどいひわたりけ

一 なに少将一 国本「なに小将」

る、なに少将などいひける人も、見むなどしけるを、ある殿上人、「めづらしげなし。いつも御覧せよ」などいひければ、あやしと思ひて見るに、我えさらずものいふ人なりければ、うらみ恥ぢしめけれど、さほど思ひ立ちて出でにける。

後に大臣殿、「このよろこびに、いかなる大事かある」と問ひ給ければ、「熊野に年ごろまうでむと思こゝろざしぞ深く侍」と申すに、やすき事とて、夫さはなどあまた召して、きよき衣、なにかと出し立てさせ給て、まいりて、筑紫の母迎え寄せむ事を、こゝろざし申て返るに、淀のわたりにや、御幸などのよそひのやうに、道もさりあえぬ事のありけるが、政所の京に出で給といひて、よそには、

二 をもは一 和本「をほ」。国本、蓬本に廻り補ふ。

ものとも思はぬ事の、いひしらず見えけるほどに、むし垂れたるはさまよりや見えけむ、京より御文とてあるを見れば、大臣殿、御使にはあらで、思かけぬすぢの文也。

ありつる石清水の僧の舟の人など、見知りたる供人いひければ、聞、も入れぬほどに、かたかく思かけずいはせければ、いなびも果てなくだりて、かの筑紫の母迎へ取りて、都にし据多などしたりけるとなむ聞えしは、小大進と聞えし人のことにやあらむ。

陸奥の守ためなりと申、が、国、まかりくだりて、五月の四日、館に丁官とかいふもの、年老いたる出で来て、あやめ葺かするを見れば、例の葛蒲にはあらぬ

一 うた一 国本「うたぞ」

二 もの見一 国本「ものみ」

草を葺きけるを見て、「今日は、あやめこそ葺く日にてあるに、これはいかなるものを葺くぞ」と問はせければ、「つたへうけ給はるは、この国には、昔五月とて、あやめ葺く事も知り侍らざりけるに、この中将さねかたなり、中将の御館の御時、「今日はあやめ葺くものを、いかにさる事もなきにか」とのたまはせければ、「国の例、さることも侍らず」と申けるを、「さみだれのころなど、軒のしづくも、あやめよりこそ、いますこし見るにも聞くにも、心澄むことなれ。はや葺くべきなり」と侍りけれど、「この国には生ひ侍らぬなり」と申ければ、「さりとても、いかでかかひなくてはあらむ。安積の沼の花がつみといふものあり。それを葺け」との給はせけるより、こもと申すものをなむ葺き侍」とぞ、武蔵の入道隆頼と申すは、語り侍りける。もししかあらば、「引く手もたゆく長き根」といふ歌、おぼつかなく侍。

実方まねかたの中将の御墓みかたは、陸奥むつにぞ侍なると、つたへ聞ゝはべし、ま事にや。蔵人の頭とうにもなり給はで、陸奥むつの守まもりにぞなりて、かくれ給ひにしかば、この世まで、殿上とのうのつぎめの大おほばむ据すゑたるをば、雀すずめの、ぼりて、食くらふ折せりなど侍なる。実方まねかたの中将ちゆうじやうの、頭とうになり給はぬ思おもひのこりてをはすなると申すも、まことに侍らば、あはれにはづかしくも、末すえの世よの人は侍る事ことかな。

いづれの年としにか侍まけむ。右近みぎぢかの馬場ばばのひをりの日にやありけむ、女車むすむらこ、物見ものみに

やりもてゆきけるに、重通の大納言、宰相の中將にをはしけるほどにや、車やりつゞけて、見知りたる車なれば、便よきところに立てさせなむどして、後に我隨身を女車にやりて、

一 さし山一和本、国本「ま山」。板本に廻り改む。

たれくぞたれぞさ山のほとゝぎす

とかや聞えければ、女房の車より、

うはの空にはいかゞなのらむ

とぞ、いひかはしける。

いとすぐれて聞ゆることもなく、かなはずもやあらむ。されども、事がらのやさしく聞えし也。時のほどに思えむ事かたく、さてやまむよりも、かやうにいひたるも、さる事と聞ゆ。又連歌の五文字も、げにとも聞えねども、さやうに問ふべき事に侍りけるなるべし。またゝしかにも、えつたへうけ給はらざりき。ひをりの日といふ事は、おぼつかなき事に侍とかや。兼方は、真手番の日と申けるとかや。医房の中納言の江次第とかにも、この事は見え侍とぞ聞え侍し。

またいづれの年にか、馬弓の的かくる事を、舍人のあらそひて、日暮れ、夜ふくるまで侍りければ、物見車も、をひくゝに返りけるに、かく書きつけて、大將の隨身に取らせたりけるとかや、

梓弓ためらふほどに月かげのいるをのみ見て返りぬるかな

ひが事にや侍りけむ。出雲にて失せ給にし大将殿(兼長)、つき給えりける年とかや。
堀河の帝の内侍にて、周防といひし人の、家をはなちて、ほかに渡るとて、柱
に書きついたりける、

住みわびて我さへ軒のしのお草しのぶかたぐしげき宿かな

と書きたる、その家はのこりて、その歌も侍る也。見たる人の語り侍りし、いと
あはれにゆかしく。その家は、かみわたりにや、いづことかや、冷泉院堀河の西
と、北との隅なるところとぞ、人は申ゝ。をはしまして、御覧すべき事ぞかし。

まだ失せぬ折に。

また堀河の帝失せさせ給て、今の帝の、内侍にわたるべきよし侍りけるに、

天の川同じ流れといひながら渡らむことはなをぞかなしき

とぞ詠まれて侍りける。いとなさけ多くこそ聞え侍りしか。

近くをはせし横川の座主の房に、琳賢といひて、心たくみにて、石立て、飾り
車の風流などするもの侍りき。訴え申す事ありて、蔵人の頭にて、雅兼の中納言
をはしける時、かの家にいたりて侍りけるに、「大原の滝の歌こそ、いとをかしく
聞えしか」と侍りけるに、「うれへ申す事は、いかでも侍りなむ。この仰せこ
そ、身にしてみてうれしく侍れ」とてなむ、限りなくよろこびて出でにける。その
歌は、花園(有仁)、おとどの、大原の房の滝見に入り給えりけるに、

— いはしみず— 国本「いはしみづ」

今よりはかけてをろかに石清水御覧をへつる滝の白糸

と詠めりけるとぞ。たはぶれごとのやうなれど、ことさまのをかしく聞えしかば、申侍るになむ。

摂津守のりなりといひし人の、いづれの山里にか、夕暮に庭にをりて、とゆきかくゆきしありきて、

あはれなるかなあはれなるかな

と度くながめければ、かふや帯刀節信といひしが、

曰くるればところくの鐘の声

とつきたりければ、「あなふわい」となむいひける。そのかうやは、井手の蛙をとりて、飼ひけるほどに、その蛙みまかりにければ、干してもたりけるとかや。

いづれの大臣家にかありけむ、男のしのびて、局町に入りをりければ、前渡りする人ありて、かたわらの局に立ちとまりて、「まゆみく」としのびに呼び

けれど、いらへざりければ、うちにも、「おどろかすを」と、ほのかに聞えけり。

呼びかねて、過ぎさまに、

いたくねいるはまゆみなりけり

と口ずさみければ、うちに、

やといひて引けどさらにぞおどろかぬ

一 にくかり和本「にくかり」。国本に擬り改む。

とひとりごちけるこそ、いとやさしく聞えけれ。たれとも知らでやみにき。「はなやかにいひかはす音はなくて、心にくかりし人かな」とぞ語りける。聞ける男は、もりいゑといひし人とかや。

いづれのいつきの宮とか。人の参りて、今様、たひなどせられけるに、末つ方に、四句の神と歌うたうとて、

植木をせしやうは うぐひす住ませむともあらず

とうたはれければ、心とき人など聞て、はゞかりある事などや出で来むと思ひけるほどに、

つくく 髪長並め据ゑて 染紙せさせむとなりけり

とぞうたはれたりける。いとその人歌詠みなども聞えざりけれども、得つる道になりぬれば、かくぞ侍りける。その事、刑部卿とか人の語られ侍りしに、侍従の大納言と申す人も侍りし。さらばいと事はりなるべし。

二 しー和本なし。国本に擬り補ふ。
 三 似一國本「に」
 菩提樹院といふ山寺に、ある僧房の池の蓮に、鳥の子を生みたりけるをとりて、籠に入れて飼ひけるほどに、うぐひすの籠より入りて、ものくゝめなどしければ、うぐひすの子なりけりと知りけれど、子はおほきにて、親にも似ざりければ、あやしく思ひけるほどに、子のやうくおとなしくなりて、ほとゝぎすなりければ、昔よりいひつたへたるふるき事、ま事なりと思ひて、ある人の詠みける、

親おやの親おやぞ今いまはゆかしきほととぎすはやうぐひすのこはこなりけり
と詠よめりける。

万葉集の長歌ながうたの中に、「うぐひすのかひこの中のほととぎす」などいひて、この事侍なるを、いと興おきある事にも侍はべるかな。藏人実兼ざんねと聞きへし人の、匡房まきむらの中納言ちゆうなごんの物語書ものがたりかける書かに、中ごろの人、この事見あらはしたる事など、書かきて侍とこや。かやうにこそ、つたへ聞きく事にて侍を、間近まぢかくかゝる事侍らむこそ、いとやさしく侍れ。

右京の権かみの大夫ちゆうぶ頼政よりまさといひて、哥詠かまるなる人の、さる事ありと聞きて、わざとたづね来て、その鳥とりの籠こに結むすびつけられ侍りける歌、

うぐひすの子こになりにけるほととぎすいづれの音ねにか鳴なかむとすらむ
とぞありける。万葉集には、「父ちちに似にても、母ははに似にても鳴なかず」と侍るなれば、
うぐひすとは鳴なかずやありけむなど、いとやさしく申まめりしか。

ならのみよ

— 中の人—和わ本ほん「人の中」。国本、蓬本に拠り改む。

「この中ちゆうの人のおほづかなき事、ついで申まさむ」とて、「万葉集は、いづれ

の時作られ侍りけるぞ」と問ひしかば、「古今に、
神無月しぐれ降り置けるならの葉の名にをふ宮のふる事ぞこは

一 かきのもと「和本」かきもと。国本、蓬
本に飜り補ふ。

という哥侍り」といひしに、「古今の序に、「かの御時、おほきみつの位、柿本
人丸なむ、哥の聖なりける」とあるに、かの人丸は、かの御時より昔の哥詠みと
見ゆるを、万葉集作れる時より、古今えらばれたる時まで、「年はもゝとせあま
り、世は十つぎ」とあれば、十つぎといはゞ、大同の御代と聞ゆるに、もゝとせ
あまりといふは、さきの事と聞ゆる上に、人丸はあがりたる世の人と見えれば、
えなむあるまじき。いかゞ」と問へば、

- 二 元明天皇「国本」「元明天王」
「ま事におぼつかなき事を、かくこまかにたづねさせ給える、いと心にくゝ」とて、「奈良の御門と申さむ事、大同の御代のみにもあらずや侍らむ。元明天皇、奈良の宮に、和銅三年の春のころ、はじめうつらせ給ける時、長屋の原に、御興とゞめて、藤原のふるさとをかへり見給て、
- 三 見「国本」「み」
飛ぶ鳥のあすかの里をゝきていなば君があたりは見えずかもあらむ

と詠ませ給えり。はしの目録にも、寧楽の御歌とて、書きつらねて侍るめる。寧
楽はならといふ名ゝるべし。かくて後七八代は、奈良の宮にをはしましける。
その御世どもにも侍らむ。また、「奈良の御門と申す御名は、三代をはします」と申す人もをはしけりとぞ聞え侍りし。柏原の御門（桓武）の御時、長岡の京にわたり給

一 給ひ一和本、国本「給は」。蓮本の「給」を「給ひ」と見て改む。
二 の一和本なし。国本、蓮本に拠り補ふ。

三 の一國「の」

四 の一國「の」

て、十年ばかりありて、このたひらの京にはうつらせ給て、そのみこの大同の御門も、この京の後なれども、平城とは、をり給ひて後、別の御名ゝるべし。

万葉集に、人丸が哥どもの入りたりし、聞ゝ侍りしにも、「柿本人丸が集に出たり」などいひて、その世の人とは聞えずなむ侍るうちに、奈良の京のさきより、人丸が哥は多く見え侍るめり。浄見原の御門の、吉野ゝ宮に御幸し給にも、詠める哥侍るめり。また軽の皇太子の、安騎野にやどり給時の哥とても侍り。文武の御事なるべし。また人丸が讃とて、いづれの博士とか作られたるには、「持統、文武の聖朝につかへ、新田、高市の皇子にあへり」となむ侍なる。かくて奈良の御世までもありて、聖武の御時などにも、あひたてまつれりけるにやあらむと、申人もあるべし。

まことに奈良の都の時にはありけむと、おぼえ侍ことは、そのかみ人丸が集、ところぐ聞ゝ侍しに、天平勝宝五年の春三月、左大臣橘の卿の家に、諸卿大夫たち宴し給けるに、主の大臣、問ひてのたまはく、古哥に、

あさもよひきの関守がたづか弓ゆるす時なくあが思へる君

といふ哥のはじめ、いかゞと侍ければ、式部石川の卿の、こたへ給へる事など侍は、高野姫の帝の御時にこそ侍なれ。そのほどまで年たけて侍とも、大同の御時までは、いかゞはさのみも侍らむ」といふに、

一 は「国本なし」。

二 ひがごと「和本、国本」がごと。板本に
廻り補ふ。

三 たり「和本」あり。国本、蓬本に廻り改
む。

四 の「和本なし。国本、蓬本に廻り補ふ」。

五 の「和本なし。国本、蓬本に廻り補ふ」。

「古今の序に、『いにしへより、かくつたはるうちには、奈良の御時よりぞ、ひろまりける。かの御世や、哥の心をしろしめしたりけむ。かの御時、人丸なむ歌の聖なりける。かゝりけるさきの歌をあはせてなむ、万葉集と名付けられたりける』と書けるは、人丸が世に撰ばれたるやうにこそは聞ゆれ」といへば、

「まことに心得がたきことに侍り。その間に、ことば多く侍る上に、をしはかり思ひ給ふるに、貫之ひがごとを書くべきにあらず。たとひあやまちたりとも、帝の御覧しとがめずや侍らむ。しかれば、ことのことばにつきて、なぞらへころみるに、奈良の御世、りひろまりたと侍る、赤人、丸があひたてまつれる御世と聞えたり。「この人ぐをきて、またすぐれたる人ぐも、呉竹のよに聞え、かた糸のよりくに絶えがたくなむありける。かゝりけるさきの歌をあはせてなむ、万葉集と名付けられたりける」といへるは、赤人、丸が後の世に詠める哥どもをあはせて、大同の御世には、作られたるともや心得べからむ。奈良の御時といへるは、同じ名におはしませば、一つことなるやうなれども、万葉集の時には、人丸が世のあはねば、一つ御世にはあらざるべし。

竜田川紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかや絶えなむ

と詠ませ給へるは、かの人丸があひたてまつれる御世の御歌なるべきにやあらむ。古今の序に、「竜田川流るゝ紅葉は、帝の御目に錦と見え、春の朝、吉野山の桜

一 給へる―国本「侍へる」

は、人丸が目に雲とぞおぼえける」とあれば、後の帝の御製とは聞えざるべし。

ふるさとゝなりにし奈良の都にも色かはらずは花ぞ咲きける

と詠ませ給へるは、大同の御製なるべし。昔の奈良の帝ならば、ふるさとゝ詠ませ給へからず。この御歌は、奈良の帝の御歌とて、古今の春の下に入れたてまつれり。紅葉の錦の御歌は、秋の下、「よみ人知らず、ある人、奈良の帝の御歌なりとなむ」侍も、すこしのかはるしるしなきにあらず。

しかるのみならず、もし同じ帝ゝ申さば、おぼつかなきところ多く、もしあらぬ御時ならば、同じ御名にて、まがはせ給ぬべき上に、目録どもにも、

萩の露玉にぬかむと取れば消ぬよし見む人は枝ながら見よ

二 不知―国本「不知」

といふ御哥も、「よみ人不知。ある人、奈良の帝の御歌なりといふ」を加へて、

三 やー和本なし。国本、蓬本に拠り補ふ。

三首同じ御時なるやうに見ゆるは、目録の誤れるにやあらむ。おぼつかなき事、よく思ひ定めつべからむ人に、たづね申させ給べきことなるべし」といふに、

四 憶良―国本「憶良」

「それは、たちまちに定めえがたく侍なり。またこのついでに、たづねまうさむ」とて、「万葉集は、憶良が撰べるといふ人あるは、しか侍りけるにや」と問へば、「いかでさやうの事は、その時の人にも侍らず、其道のものにもあらぬ身

五 憶良―国本「憶良」

は、こまかに聞ゝとゞめ侍らむ。しかは侍れど、「憶良類聚歌林にはく」など、はるかなる人のことゝ見えてこそ、万葉集にはひきのせ侍なれ。天平五年の哥に

一 憶良―国本「憶良」

も、筑前守憶良などいひて侍なるは、はるかにさきの人にこそ侍なれ。大同にはあはずや侍けむ」などこそ申めりしか。

二 の―和本なし。目錄、国本、蓬本に拠り補ふ。

つくり物がたりのゆくゑ

三 まことに―国本「まこと」
 四 人の―和本、国本なし。蓬本に拠り補ふ。

またありし人の、「まことにや、昔の人の作り給へる源氏の物語に、さのみかたもなき事の、なよび艶なるを、もしほ草かき集め給へるによりて、後の世の煙とのみ聞え給こそ、艶にえならぬつまなれども、あぢきなく、とぶらひきこえまほしく」などいへば、返事には、

「まことに、世中には、かくのみ申しはべれば、ことはり知りたる人の侍しは、大和にも、唐土にも、文作りて人の心をゆかし、くらき心をみちびくは、常のことなり。妄語などいふべきにはあらず。わが身になきことを、あり顔にげに〜といひて、人のわるきをよしと思はせなどするこそ、〜ら〜ら〜などはいひて、罪得ることにはあれ。これはあらましなどやいふべからむ。綺語とも、雑穢語などはいふとも、さまで深き罪にはあらずやあらむ。生きとし生けるもの命をうしなひ、ありとある人の宝を奪ひ取りなどする深き罪あるも、奈落の底には沈むら

五 を―和本なし。国本、蓬本に拠り補ふ。

一 も―和本なし。国本、蓬本に拠り補ふ。
めども、いかなる報ありなど聞ゆることもなきに、これはかへりて、あやしく

もおぼゆべきことなるべし。

人の心をつけむことは、功德とこそなるべけれ、なさをかけ、艶ならむによりては、輪廻の業とはなるとも、奈落に沈むほどにやは侍らむ。この世のことだに知りがたく侍れど、唐土に白楽天と申ける人は、七十の巻物作りて、ことばを
5
いろへ、たとひをとりて、人の心をすゝめ給へりなど聞え給も、文殊の化身とこそは申めれ。仏も譬喩経などいひて、なき事を作り出し給て、説き置き給へるは、
こと虚妄ならずとこそは侍れ。女の御身にて、さばかりのことを作り給へるは、
たゞ人にはをせぬやうもや侍らむ。妙音観音など申、やむことなき聖たちの女
になり給て、法を説てこそ、人を道引給なれ」などいへば、供に具したるわらは
10
の聞ゝていふやう。

二 など―国本「などと」
三 給―国本なし。
四 給―国本なし。
「女になりて人を道引給とは、淨徳夫人の、帝を道引て、仏の御許にすゝめ、
ひがみたる心を改めなどし給ひ、勝鬘夫人の、親に文かはし給て、仏をほめたて
まつり給て、世の末までつたへなどし給こそ、普門の示現などもおぼえめ。これ
15
は男女の縁なることを、げにくと書き集めて、人の心に染めさせ、なさをの
みつくさむことは、いかゞはたうとき御法とも思ふべき」といへば、

五 は―和本なし。国本、蓬本に拠り補ふ。
「まことにしかはあれど、ことさまのなべてならぬ、めでたさのあまりに思ひ

一の和本 国本なし。蓬本に拠り補ふ。

つゞけ侍れば、物語などいひて、一卷二巻の書にもあらず、六十帖などまで作り給へる書の、すこしあだにかたほなる事もなくて、今も昔も、めでもてあそび、帝、后よりはじめて、えならず書きもち給て、御宝物とし給ふなどするも、世に類なく、また罪深くをはすなど、世に申あへるにつけても、なか／＼あやしくおぼえてこそ申侍つれ。

罪深きさまをも示して、人に仏の御名をもとなへさせ、とぶらひきこえむ人のために、道引給はしとなりぬべく、なさけある心ばへを知らせて、うき世に沈まむをも、よき道に引入、世のはかなきことを見せ、あしき道を出して、仏の道にすゝむ方もなかるべきにあらず。そのありさまを思ひつゞけ侍に、あるは別れをいたみて、優婆塞の戒を保ち、あるは女のいさぎよき道をまほりて、いさめごとにとたがはず、この世をすこしなどし給へるも、人の見ならふ心もあるべし。

また帝のおほえかぎりなくて、えならぬ宿世をはすれども、夢まぼろしのごとくにて、かくれ給へるなど、世のはかなきことを見む人、思ひ知りぬべし。又帝の位をすてゝ、おとうとに譲り給て、西山のほらに住み給なども、仏の道に入り給、深き御法にも通ふ御ありさまなり。提婆品に説給へる、昔の御門の御ありさまも、思出でられさせ給。ひとへに、男女のこののみやは侍。

おほかたは、智慧を離れては、闇にまどへる心をひるがへす道なし、まどひの

一 菩薩一和本、国本「并」

深ふかきによりて、うき世よの海うみの底そこひなきには、たゞよふわざなりとぞ、世親せしん菩薩ぼさつの作り給つくへる書あかのはしつ方かたにもものたまはずなれば、ものゝ心こころをわきまへ、悟さとりの道みちにむかひて、仏ぶつの御法みほりをもひろむる種たねとなし、あらしきことばも、なよびたることをも、第一義だいいちぎとかにも、かへし入れむは、仏ぶつの御みこゝろざしなるべし。

かくは申まをども、濁にごりに染しまぬ法ほりの御言みことならねば、露霜るそうとむすび置き給たまへる事ことばも、多く侍まをらむ。法ほりの朝日あさひによせて、たれもくくなさけ多くおほくをはしまさむ人は、もてあそばせ給たまはむにつけつゝも、心に染しめて思おぼさむによりても、とぶらひきこえ給たまはむぞ、いとゞ深ふかき契ちぎりなるべき」などいひつゞけ侍まをしに、行末ゆくすゑも忘わすれて、
 二 なほ聞きかまほしく、なごり多く侍まをしかども、日ひの暮くれにしかば、立たち別わかれはべりにき。

「いかでかまたはあひたてまつらむずる。来こむ世よに、うゑきのもとに仏ぶつとなりて、これがやうに法説ほりきて、人人ひとに聞きかせたてまつらばや」など申まし、こそ、たゞ人ひとともおほえ侍まをらざりしか。そのほど、申し処ところ、たづねさせ侍まをりしかども、えまたもあはでなむ。人ひとをつけて、たしかに見置まかせでと、くやしくのみおほえてこそ過すぎはべれ。

一 串一和本「早」。国本に擬り改む。

書写本云

承安五年之比、以或人之本書写畢

右兵衛権佐 在判

今所書写之本者、前右京権大夫信実朝臣本也